

オイカイワタチ 第一卷(本書)

その日、その時、地球を覆う程に膨大な数の「宇宙船」と「空飛ぶ円盤」が訪れる。

地球の人類同胞は、決して慌てたり恐れたりする必要はない。

彼ら宇宙船と宇宙人は、地球を攻撃に来たのではない。限りなき愛と援助の手を差し延べに来たのである。

彼ら宇宙人は、この太陽系は勿論、別の太陽系からもまた他の銀河系宇宙からも、はるばる地球とそこに住む人類を救うために訪れて来たのである。新しく生れ変わる地球と人類に対し、愛と真理の時代の訪れを告げるためにやって来たのである。

それは神様の久しく待たれた「約束の時」である。その時、天からは大いなるラッパが鳴り響くであろう。

聞け！そのラッパの声を！！

「金星のサナンダという、金星の者が来ました。

今は喜ばしい時です。

愛に満ちた者の、すべてに打ち勝つ時が来ました。

ただ、真の神を信じて、愛の心を持って、恐れずに

行きましょう。

本書を荒唐無稽と笑う人、SFの類いと片づける人、あるいはUFOを冒瀆する者だと責める人は多いであろう。

しかし、真似の出来ない、魂を語る、これらの言葉は、ある少数の人達には、彼の真の心でわかり、心の琴線に触れ、そして魂を揺り動かし、きっとこの地球での魂の目覚めの助けとなるであろう。

この人達は、来るべき新時代を招来するための大事業を遂行すべき宿命を背負った方々である。

私は、この方々のために本書を捧げたい。

## オイカイワタチに寄せて

九州大学名誉教授  
東京農業大学教授

塩 谷 勉

とにかく驚くべき書である。

地球上の物理学、いな自然科学的にはもちろん、哲学的、いな人文科学的な、総知識、総思惟を動員しても、理解したいところだらけである。したがってその内容は、SFの類いの企て及ぶところではない。どうしてこんな本が世に出たのか——と思う人が大多数であろう。しかしこれは、やっぱり何時かは出さねばならぬ本であった。そしてそれが、今出たというだけである。また出るべき時が来たということであろう。

しかし使命をもった人達（その多くは使命に気付いていないのだが）は、小学校を出ていなくともよく分かるはずである。円盤と宇宙人の理解のために必要なのは、知であるより遥かに多く、勘であり感であるからである。ひもといてみると、宇宙人の本質、宇宙人と霊界人との関係、宇宙人にも悪なる者が……等々、私にはよく分かるし、同感するところが多い。それでは私も、ワンダラーの一人だったのかなあ、という気持ちにもなる。

今にして思えば、重要な時期であったといわれる一九六〇年前後は、私もテレビ、ラジオに講演にと、何十回引っぱり回されたことだろうか。ヨーロッパで同志達との会合に、時間の短かさをかこったこともある。その後いつとなく遠ざかっていったのだったが、いま大起さんの、謙虚ではあるが自信に満ちた呼びかけを聴くとき、地球という遊星の大周期の到来」という目前の事実に、私は皆さんとともに、心から真摯しんしでありたいと思う。

昭和五十年四月二十日（日）、日本心靈科学協会東海支部の祖霊祭に本部理事として出席するため、名古屋に行くことになっていた。そのことを知った大起さんから「十九日の晩は、お話ししたいこともあるから是非一泊するよう。」とのお手紙を頂いた。初訪問の家庭に泊めて頂くなんて、いかにもおっくうになった近頃の私なのに、いとも簡

単にOKしてしまった。OKしておいて、自分でもなんか解げせない気持であった。

「話したいこと」の内容は、おおかた察しがついていた。しかしそれが、本書のゲラという形で私の前におかれたとき、手回しのよさ、というかタイミングのよさに軽い驚きを覚えた。しかしそれと同時に、身の引きしまる期待感が湧いてきたのである。

私は、ゲラを持ち帰って読んでよろしい、といわれた時は嬉しかったが、「感想なり批評なりを、どれだけの長さでもよいから……」という注文がつけられたとき、一瞬たじろいただけでなく、返上しようかとさえ思った。じつは十日刻みで四つも原稿の約束があったし、公私くさぐさのことどもが頭の中を占領していたからであり、また書く気になれるかどうかについても、確信がなかったからである。

しかし大起さんは、「書けなかったら書けなかったでいいのですよ」という。これは本書にも一貫して流れている、「無理してはならない。ほんとうに必要ななら、必要さに合せた形で神が書かせたもうであろう」という思想である。だから私も、あまり気にすることは要らなかった。その辺りのやりとりはいともスムーズに、私はゲラをお預かりした。

翌二十日の朝、私は御神前にぬかづいた。それは新居にふさわしく真新しい立派な神やしろであった。普通の自宅の神棚では感じられないような、高い神々の活き活きと働いておられる気配があった。それは「大起さんが何か大きな使命を果たしつつある」ことを、十分察するに足るものであった。また神やしろに隣あって祀られた先祖霊の方から、「大起に力を貸してやって欲しい」といわれた時、私はただ頭を深く垂れるだけであった。私に何ができるといふのだろう。しかしこれはタダ事ではない。

私がおこなった拙い短文を認めることになって、意味がありそうである。こんな経緯を書くことの中にも、本書の真価をお伝えするに役立つものが何かあるのだ、と思えてきたのであった。

# 目次

## 第一部 円盤・宇宙人と来訪の真相

第一章	四つのタイプ	6
第二章	空飛ぶ円盤	8
第三章	宇宙人	17
第四章	宇宙人との接触	25
第五章	宇宙人に会った三人の高校生	36
第六章	宇宙人は警告する	50

## 第二部 オイカイワタチ

第一章	宇宙のドラマ	91
第二章	奉仕する者	97
第三章	宇宙の秘密	103

第四章	オイカイワタチの使命	115
第五章	魂の目覚め	123
第六章	ワンダラーの聖戦	147
第七章	友よりの翰 <small>てがみ</small>	169
第八章	折々の記	177
終章	地球は新生する	202

## 附の部 宇宙を垣間見てかいまみ

第一章	宇宙人は語る	215
第二章	宇宙を垣間見て <small>かいまみ</small>	224
あとがき		232

第一部 円盤・宇宙人と来訪の真相

## 第二章 空飛ぶ円盤

古記録や宇宙人からの報告によれば、空飛ぶ円盤は数千年、数万年も前から地球を訪れているという。これは真実である。

しかし、これらの研究は他書に多く発表されているから、今更ここで取り上げるまでもないであろう。本書では、私達仲間の体験を主として語ることにしよう。

一九五八年以来、今日までに、私達の仲間は、さまざまに飛行する円盤を、少なくとも数百回、多い者は千回以上も目撃しているであろう。

その目撃例の多くは、夜空、天空に向って空飛ぶ円盤に想念を送った結果であった。空飛ぶ円盤は、テレパシーに応答するかのように、想念を送った通りの方向、飛び方、さまざまな飛行で答えてくれたのである。その最も激しかったのは一九六〇年であった。この年は、地球にとって大きな意味のある年であったのであろう。

天空の端から端まで一、二秒間に、その円盤は点滅しながら飛ぶ。下方より突如現われ、垂直線状に天空高く飛び上り、ピタリと静止したかと思うと横方向に天空彼方へアツという間に飛び去る。東空の果てから西空の果てへ、光のジグザグコースを描きながら瞬時に飛び去る。あるいはゆっくりと、又はすべるように。色は心が洗われるような鮮かさで。しかも飛び方、速度によってその放つ色は変わった。或はその円盤は呼吸するかのように見える。瞬時にパツと消えたり、型も様々なものを目撃し、時にはトラックのタイヤ程の大きさのものもあった。

これらの目撃例を書けば枚挙にいとまがないし、他の書物にも数多く述べられているのでその必要はないと思う。更に本書は目撃例をのべることが目的ではないのだ。

なぜなら、私達仲間はこの十数年間に、さまざまな飛び方を数多く目撃して来た体験からして、円盤がいつ、どこで、どのように飛んだか、色は、大きさは、その型は、速さはいかに書き綴っても、これらのことはさして重要ではない（勿論それにはそれなりの多少の意味はあるであろう）ということを知ったからである。

円盤の飛来には、もっとほかに重要な意味が隠されているのではないだろうか？

私達の今までの体験結果では、円盤の出現は、偶然の目撃（こちらでは偶然と思っても、彼ら宇宙人はその人に見せる目的があったかも知れない。多分見せる目的があったのであろう）と、想念伝達（テレパシー）による応答出現とがある。その目撃比率は前者

一に對し、後者は数十倍であった。

これらの体験からすると、円盤には高度の靈知性を有し、我々の想念を遙か彼方でキャッチして、瞬時、あるいは僅かな時間に飛来応答できる驚くべきスーパーマン、あるいは靈知性人ともいふべき宇宙人がのりくみ、これを操縦しているとしか考えられない。

そこで私達仲間、円盤とこれを操縦する宇宙人に向つて、大空へしばしば問いを發し、また色々な質問をこころみたのであった。例えば、当時（一九六〇年）円盤研究の同志を訪問した際に道に迷つた結果、円盤に導かれてその目的地に到着できたこともある。また円盤、宇宙人問題で重要な意味を持つ難解な事柄に遭遇して去就に困つた時、円盤の飛び方で教えを受けて解決したこともある。しかしこれらの質問を私事に使つたことは一度もなかった。

このようなやりとりが暫くの間続いた。当時の外国の文献には、宇宙人とのコンタクトの記事がしばしば載っている。従つて私達仲間が、円盤に搭乘する高度の靈知性人、即ち宇宙人とのコンタクトを強烈に願うようになって来たのも当然の成り行きであつた。

さて、ここで私達とその仲間が一九五八年頃より世に訴え叫び続けて来た、円盤、宇宙

人問題の歩みを少し振り返つて見ることにしよう。

当時（一九五八〜九年）、日本国内では円盤問題などは殆んどの人達の眼中になかつた。高度経済成長への足音は次第に高まり始めんとしていた。物質文化と企業欲の高波に世は覆われ、円盤、宇宙人問題などは見向きもされなかつた。まれに見る極く少数の研究者達は、世から氣違ひあつかいにされたり、あるいは秘密結社かいかわしい団体とその筋から疑われたりした。左翼の者からは極右と間違えられ、右翼の者からは極左と勘違いされ、ジャーナリストは我々の心と全く違つた面から我々を取り上げ、その結果として我々は誹謗と中傷の限りをつくして責め立てられることになつたのである。それは今日の比ではなかつた。

このような世相の中にあつて、私達仲間が一九五八年に世に訴えた檄文は、次のようなものであつた。

## 宣 言

もう黙っているわけにはゆかない。ありあまるほどの資料をかかえて物言わぬは腹ふく

るるわざである。

地球には今、驚天動地の大事件がおきつつある。おそらく現地球文明始まって以来の、最初にして最大の事件である。その事件とはすなわち、他の天体に住む宇宙人たちが、彼らの宇宙機に乗って私たちの地球をしばしば訪れていることである。

これは日本史における黒船の出現などとは到底比較にならぬ出来事である。あまり大きな未知の出来事に出会うと、人はそれを理解することができない。むしろ持ち合わせの知識によって、これを否定しようとする。特に日本においてこの傾向が強いようだ。しかしいくら否定しても事実は次々と積み重ねられて行く。その資料は現在（一九五八年）すでに膨大な数にのぼっているのである。

日本では残念ながら「空飛ぶ円盤」や「宇宙人」に関する資料は、ほんの一部しか紹介されていない。（一九五八年当時のことである。）アメリカではすでに十年前から空軍が本格的な研究を開始し、英、仏、ソ、ブラジル等でも政府および民間で現に研究されつつある。しかしそのことすら殆んどの人が知らない現状である。私達は、入手するおびただしい資料の中にいて、これ以上日本の現状を黙視することは、到底不可能となった。

### 宇宙時代の到来

地球人類の輝かしい黄金時代をつげる不思議な飛行物体、「空飛ぶ円盤」が他の天体より私たちを訪れている。

私たちがこの空飛ぶ円盤を契機とする新しい宇宙時代の文明をいかに受け入れ、いかなる方向へ進むかということこそ、正に地球の運命を決する重大な岐路である。

原水爆戦争の恐ろしさと言っても、悲しいかな現実とならねばその悲惨を感じることは出来ない人々の多い今日、他の遊星からの来訪者が来ていることを告げても仲々本当に出来ないのは、むしろ当然のことかも知れない。

しかし、現在その証拠は無数にあり、疑う余地はほとんどないのである。

一四九二年、コロンブスが新大陸を発見するまで多くの人々はさまざまに冷笑を彼にあげたが、それは真理への情熱に全生命を捧げた開拓者たちが、等しく受けねばならなかった試験の焔であった。

それにもかかわらず真理という無辺際の力は、彼の魂を常識や情性から跳躍させて、より深い真実へといざなったのである。

私たちは、今やいたずらに真実に目をおおうべきではない。地球上の政略や旧来の常識

にしがみついて、あたらしい真理の栄光をさえぎってはならない。私たちは現在すでに予期せざる文明の時期に遭遇しているのである。

真の宇宙時代とは、太陽系の各遊星と調和友好を実現する時代であり、地球にはいまだ理解されない文明の底深く隠された一切の神秘や不可解が、太陽の光にあてられ萬人に理解される時代である。

すでに今、その時代が他の遊星の兄弟たちによって地球上にもたらされようとしているのだ。

世の識者、全国民のみなさん、近視眼的現実から一度目を放して、遙かなる星々に思いをよせていただきたい。そして私たちが現在、どのような時代に生きているかを今一度静かに考えてみようではありませんか。

宇宙よりの使者「空飛ぶ円盤」「宇宙人」は来ている。

私たちは何をすべきであろうか。

黄金時代の栄光を迎えんとする中に立ちて！



このような檄文を世に発表して普及運動を展開するも、世の反響は小さく、誰もが返り見てはくれない。物欲と金もうけを目的として狂奔する世のさまを、私達は悲しんだものであった。

その頃、ブラジル海軍省が「空飛ぶ円盤」を公認したというニュースが入り、擲<sup>ヤ</sup>論<sup>ユ</sup>的に取り扱ったジャーナリスト達も少しは扱い方が変わるだろうと期待したのもつかの間、我国では殆んど記事とはならず終った。(現在はいろいろの書物に発表されている。)

このブラジル海軍省が公認した「円盤」は次のようなものである。

一九五八年一月六日、IGY(国際地球観測年)の観測にブラジルのエスピリト、サント州ビトリア港に派遣されたブラジル海軍の観測船アルミランテ・サルダナ号が同港を出港、沖合一二五キロメートルのトリニダット島附近を航行中、突如大型円盤が上空に現われ、ゆるやかに動きまわるのを船上にいた多数の人達やトリニダット島の住民が目撃、IGY観測隊員として同船に乗り込んでいたアルミロ・バラウナ氏が見事に連続三枚、これをカメラにキヤッチした。

この写真は上司立会のもとに現像、焼付けられ、直ちに海軍省へ送られた。同船のレーダーはこの前日にも同様の謎の飛翔物体をとらえており、C・バセラー海軍中佐は同じ水域に出現せるUFOはこれで四回目であると語り、ブラジル海軍省は九日間に亘る調査検

討の結果、遂にこれを公認する旨を発表し、全世界に多大の反響を巻き起したのである。極く最近では、一九七三年ブラジルの主都リオデジャネイロにおけるフットボールの公式試合の最中、グラウンド上空に多数の円盤が現われ、数千の観衆を前にして乱舞したのが目撃された。この試合は全ブラジルに実況放送中であったが、アナウンサーが暫く試合放送を中止して円盤乱舞の模様を実況放送したことは全世界に伝わり、多くの人達がこの事実を知った。このニュースは日本の新聞紙上にも掲載されたので記憶も新たなことであろう。

空飛ぶ円盤は、間違いなく他の遊星からこの地球に訪れているのだ!!

### 第三章 宇宙人

時間と空間の支配下にある三次元の地球に住む我々には、高周波数と高次元の遊星に住むと思われる宇宙人の全貌を語ることは、到底不可能である。しかし私達は、「群盲象を撫ず」の喩えの如く、私達の知り得たものは極めて僅かな部分でしかないことも充分承知の上で、かつて宇宙人について語ったことがある。

それは一九六〇年、私達によって発刊された図書「宇宙人は呼ぶ」の三五五頁に、編者のことばで私（秋吉春慶のペンネーム）が書いたものであるが、十数年を経た今日でも宇宙人についての説明の参考になると思うので、それに少々加筆して次に転載することにしよう。

「空飛ぶ円盤」は世界的話題となっているが、「円盤」の目撃は第三の眼、あるいは特殊な目でなければ見えないであろうと考えられているむきも相当にあるようである。勿論そのような目による円盤とのコンタクトもあるが、この肉眼でも充分見ることが証明されつつある。

最近、円盤研究者の間に実施されつつあるテレパシーによる円盤観測の成果が、各地で続々と現われつつある。それによって円盤は誰の目にも明確にかつ充分に見ることが出来ることの証明がされている。

円盤の目撃に続いて、宇宙人とのコンタクトが巷でいろいろ騒がれて、時には霊界との心霊通信と混同されている傾向もある。円盤研究者の中でも何れが正しいか迷わされている者もあるように思われるが、これらのことは時と共に次第に明るみに出されるであろう。私達は「円盤」の目撃と同様に「宇宙人」とのコンタクトには、

△サイキックコンタクト（適当な言葉が見当たらないので使用した。）

△直接コンタクト（機械類を用いたコンタクトも含む。）

大体この二面があると考えている。（詳細は後述する。）

世界各地で行われた、また行われつつあるこれらの報告からと、私達仲間の体験から判断した「宇宙人」について、私達は次のように考え、かつ確信している。

○ 宇宙人は私たちと同じ人間の姿をしており、霊的、精神的、肉体的にも極めて偉大な進化をとげ、またこの三面ともに地球人に比べて、遥かに高いバイブレーションの持ち主である。

（注）限らない無限の宇宙には、私達の考えもおよばない計り知れないことが数々あることは当然であろう。宇宙人についても、我々の想像もつかない姿形をした宇宙人も決まないと断定出来ない。以前から奇妙な姿形の宇宙人とのコンタクトの報告が各地にあることも聞いていた。しかし、私達仲間にはそのような体験が全くなかったということである。

○ 宇宙人は形ある人間の肉体を持っているが、地球人の肉体バイブレーションと、彼らの肉体バイブレーションとは、大きな差異があるように考えられる。

○ 宇宙人は物質的の肉体を持っていると主張する者、また宇宙人はエーテル的存在か、あるいは心霊的に類するものだと主張する者、この二つがあるが、これを二つに区別して

争うのは間違いである。宇宙人はこの両面を持ち、両面で自由に自己を表現できると思われる。

○ 彼らの中には第三密度（三次元と解してもよい）に属する者、第四密度（四次元と解してもよい）に属する者、更にもっと高密度に属する者もいるであろう。

彼らの属する第三密度を地球人が現在生活している第三次元と比較したとき、両者は文字としては同一表現であるが、両者のバイブレーションには、比較を絶する程の差異があると考えられる。まして第四密度に属する宇宙人は、地球人には仲々理解しがたい高度な存在であると思われる。

○ 彼らは物質体、半物質体、半エーテル体、エーテル体にて自己を表現することもでき、また自由に姿を消すこともできる。瞬時に遠地に移動し（テレポーテーション）そこで姿を現わすことができる。更に自己の投影を遙か彼方の地に現わし、その投影は第三者と語り合うことも出来る。

○ 宇宙人は心靈的、エーテル的存在であるとの主張と、物質的存在であるとの主張との間に争いが多くあるので、これについて宇宙人の言葉を借りよう。

『我々（宇宙人）は密度において、あなたがたの見る（五感で）能力を超えた周波数の段階にあります。そして意識的にその密度の振動率を落とす（下げる）ことによって、我々は貴方々の前に貴方々自身と同じ状態で現われるのです。

人は周波数の度合いが上るに従い、より高度の大なる密度を帯びて来ます。そして我々の水準においては、我々は貴方々のいる段階より遥かに高度の大なる密度なのです。

我々はより多くの光により構成された身体をもっているのです。周波数は物質の中を創造する光として通過します。この太陽系の中にある他の遊星から地球にやって来たこれらの多くの人々は、第四次の密度の存在です。』

○ 宇宙人とのコンタクト、あるいは通信方法にはあらゆる方法手段が用いられる。即ち、  
 “文字盤” “自動書記” “無線” “電話” “無線電話” “ラジオ” “テレビ” “交信機” “その他の機械” などがある。  
 更に、“直接会見” “テレパシーコンタクト” “トワイライト投影コンタクト” “サイキックコンタクト” など種々な方法がある。

しかし、その何れも、宇宙人はその語る相手の人に直接語られるものであって、霊媒

者を通じて語ることはない、彼ら（宇宙人）は私達に話したことがある。

○ 宇宙人は地球圏内の霊界人とは全く異なるのである。

○ 宇宙人からの通信と霊界人との通信は根本的に異なるが、たまたまその表現が同じようにみえる時もあるので、そのような時には両者が混同されやすい。

○ 地球圏内の霊界人が他の遊星を見聞することは、周波数の違いから全く不可能であるとの報告を受けている。

従って、霊媒者や、霊界通信による霊界人からの他の遊星見聞記には信用し兼ねるものがある。しかし、地球人が宇宙人の助けにより宇宙を垣間見ることがあるように、霊界人も宇宙人の助けにより宇宙を垣間見ることがあるかも知れない。けれども、そのような高い霊界人は、地球人に対して決して知ったかぶりはしないものである。しかし、いたずら好きの低い霊界人達が自らを「宇宙人」と自称することもあるようだ。研究者が迷わされるのはこの場合が多いようである。

サイキックコンタクトにおいて、それが霊界人であるか宇宙人であるかの区別は……、

その内容の格調が自ずと知らせてくれる。それは真<sup>まこと</sup>の心で必ず判るものである。このことについて宇宙人は次のように私達に教えてくれた。

『インスピレーションで判るのです。まこと<sup>まこと</sup>でまことの魂を語り、真似の出来ないテレパシーで語る私達の願いを判る方は、よくまこと<sup>まこと</sup>で判るのです。』

○ 宇宙人には、肉体を有しながら「食事」や「睡眠」を必要としない者と、必要とする者があるとの報告を受けている。

○ 宇宙人の名前に関しては何色々の説がなされているが、私達仲間の経験では、その名前がある意味をもってしているようである。使命により名前が変わるようであり、霊的進歩に応じた名前が付けられているようでもある。名前も言葉も「言霊<sup>ことばま</sup>」によって表現されているように考えられる。

○ 宇宙人には、

△地球のカルマを見て、大周期を迎える地球の運命を人類に知らせ、かつ援助の手を差し延べて新しい地球に誕生させ、この太陽系の他の遊星との統一均衡の場に地球

をおかんと献身する、善なる宇宙人、  
 △地球を破滅に導かんと意図する、悪なる宇宙人、  
 とがあるとの報告を私達は受けている。

他の遊星には高度な靈知性を有する宇宙人が確実に存在する。彼らは間違いなくこの地球に訪れているのだ!!

## 第四章 宇宙人との接触

一九六〇年には、殆んど毎日のように私達は円盤を目撃し、円盤とのテレパシーコンタクトを行った。この年は私達が最も多くの体験と学びを得た重要な時期であった。

この年の八月のある夜、私達の仲間の一人であるTS氏は、いつものように深夜近く、寢床に入った。彼は、まもなくしてアパートの表戸を叩く者がいるのに気が付いた。

この深夜に誰の訪問かといふがかりながら表戸を開け、なにげなくふと夜空を見上げると、彼はそこに円盤が鮮かな輝く光を発しながら、ゆっくりと、しかも彼を誘うが如くに近くの広場の方向にスーとすべるように飛んでゆくのを目撃したのである。近くの広場とは、名古屋市内にある今の名城公園である。

TS氏はその頃、円盤観測中、円盤（宇宙人）から送られるテレパシーをキャッチして円盤の飛行方向、出現の時間などをたびたび予告するようになっていた。そしてその的中率は一〇〇%に近かった。このようなことが続くうちに、彼は、円盤が近い時期に自分のア

パートの近くにある広場（今の名城公園）に着陸するという不思議な衝動にかられ始めた。しかもそれは日が経るに従い、益々激しくなってきた。

このような衝動がたび重なるに従い、彼には極く間近に宇宙人とのコンタクトが必ずあると深く思えてきてならなかった。

その年（一九六〇年）の九月に入った初めの日、T氏は極めて近い日に、宇宙人とのコンタクトができるという強い衝動と強い確信を得たのである。

ついにその日が来た。一九六〇年九月四日である。バンドマンという職業柄、彼がアパートに帰るのはいつも夜半、午前二時頃であった。今日は朝からその衝動と予感があったが、勤めが終り、帰り支度をする頃より、確信に満ちた信念と強い衝動がおそって来るのであった。

とうとう今日は会えるのだ！という確信は益々深まるのであったが、気持には淡々としたものがあつた。彼は、アパートの近くにある広場の方向に向って、目には見えないある何者かに誘われるように、導かれるように進んで行った。T氏はこれから必ず宇宙人に会えるという深い確信と衝動にかられながら歩き続けた。自然に足は指定された方へと動くのである。やがて指定された場所に到着した。心でここが指定された場所であると判るのであつた。

T氏は夜空を仰いで、いつもやるように円盤（宇宙人に）に対してテレパシー発信で呼びかけようと思つた。

その時、宇宙人が突如！眼前に姿を現したのである。T氏はこの時、不思議にもこの宇宙人は自己投影（自己投射ともいう）であると直感した。なぜ彼が自己投影であると判つたのか、理由はない。ただそれが判るのだった。

T氏の眼前には、現実立体的で、肉体を有する宇宙人が地上一メートル位の空中に浮いて立っている。それでもT氏の心には明確に眼前の宇宙人は自己投影であると理解出来る。彼はそんな自分を不思議に思つたりした。

この宇宙人は、年令が（地球における判断で）三〇才位の極めてノーブルな感じであり、知性と愛情が豊かにあふれるような、なんとも表現できない素晴らしい雰囲気をただよわした男性である。胸巾は広く身体はガッチリしており、ピツタリと合った上下つなぎのユニホームを着ている。彼は無言であるが、彼のいう言葉が一言、一言、明確に自分の脳裏の中に入って来る。彼の顔を見ると、彼の無言の言葉がはっきりと解つて来るのであつた。この時、T氏はこれがテレパシーであると判つた。

T氏はその宇宙人と会話を始めた。その会話を、あらかじめ用意して来た図画用紙に宇宙人の顔を見ながら書き始めた。その時の記録は次のとおりである。

T 氏「貴方の本体は今どこにおられるのですか？」  
宇宙人「今は砂漠にあります。」

T 氏「どここの砂漠ですか。」

宇宙人「サハラ砂漠です。」（注後記）

T 氏「私は、この地球に来る前は、どこの遊星にいましたか。」

宇宙人「貴方は土星から地球に来たのです。」

T 氏「その時の私の名前はなんと言いましたか。」

宇宙人「ミクロと言いました。そして貴方には子孫がいます。五代目で名前はナクロです。」

T 氏「それでは私の子孫は今、私達の前に現われる円盤の乗員であり、私達を訪れる宇宙人なのですね。」

——この時T氏は少々へんな感情を持った。——

宇宙人「そうです。今あなたの子孫は、大周期を迎える地球の重大な問題について重要な役目しております。」

「今あなたが質問される時、不審な感じを持たれたのですが、それはなんでもない事です。」

人間の真相ほんとうのすがたには、上も下も馬鹿も利口もないのです。皆一体です。

それがこの世界（地球上）において、いろいろの処ところに入ってくる（生れて来る）のですが……例えば、大政治家となるべき人、軍人となるべき人、科学者となるべき人など様々である。……それはその肉体を基準として考えた場合に、偉い人そうでない人に区別されるのですが、本来は皆同じものなのです。

これはいろいろの本にも述べてありますから、私が今更いう必要もありませんが、私達の世界（他の遊星）ではそのような事はありません。多少の差異はあれ、いろいろな役目を神様から授かっているのです。

地球でいう、他人より秀でた人だけ（政治家、科学者、宗教家、軍人等々）を地球のように区別して尊敬はしません。——この言葉は誤解を招くかも知れませんが——つまり個人一人一人をどんな人も同じように尊敬し、愛し合っております。特定の人としてその人を見ません。

話が外れましたが、そのように貴方の子孫は、貴方の後でも先でもありません。肉体的にはそうなるように見えますが、霊体においては同じです。だからそのような関係はないのです。

人は誰でも愛することが出来ます。地球人はそれが出来ないのです。それは肉

体を基準として考えるからです。

私達は誰でも愛しています。オリオンの人達でさえも愛しています。貴方はまだそのことに疑問を持っていますね。これが解らない内はまだ駄目です。三日間の内に証拠づけられます。私が証拠づけようとするのではなく、自然にそうなるのです。

早く心を直して欲しいと思います。私は貴方を愛します。決して墮落した心をさげすんではいけません。

では今日はこれで別れます。また会える日を楽しみに。さようなら。』

といい終ると、土星から来たという宇宙人は十数歩後に歩んで行ったように思った。その瞬間、姿は暗やみと共にかき消えるように去って行った。

(注)この頃、サハラ砂漠ではフランスが原爆実験を行う準備をしていた。

宇宙人は、この原爆実験の観察に来ているのであろうか？ 土星の本体はサハラ砂漠にあって、同時に自己投射で日本の名古屋市は今の名城公園の広場に姿を現わしたのである。

### 金星人ウイサールに会う

土星人に会った日から五日目、それは九月九日である。T氏は朝から前と同じような強い衝動を感じ、再び宇宙人に会える日であると確信した。そこでT氏は今回は沢山の質問をしようと予め、いろいろと質問事項を用意した。そして時の来るのを待って、以前と同じ場所に出かけて行ったのである。

向うの暗やみから歩いて来る姿を見て、T氏は宇宙人であると直感した。その宇宙人は、九月四日に会った土星人とは違った宇宙人であった。T氏は彼と顔を合せた瞬間、どこか遊星の方であろうかと心で思った。同時に自己投影でなく実在の宇宙人であると不思議に判るのであった。

宇宙人『私は金星の者です。名前はウイサールといいます。』

ウイサール『私はこれから貴方に信じることについて語りましょう。貴方は質問を色々と考えて来られましたね。質問に答える前にまず述べねばならないことがあります。』

『それは、あなたの今まで覚えた知識や潜在意識によって答えが出るものでないということですよ。そのような考えは捨てた方がよろしい。というのは、まず疑問を持つということは、そのものが見えないために起るのです。』

金星人ウイサルが、ここまで語った時、T氏は八例えば、円盤が流星によく似たように飛んだ時に疑いを持ってそれを見れば、あんな飛び方は円盤でなく流星ではないかと思いい、もしそれが本当の円盤であっても判らないことになる。Vと心の中で思った。

ウイサル『だから本当に見ていても、その人は見ていないのと同じ理屈になるのです。それでは本当のものを見ることは出来ません。逆に考えれば、全部のものを信じていればその中に本当のものも見る事が出来るのです。』

テレパシーは地球人の失った能力ですから、呼び戻さなくてはならないのです。例えば、目の見えない人にペンを持たせ、インクを与えます。彼はそれが何であるか分からないならば、それで字を書くことは出来ません。もし書けたとしても、本人は疑いを持っているから書いたことが解らないのです。自分が小さい時にインクだと思っていたのを違うとだまされ、イタズラをされたために信じないようになった。それが当り前だと思ふようになり、自分は、自分達は成長（進化）したと考えた。それが間違いとなり、テレパシーの感覚が失われたのです。』

ウイサル『だから信じるということは子供の気持ちになるのと同じことです。貴方がテレパシーを受けても、そういう気持ちがあるから中々進歩しない。すべてを信じるという事は、一つの段階です。』

疑いの心を持っていれば、私達のテレパシーを受けたとしても信じる事が出来ない。それは受けないのと同じことです。全部を信じていけば、私達の送ったテレパシーも受ける事が出来ますから、まず信じなければ次の段階に進む事は出来ません。』

ウイサル『次に、一体になる』ことについて語りましょう。』

一体になるということは、相手と自分が同じサイクルになることです。それには相手の動作、挙動、その人の生活環境を知らなければならぬ。そして、それをよくのみ込めば、自分がある程度その人になることができます。そして考えていることが合致すれば、その人を強く共振することが出来ます。』

ウイサル『貴方が自分の魂に高く目覚められますことを祈ります。愛する友よ、さようなら。』

## 宇宙人とのコンタクトには

宇宙人が地球人とコンタクトするのは、それなりの大きな意味があるからである。宇宙人にも地球人にも、この両者が果すべき役目と前々からの決められた約束があるのである。T氏の場合はT氏自身のためのものである。即ち、T氏が土星からある使命を持って地球に生れ変わった。その自覚に目覚め、T氏の前々からの約束の使命を果す上に必要な援助を与えるためのコンタクトである。

宇宙人とのコンタクトは大体二種類に分けることができる。

その一つは、地球人に宇宙人の存在と正しい世界を教えるためのコンタクト。この場合、コンタクトマンは宇宙人との約束を果すためにこれを公開する。

その二つは、ある使命を持って地球に生まれたその人自身の、果すべき使命の自覚と魂の目覚めを促す助けとなるコンタクト。これは本人自身のためのものであるから公開の必要がない。

T氏の場合は後者である。ある特殊な運命を持つ日本では、相当多くの方々が宇宙人とコンタクトしているはずであると私達は考えている。日本のこれらの方々の殆んどは後者に属する方であると思われる。だから公開されることはないであろう。前者のコンタクト

は大体において外国に多いように思われる。

## 第五章 宇宙人に会った三人の高校生

次の記録は私達の昔の仲間の一人で、当時福島県の白河第二高校の先生であったT M氏の教え子（当時高校生）の体験を、氏が忠実にまとめたものである。

（田）T M氏より報告のまま

それは一九六〇年一〇月三十一日（月曜日）の夜のことです。白河二高の生徒三人が授業を終えて（定時制高校）家に帰ろうとして、校門を出ようとなりました。時刻は九時半頃でした。三人が校門を右に曲ろうと思ったとたん、忽然と一人の男が左手から現われ、

『今晚ワ』

といました。ひょいと見ると、身長一六五―一七〇センチメートル位、背広を着て、ネクタイをつけ、白い手袋をし、黒っぽいステッキのようなものを持った三〇才位の男の

人が近よって来て、

『お話シシタイコトガアリマス。オイデ下サイマスカ？』

といました。三人はなんの考えもなく、軽い気持でその人について行きますと、その人は校門の前の国道を横切って向い側の細い道に入って行きました。この道は「高速バス道路」の方が続いています。一〇メートルほど歩いた時、突然その人が、

『アナタ方ワ、宇宙ニツイテ、ドウ思イマスカ？』

といました。三人の内の一人商業科一年のK N君は、たった今五分ほど前まで教室でT M先生から「空飛ぶ円盤」と「宇宙人」の話聞いていたばかりなので、そのことかなとかすかに頭に浮んだけれども、質問があまり突然なのでどう答えてよいか判らず黙っていました。他の二人の生徒（二年生の女子）も質問に答えず黙って歩いていました。五〇メートルほど行きますとその人は立ち止まりました。

八幡様（神社）の鳥居の前です。ここはT字路になっていて、右へ曲りますと第二小学校の校庭にでます。その曲り角に立ち止ってその人は話し始めました。

『地球ニ危機ガ迫ッテイマス。』

突然こんなことを言う人は頭が少し怪しいおかのではないかと三人は思いました。その人の胸は大きくガッチリしていました。メガネのようなものを掛けていましたが、普通のメガネ

とは形が少し異なるようでした。両端が上に釣り上がっているような格好のものでした。その人は確かに妙な男でしたが、自分達に害を及ぼすような様子は全然なく、非常に感じの良い、なんとも言えない良い雰囲気がある人から漂たよっていたので、安心した軽い気分になり、

「その危機というのはなんですか？」

とKN君が聞きました。するとその人は暫く黙っていましたが、

『地球ノフ、タツノ国ガ爆発シソウニナツテイマス。』

といい、三人の顔を見ながら、

『モシ地球ニ危機ガ来タラ、アナタ方ドウシマスカ？』

というのでKN君が、

「どうしようもない。」

と答えると、その人は、

『アル星ノ人達ワ、ソレヲ救ウコトモ出来マス。』

といい、更に、

『ソノタメニ空飛ブ円盤ガ地球ニヤツテ来テイルノデス。』

といいました。その人の話す言葉は完全な標準語でしたが、話し方は流暢ではなく、言

葉を一つ一つ思い出しながらしゃべる様でした。外国人がしゃべる時はこんなだろうか？三人はそう思いました。しかしその人の話し方は真剣そのものでした。

『アナタ方ワ、空飛ブ円盤ヲ見タコトガアリマスカ？』

とその人が聞きました。KN君は二年ほど前に一度それらしいのを見たことがあるので、軽くうなずきました。他の二人の女生徒は、

「見たことはありません。」

と答えました。

『ソウデスカ。』

とその人はいいその話は一応打ち切りとなりました。

『アナタ方ワ、自分ノ身体ノ何十倍モアル重サノ物ヲ持ツコトガ出来マスカ？』

その人は急に妙な質問をしました。

「とてもじゃない、できっこない。」

とKN君がいうと、その人は、

『アル星ノ人達ワ出来ルノデス。片手デ軽ク持テマス。イヤ、指一本デモ持テマス。重力ノコントロールガ出来ルノデス。』

といいました。妙な話になったな、この人の頭はマトモなのだろうか？しかし、まあ、

面白そうな話だからもう暫く聞いてやれ、とKN君は思いました。二人の女生徒は夜おそくなる困るので早く帰りたいと思いましたが、しかし話をもっと聞きたいという気もしました。

『アル星ノ人達ワ、地球人ノヨウニ1・2・3トイウフウニワ年ヲ数エナイノデス。アル星ノ人達ワ、年令トイウモノノ考エ方ガ地球ノ人ト全然違ウノデス。』

『アル星ノ人達ワ、滅多ニ子供ヲ生マナイノデス。死ヌトユウコトモ珍ラシイノデス。』  
『アル星ノ人達ノ魂ガ地球デ生マレ変ツテイルトユウ人ガ沢山アリマス。ソノ人達ノ性質ワ決シテ遺伝シマセン。コノ人達デモ、悪ニ向ウコトガアリ得ルノデスガ、アル星ノ人達ワ、ソレヲ防グコトガ出来マス。』

その人は他の遊星から地球に生れ変りをした人の員数まで喋りましたが、三人はその数字は忘れてしまいました。KN君はTM先生から聞いたことのある「リング」の事かなと思いました。その人は話をしながら、頻りに左手につけた時計の様なものを擦っていました。三人はなぜそんなことをするのか、と思ったけれども、聞いてはみませんでした。

『アナタ方ワ、円盤ヲ見タイデスカ?』

とその人が言うので、

「見たいです。」

と三人が答えますと、

『空ヲ見ナサイ。』

とその人がいました。すると五秒ほどして北東の方に円い形の物体が現われました。その物体の底の中央部は突き出ていましたが、まわりが底に落ち込んでいました。その円い物体は向って右から左へ（北東から北西へ）相当な速さで飛んでゆきました。見かけの大きさは、教室の天井にタライをくっつけた位でした。霧が深く、形は余りはっきりとは見えませんでした。約十秒後、それは北西の方向に飛び去って見えなくなりました。三人は呆然として不思議な飛行物体を見ていました。

『見マシタカ?』

とその人が言うので、

「見ました。」

と三人は答えました。

『私の話ヲ信ジマスカ?』

とその人がいましたので、KN君は、

「信じます。」

といました。しかし、一人の女生徒は、

「あれは地球のものではないのですか？」  
 といいました。するとその人は、

『私ワ、地球ノ科学技術デワアノヨウナ性能ノ高イモノワ造レナイト思イマスネ。』  
 といいました。そういわれて、あれは確かに円盤かも知れないと、その女生徒も思いました。

『アル星ノ人達ワ、三次元ノ存在ナノデス。』

とその人はまた妙なことをいい始めました。

『アル星ノ人達ワ、滅多ニ病氣ヲシナイノデス。モシシテモ、直グニナオリマス。怪我ヲシテモ、直グニナオリマス。薬ナドツケル必要ワアリマセン。』

三人は円盤を見たので、その人の話を信ずる気になっていましたが、また妙なことをいわれたのでそれはどうかな、という気になりました。すると、

『私ノ身体モ、直グナオリマスヨ。』

とその人はいつて、缶切りのようなものを取り出し、自分で自分の手の甲を切ってみせました。血が流れ落ちました。

『一秒デ止リマス。』

とその人がいました。すると一秒たつと、不思議なことに血がピタリと止っただけで

なく、キズ跡も全く見えなくなりました。不思議だ。しかし、何か手品でも使ったのではないだろうか？と置いていきますと、

『貴方が切ッテモイデスヨ。』

といいつて、その缶切りみたいなものをその人はKN君に手渡しました。KN君がそれを受け取りますと、相手が腕を手のひらを上にして突き出しましたので、試しに切ってみようかと思いましたが、ちょっと不安になって、

「本当に大丈夫ですか？」

というと、

『私ノ話ヲ疑ウノデスカ…：大丈夫デス。』

というので腕の手前の方を切ってみました。血管が切れて血が吹き出し、ポタリ、ポタリと地面に落ち、黒っぽく見えるシミとなりました。

『コレワ三秒デ止リマス。』

すると不思議、三秒で血がピタリと止ったばかりか、キズ跡も影も形もなくなり、大地に落ちた血まで見えなくなっていました。

『モウ一度切ッテモイデスヨ。』

というので、もう一度、こんどは肘ひじに近いところを切ってみました。同じように血は

三秒位いでピタリと止り、キズ跡さえ残らなかったので、この人はひよっとすると宇宙人ではないだろうかと思ひ、

「あなたはどのような人ですか？」

「あなたはどの星から来たのですか？」

と聞きますと、その人は暫く黙っていました、

『時が来、バ判リマス。』（傍点編著者）

といい、それ以上はいいませんでした。その時、ライトをつけた自転車が向うからやって来ました。その人は三人を促して脇道へ数歩あゆみ、自転車が去るとまた元の位置に戻りました。KN君は彼が宇宙人であると思う心が次第に大きく強くなりました。

「宇宙の言葉はどんな言葉ですか？」

と聞いてみますと、

『全地球の言葉ヲ集メタヨウナモノデス。』

とその人は答えました。

『アル星ノ人達ワ、イクツモノ星ニ直グニ連絡スルコトガ出来ルノデス。』

『アル星ノ人達ワ、決シテ武力ヲ使イマセン。円盤ニワ武器ヲ積ンデイマセン。戦争ノナイ星ノ人達ワ争ウトユウコトガ出来ナイノデス。然シ、力ガナイトユウ訳デワア

リマセン。ヤロウト思エバ、ボタン一ツデ地球ノ活動ヲ全テ止メルコトモ出来マス。

然シアル星ノ人達ワ、アクマデモ話シ合イデ理解シテモラウノデス。』

『私ワ、今マデ、色々な人ニ何度モ話ヲシマシタ。然シ信ジテクレル人ワ極メテ僅カシカナク、私ワ殆ンドノ場合、完全ニ氣違イ扱イニサレマシタ。ソレデ私ワ、モウ二度ト話ヲシタクナイト思イマシタ。シカシ……私ワ自分ノ任務ヲ果シタイノデス。』

『アル星ノ人達ワ殆ンド諦メマシタ。』

『然シ、今ノ地球ノ上空ヲ飛ンデイル円盤ニ乗ッテイル人達ワ諦メテオリマセン。』  
その人は、三人にいました。

『アナタ方ワ、私ノ話ヲ信ジマスカ？』

三人は答えました。

「信じます。」

すると、その人は、

『或、ル、事、ガ、起、ル、ト、宇宙船ノ大編隊ガ現ワレマス。』（傍点編著者）  
といいました。

「それは確かですか？」

とKN君が聞きますと、

『必ず現ワレマス。』

とその人は断言しました。それで一人の女性徒が、

「なんのために、現われるのですか？」

と聞きますと、その人はジーンと黙ってしまつて暫く答えませんでした。やがて、

『地球ノ人達ニ、宇宙船が存在スルトイウコトヲ信ジテモラウタメデス。ソレカラ、私達ノ話が本当デアルト信ジテモラウタメデス。』(傍点編著者)といいました。

「それは日本の上空だけに現われるのですか？」

とKN君が聞きますと、

『全地球殆ンド同時デス。然シ、ソレガ夜ニナルカ、昼ニナルカワ、今ワイエマセン。』

「お空の方から、その時地球の人にかかっているのですか？」

『皆ンナニ判ル言葉デ知ラサレマス。喋ル人ワ一人ダケデワナイノデス。ドコノ国人ニデモ判ル様ニ知ラサレマス。』

「地球に円盤の基地のようなものはありますか？」

『アリマス。』

「土の中ですか？」

『違イマス。』

「山の中ですか？」

『違イマス。』

「それではどこにありますか？」

『地球ノ人ニ見エナイトコロデス。ドンナ小サイ国ニモ円盤ワ十個以上ワアルト私ワ思イマスネ。地球ノ人ニワ見エナイ方法デ隠サレテアルノデス。』

それから、

『アナタ方ワ私ニマタ会イタイト思エバ、会ウコトガ出来マス。』

というので、

「いつでも会えるのですか？」

と聞きますと、

『イツデモトユウ訳ニワユキマセン。コチラニモ色々都合ガアリマス。然シ会イタイトサエ思エバ適当ナ時期ニ必ず会エマス。』

それから、

『今夜ノコトワ、個人的ナコトニシテオキナサイ。』

「どうしてですか？」

『話ヲシテモ信ジテモラエナイデショウ。私ワアナタ方ヲ気違イ扱イニサセタクアリマセン。』

「独りでなく、三人で会ったと言えれば信じてくれるのではないですか？」

『オソラクソノ反対デショウ。』

「どうして私達三人に話をしたのですか？」

この間にはついに答が得られませんでした。

『今夜ノコトヲ記念シテ、握手シマショウ。』

とその人がいいましたので、三人は交る交るその人と握手しました。

『私ガ話ヲシタカッタコトワ、全テ話シマシタ。』

『オ互ニソノ時ヲ待チマショウ。』（傍点編著者）

この言葉を最後に、その人は第二小学校の校庭の方に歩いて行き、忽ち見えなくなりました。

三人の高校生は高速バス道路の方へ行き、バス道路を通過して（その方が近道なので）帰って行きました。暫くの間、三人は一言も口をきかず黙々と歩み続けました。家に帰って時計を見たら午後十一時三十分になっていました。

三人の高校生から報告を受けたTM氏は、十一月六日、夜十時三十分頃、この宇宙人がどの系統の宇宙人であるかを、いつもテレパシーコンタクトする円盤に聞いて見ようと思ひ、この宇宙人が、オリオン系であれば断続的にパツパツと光るように、また、天使系（善なる）であれば、好意的な方であれば一定の明るさで滑るように、飛んで頂きたいと念じて空を見上げると、約二十秒後、南の空、やや高めに、西に向ってオレンジ色の輝く円盤がゆるやかなサイン曲線を描いて、一定の明るさで、流れるように、滑るように飛ぶのを目撃した。

## 第六章 宇宙人は警告する！

宇宙人とのコンタクトには、直接会見、テレパシーコンタクト、サイキックコンタクト、電話、無線機、文字盤、自動書記、ラジオ、交信機など、いろいろの手段を用いるコンタクト、あるいは特殊な例としては、『円盤・宇宙人・来訪の真相』を語る講演者（地球人の姿が講演中に消えて宇宙人に変貌し、その宇宙人が講演する、などと各種のタイプがあるが、何れにしても宇宙人とのコンタクトは、世界各国で数多く行われている筈である。

しかし、そのコンタクトストーリーを世間に公表した人達は極めて僅かしかない。それにはそれなりの理由がある。前にも述べたごとく、宇宙人とのコンタクトには、個人用とPR用とがあるようである。

個人用は、その人が特定の使命を果す上に必要な援助と目覚めを促すためのものであるから、その多くは公表されないのであろうし、またその必要もないのである。

しかし、PR用コンタクトマンには宇宙人との約束がある。だから、その人は、忍耐強

く宇宙人との約束を果そうと努力する。だが、努力すれば努力する程世間の目は冷たく、世間の人達は信用しないばかりか全く受けつけず、完全な気遣い扱いにされてしまう。社会的信用は落ち、大切な職業からは追われ、研究機関からは降ろされ、生活に困るまでに迫害されて、ついに、身を守るため沈黙してしまった者は余りにも多いのである。

しかし、夜明は間近に迫った。今まで発表出来なかった真実を、黎明が近づくにつれ明らかにせねばならない時に来ているのだ！

本書はその中の一つであると確信する。

次に紹介するのは、ジョージ・H・ウィリアムスのグループが宇宙人から受けたメッセージ（一九六〇年私が編集、印刷、発刊した『宇宙交信機は語る』より）の一部抜粋を、編著者が再編成したものである。尚、本文中の傍点は、後章との関係を利用するため編著者が付けたものである。

これをここに取り上げたのは、本書の真意を傍証し、かつ解りやすくせんためのものである。ちなみに、これらのメッセージは、私達仲間が宇宙人とコンタクトを始めた当初、私達をある重大な事柄へ導く順序として宇宙人から教え知らされた内容と、きわめてよくにているということを付け加えておこう。

(注) ジョージ・H・ウイリアムソンは、ワンダラーとして米国に生れ、特

に円盤、宇宙人に関する文献を世界に発表した。即ち、彼はPR用コ  
ンタクトマンとしての使命を果たして地球の肉体をぬぎ去り、現在は彼  
の魂の故郷である遊星に帰っている。彼は米国に生れる前世は日本に  
も生れていた。

一九五二年八月二日

『マサール(編著者注・火星、又の名マルス)よりサラス(地球)へ。』

『心の平和を保って下さい。運命は一つです。宇宙の真理に逆ってはいけません。地球の文化は死せる文化です。地球のみなさん方に協力して頂きたいのです。もう余り時間がありません。』

『今や、善なる力も、悪なる力も働いています。地球を救おうと思うなら、判った方々(編著者注・地球のカルマの判った方々)は団結しなくてははいけません。できるだけ早

く私達と連絡して下さい。他の沢山の遊星も一つの組織に加わっています。なぜ地球人はこれを信じないでしょうか?(編著者注・地球以外の沢山の遊星は一つの愛の組織で地球を救おうと努力している。)皆さんはもう研究(円盤・宇宙人の)を始めたではありませんか。今度は皆さんの番です。(編著者注・彼ら宇宙人には準備万端整っている、今度は地球人皆さんの番です。と彼らはいっているのである。)

上空を見上げて、それぞれの宇宙機と連絡を失わぬようにして下さい。(編著者注・無数に飛びかう円盤もそれぞれの役割があつて、どの円盤でも無秩序に我々とコンタクトするのはない。AのグループとのコンタクトはAの円盤・宇宙人のグループが、Bのグループまたは個人にはBの円盤・宇宙人グループが、それぞれ役割を持って当っているようである。)

『私たちは関心(編著者注・宇宙人とその来訪目的に)を持つ人たちの味方です。しかし、物欲的な関心には味方しません。物欲とは、創造主や、その子らの意志を無視して自我を守ろうとする、愚かな心のことです。』

私たちは、七万五千年以上も前から地球を観察して来ました。地球調査はずい分前から始まったのです。』

『小さな一点にすぎない地球の上に悪人が栄えるのを、私たちが黙っておられるでしょ

うか？ 時が流れ始めて以来、あらゆる人間の探し求めている答を知りたかったら、立ち上って下さい。皆さんも解答を見出したいと熱望しておられるはずですよ。』

『私たちのグループも地球と同じようなものです。つまり、私たちは宇宙の代表であり、皆さんは地球の代表なのです。（編著者注・円盤・宇宙人とその来訪目的を宇宙人から学ぼうとする人を、地球を救う代表であると彼らはいうのである。これに疑問を持つ人は多いであろうが、判る時が必ず来るのである。）

進化の周期は、『計時係』というグループが計測しています。以前は、私たちも地球人に干渉しようと思いませんでした。万人は自然に進化すべきものなのですから。

でも私たちは、また新たな破壊が（編著者注・昔、他の遊星において行われた原水爆の大破壊がまたこの地球で）起ころうとしているのを、傍観するわけにはゆきません。

私たちはみな、同じ創造主の御手により創られたのです。警告します、地球では恐ろしい爆発が起る危機に満ちております。これは地球人が起こしたものです。

宇宙人にも悪心をいだく者は沢山いますが、その人たちも地球の破壊を企だてて、地球の悪人と連絡を取ることでしよう。

地球の心正しい人は、ベン（善の意）なる宇宙人と連絡して下さい。

ある程度の破壊は必ず起るでしょう。私たちは警戒しています。

繰り返しますが、心正しき人達は団結して下さい。心の団結です。私達と連絡する連絡団体を作って下さい。それは、愛と真理に結ばれた私達との連絡団体です。』

『こちらはカダール・ラクです。私は母船の宇宙会議の議長です。全宇宙から選ばれたのです。』

地球上の道路にも私たちの仲間は歩いています。見たことはありませんか？ 第九ベール（円盤のこと）編隊は、火星から地球に派遣されたものです。一九五六年までには第九ベール編隊が地球に着陸するはずですよ。

皆さんが私たちを選んだように、私たちはみなさんを選びましたし、みなさんの目的や使命も私たちにはすっかり判っています。それは最初から知っていたのです。地球のためにしっかりと働いて下さい。』

『ある者は地球から他の星に移されるでしょう。ある者は残されるでしょう。黒と白とを区別することです。これは人種の意味ではありません。心の良い人と、そうでない人のことです。』

肉体のまゝ救われる人は僅かですが、それは地球人によって、地球を再建するためです。変化は必ず起るでしょう。そうです。地球は生れ変わるのです、それには多くの敵と戦わねばなりません。

宇宙の力と創造主の御心が、皆さんの行動も計画も導いて下さいます。

どんなに研究したところで、人間は死ぬべきものだと言われ（編著者注・暗黒の力、悪の力）は主張することでしょうが、それでは善（ベン）なる者たちの計画は何一つ達成できません。』

『こちらは宇宙連絡隊のアンカール二二号です。最近火星で爆発が起ったという記事を読んだことがあるでしょう。あれは私達の仕業ではありません。地球の原爆実験の影響で、恐ろしい火山爆発が火星に起ったのです。ベルとは円盤のことです。私達は、水晶のベル、といます。』

地球の人類は目覚めなくてははいけません。さもなくば文明は滅びてしまうでしょう。時がたつにつれ真剣な人達が、みなさんのグループに参加して来ることでしょう。』

八月九日

『私は火星のレッガです。会議が開かれました。今夜は皆さんも集まりましたね。ここにはオアラも来ています。彼は土星の代表なのです。興味ある話題を二、三お伝えします。驚かれるでしょうが、これは事実なのです。それを知っている人は地球にもおられます。あなた方の太陽は（同時に私たちのでもあります）白熱した焰の塊ではありません。』

本当は冷たい天体なのです。地球の大天文学者の一人も、そう信じて発表しています。太陽の紅焰は、地球のオーロラと同じく冷たいものです。光を発するには、必ずしも熱を必要としません。太陽光線にふれて温かく感じるのは太陽が熱を放散しているからだと思うでしょうが、これは太陽から放射されるある種の力の線が地球磁場と摩擦を生じて、熱に変化するのです。太陽についてはまだ珍しいことがあります。今はお話しできません。外部空間から見れば、太陽も地球から見た場合のように輝いてはいないのです。』

八月十七日

『私はゾーです。火星の連絡隊の指揮官ですが、故郷は海王星です。間もなく冥王星に行くことになっています。冥王星は、決して地球の科学者が想像しているような冷たい、荒れ果てた世界ではありません。火星も酷熱の乾いた世界ではないのです。』

磁力さえ理解すれば、いかなる遊星も太陽からの距離とは無関係にほぼ一定の温度を保っているわけが判るでしょう。』

地球は余りたびたび戦争があったため、大変遅れているのです。地球人の多くは腐敗しています。私達はいつも、すべての人の上に平和が訪れるように祈ります。』

『もう一度ゾーです。』

、塩漬けして、おいたリンゴのところへ我らは行く。』

今は、この奇妙な言葉の意味は判らないでしょうが、やがて判る、日が来ます。これは私たちの古い予言にある言葉です。』

『儀式によって救われます。』

編著者注・この儀式とは、**わくたまの儀式**、**祝事いわいごとの儀式**をさし、これに

よって地球と人類は救われる。この儀式は宇宙の儀式、神様

の儀式である。これは重要な意味を秘めている。やがて判る

時が来るであろう。

『私たちは警告に来たのです。皆さんの間に不和があれば連絡はしません。落ち着いて静かにして下さい。私たちは、ただ全人類への愛があるだけです。』

『こんど天王星で会議が開かれます。それまでに地球をどうするか、決定しなくてはなりません。』

『原水爆は宇宙の釣合を破るものです。水爆なども遊んでいると、地球は爆発して、』

小遊星群になり果ててしまう恐れがあります。このことは、大昔、第五軌道遊星にも起こったのです。私たちもその遊星の人達の行ないを知ってはいましたが、手を下さなかつたのです。しかし、神の創造物がまたもや失われてゆく、そのような破局が再び、こんどは地球に起きるのを傍観していることは出来ません。

第五軌道遊星が原水爆によって爆発崩壊すると、火星の火山も大爆発を起こしました。沢山の人が死んだのです。私達も危く太陽系から投げ出されて滅びてしまうところでしたが、大急ぎで人工衛星を二個建造したので助かりました。

フォボスとデイモス(編著者注・火星の二個の衛星名)が、岩石で出来ているにしては光りすぎることに気付いた地球の科学者もありますが、それは正しいのです。本当は金属性なのです。この二個の月のおかげで、不安定な状態は改善され、一個の遊星(火星)が救われたのです。』

編著者注・ワシントン海軍天文台のアサフ・ホールが火星の衛星二個を発見

したのは、一八七七年である。これが、世界中の天文学者の中で最

初の発見である。ところがこれより一五一年も前に、即ち一七二六

年に書かれたジョン・スウィフトの小説『ガリバー旅行記』の

中に、ラピエタという国の天文学者が火星に衛星を二個発見し、そ

の衛星は奇妙な性質を示すことが記されている。……一体スイッチトは、そんな昔に火星に二個の衛星があることをどうして知ったのだろうか？不思議というほかない。

八月二十三日

『こちらはゾーです。オリオン星座のことをお話ししなくてはなりません。オリオン座には、宇宙征服を企てている者が多数いるのです。』

私達が来たのはそのことを警告するためでもあります。しかし、地球には感受性の鋭い人が余りにも少なく、中々見当りませんでした。

みなさんは、私たちにとって何よりの助けとなります。これからも連絡を致します。感受性を高めて下さい。魂に目覚めて下さい。』

『こちらはナー九号です。オリオンの各太陽系は地球とよく似ています。善悪の原理は宇宙のどこでも同じことです。』

この太陽系では地球が最も未開な状態にあるのですが、宇宙全体から言えば、地球以上に進化した遊星もあると同時に地球以下の遊星もあります。宇宙には始まりも終りもありません。大小の差も地位の高低もないのです。すべては同じ、完全への道”を辿り

つゝあるのです。

お伝えしなくてはなりません、間もなくオリオン人が四角の宇宙機に乗って地球にやって来るでしょう。

決断すべき時は近づきました。一九五三年には、私たちが皆さんの人目にふれる機会もずっと増えることでしょう。地球に着陸したいのですが、その時は、皆さん、力になって下さるでしょうね。

私達は幸福です。忍耐して下さい。地球が余りにも邪悪すぎると心配している私達の仲間もいます。

皆さんは、宇宙旅行には、どの位の時間がかかるだろうと考えていますか。私達は、地球でいう意味での、飛行”をするのではありません。磁力線にそって、滑空”するのです。漂流するといっても良いでしょう。燃料の必要はありません。遊星が軌道を進行するのと同じように、共振電磁場”を利用するのです。』

『レッガです。すべてに皆さんは抜かりのないようにことを運んで下さい。皆さんの相手は地球全体です。』

もう私達の上司も決断しなくてはいけません。地球の万物の運命は、その決断にかかっています。』

さて、宇宙人は一体どんな形をしているのだろうか？ これは多くの人の関心を集めた問題でもあり、読者にも関心あることと思う。

しかし、宇宙人は一般に、自己を語ることは少ない。彼らは奉仕のために来たのであり、この地球の危急存亡の時には、他に重要な仕事や使命を果すための任務が沢山あるからである。

しかし、彼らも時には少し位いその疑問や質問に答えてくれる時があるのである。

『もう一度ゾーからお話しします。私の身長は1m70cm、体重は六五kgです。髪の毛は赤褐色で、地球風にいえば二五才ですが、もう結婚しています。子供もありません。私たちは、生れた時から結婚の相手が決っているのです。そのうちに直接お目にかかれる日が来ます。』

こちらでは皆たのしい生活を送っていますが、そのことはまだ聞かないで下さい。皆さんの中で私達の楽器のことを知りたがっている人がいましたが、私たちにも楽器はありません。

今晚私たちは地球の第一の月に行きます。ところで、月の火口（地球ではそう呼んでいる。）は、隕石や火山活動のため出来たものではありません。激しい渦動によるものです。今夜は第一の月の基地に泊ります。』

『もう一度、ゾーです。私も火星編隊の一員です。土星の法廷から着陸の許可が出ました。宇宙法廷では、天王星を説得しなければなりません。土星は、裁きの座“なのです。しかし、地球で考えるような裁きとは違うのです。』

オリオンは地球の破壊を企てています。』

この太陽系の遊星は九個だけではありません。冥王星の外側に、バトン（ペトラスともいう。）という遊星があります。太陽（編著者注・クレラオス）と水星（編著者注・ハルス）との間に二個の遊星（編著者注・カールとワルス）があり、全部で十二個になります。』

『ゾーです。宇宙機には通常七種類あります。一つは、一人乃至二人乗りの偵察機で、裏返しにしたような飛び方をします。底部にはアンテナ状の突起があります。』

もう一つは、三日月のような形で、これは大円盤編隊を指揮するときの司令機です。三番目は、地球で葉巻型宇宙機と呼んでいる母船です。三日月型と葉巻型は全長数キロメートルもある大型機で、“緑色の火球”を発射します。この火球は地球上空で爆発して、磁気断層線の写真を撮影するのです。“火球”を知ったら、皆さんはびっくりするでしょう。これは地球の遠隔操縦航空機とは少し違うのです。普通の円盤は、自力で遊星間飛行は出来ません。その間は、母船内部に格納されて運ばれるのです。』

それから、宇宙機には、「円管」のような形をしたものや、丸い形で中央に穴のある「ドーナツ型」や、「三角形」のものなど色々あります。

力の場の強さは、宇宙機の種類によって違います。宇宙機は、形が平たくなるほど強い力の場を持っているのです。

それから、直径数センチメートルの「小型円盤」は、用途は違いますが、やはり火球クラスに属します。

地球もいわば一種の宇宙機なのです。私たちの宇宙機の機能と同様です。

よく注意して下さい。私たちは生命の本質を理解していません。死というものは存在しないのです。生命はすべて永遠なのですから。地球人は死を恐れますが、死とは靈魂が大きな進化をする喜ぶべき機会なのです。地球の万物が救われるように祈りなさい。愛する友よ、おやすみなさい。』

八月二十五日

『火星のレッガです。はつきりさせておきたいことが少しあります。皆さんが疑問に思っていることです。皆さんは、私たちの医学はずいぶん進歩していることだろうと思っ  
ていますが、それは違います。つまり、私たちには病気というものがないからです。肉

体が病に侵されるのは、生き方が正しくないからです。

私たちは地球人より遥かに進歩しています。地球では一年単位でものを考えますが、その考え方でいえば、私たちは地球人より数千年以上も進歩しているわけです。金星などはそれ以上ですし、中には金星以上に更に進化した遊星もあります。進化という点では、私たちの火星は、地球のすぐ上位にあるにすぎません。火星では多少四季の変化があります、他の遊星では一年を通じて気候は快適です。

私たちは偉大な力を持っていますが、神の教えに従って生活していますから、他を攻撃、破壊するようなことはしません。地球人の生活態度はその逆です。なるほど、地球には教会もお寺も沢山ありますし、いかにも神を尊敬しているように見えます。しかし、その尊敬は言葉の上だけで、行為が伴いません。

地球では「平和は強者のもの」といいますが、聖書には「弱き者、地を嗣がんとあります。」「殺すなかれ」なのに地球では殺人を犯します。「左の頬をも向けよ」と告げた人もありました。でも地球人はそれに従いません。

米政府も数年前、私たちと交信を試みました。私たちの秘密を知ろうとしたのです。しかし、どんなに努力しても、それは結局無駄でしょう。』

八月二十八日

『こちらはゾーです。私たちの遊星にも、地球と同じような大気があります。やがては地球の特定の、人たちも、私たちを訪問できるようになるでしょう。』

ある一部の人々も、私たちと交信しようと色々研究を進めています。私たちが、それには見向きもしません。邪悪なオリオンのことを忘れないで下さい。

『地球の静止する日』という映画は、ある目的で作られたのです。架空というよりも、事実に近いものです。

よく自然を観察して、破局の前兆に気をつけて下さい。前兆は暴風、地震、洪水、(編著者注・気象変化、気温変化、寒冷化、長雨、旱魃、海流変化)など色々な形で地球を襲い、それは時と共に激しくなることでしょう。

ソ連も私たちのことは気づいています。

地球の最後は私たちにも悲しいことですが、地球人を説得することは不可能です。間もなくすべては終ります。しかし、ある人達は、それを見ることはないでしょう。見るとしても他所から、外部から見るとでしょう。』

八月三十日

『こちらはゾーです。皆さんのように、熱心に宇宙の扉を開こうと研究される方々は、地球の代表です。』

私たちは、原初語で話します。これは母性語、またはソレックス・マルすなわち太陽語といえます。古代は地球人もこの太陽語を話していたのです。このことは聖書にも書いてあります。

地球の言語学者も、あらゆる国語は、一つの源から出たのであろうと説明していますね。しかし、その源が何であるかは彼らも知りません。

この言葉は、地球や、それ以上に古い星の古代語とも関係がありますが、一種の象形文字です。他の遊星では皆この言葉を話します。地球人は分裂した民族ですから、色々な言葉を話すのです。』

八月三十一日

『こちらはアクタール(編著者注・木星の宇宙人)です。地球のある大国は、私たちがいなくなるか滅びてしまうことを望んでいます。そうはゆきません。このような国は、私達(宇宙人)が恐ろしいのです。恐れることは憎むことです。』

あらゆる遊星から、特定の地球人を援助に来ています。心の正しい人たちは、私たち

と一体なのです！

私たちは誰も傷つけることはありません。傷つくのは自分の心のためです。悪は悪を破壊します。

地球にはある種子が時かれています。塩漬けしておいた「リンゴ」のもとへ、我らは行く。』

『もう一度、ポンナールからお話しします。私たちは、非常に強大な力を持っています。私たちがなぜ大科学者たちと連絡をとらないのかとあなた方は考えていますが、私たちも連絡したことはあるのです。しかし、大部分の人たちは全く耳を貸そうともしませんでした。宇宙の法則などとは気違い沙汰だと彼らは思っているのです！

冥王星のガールも、土星のオアラも、それからゾーも来ています。

地球には、大爆発や、大災害が益々盛んに起こって来るでしょう。急いで下さい。もうあまり時間はありません。世界が破壊する恐れがあります。

科学者の中からも、原爆研究を拒否する者が続々あらわれることでしょう。』

九月一日

『カダールです。私たちは、嘘の情報を伝えるために、遥るばる地球にやって来たのはありません。地球にも感受性の鋭い人は沢山いますが、長い間愚かな人々と一緒に生活して来たため、せつかく時かかれた種子（編著者注・奉仕者・ワンダラー・リンゴ）も腐ってしまったて実を結ばないことが多いのです。』

『こちらは、ポンナールです。私たちが神と考えるはいけません。地球人と同じような人間なのですが、ただずっと進歩しているだけなのです。地球人も遠からず現在の私たち程度になれるのです。

創造神は、人間よりも遥かにはるかに偉大です。神のみ名を口にする時は、みな頭を下げるべきです。軽々しく神のみ名を口にしてはいけません。

地球の破壊の日がどんなに近いかを悟るなら、地球人は、大声で泣きわめいて街を走りまわることでしょう。

今までも、私たちは何度も地球を救いました。しかし、もはやみなさんの想像以上に遅れなのです。

常に隣人と調和するように努力して下さい。兄弟たちよ、お互いに愛し合うことです。』

『無限の神、創造主の御光において、私たちの同胞であるサラスの皆さんにご挨拶を送ります。』

地球以外の遊星は、地球より遥かに進歩していますが、そう言っても決して自慢するつもりではありません。むしろ、心から謙虚なつもりで話しているのです。というのは私たちも、ある意味ではまだまだ大変粗野な人間なのですから。私たちも決して完全ではないのです。

地球から、大きな目（天体望遠鏡）で私たちの処（遊星）が見えるのは、私たちもやはり第三密度に属しているからです。しかし進歩の程度には差があって、その意味では、私たちの方が皆さんよりも、ずうっと進んでいます。

私たちは地球の友人とコンタクトするための手段として、直接会見、無電、精神感應、その他いろいろなものを利用しますが、第四密度に属する兄弟たちは、殆んど精神感應、自己投影のみで地球人とコンタクトを続けています。

空飛ぶ円盤やそれに付随した現象を、ただ一つか二つの限られた範囲の遊星から来ると考えてはなりません。無数の遊星、太陽系、それに星雲などから来るのですから。勿論進歩の程度はそれぞれ異なりますが、みな地球に対する神の計画の一部なのです。

私たちも、長い間、地球で行われる破壊戦争を見守り、みなさんが自ら作り出した束縛から解放されるのに必要な理解力を一刻も早く得られるよう祈って来ました。

今や地球は花婿を迎える準備をすべき時が来ました。彼女（地球）は古いポロ服を脱ぎすてて、間もなく始まる結婚の饗宴のための美しい装いをこらさなくてはなりません。

私達は、宇宙で地球に最も近い隣人として、彼女（地球）が晴れの式場に出るためのお手伝いをしているのです。

神の愛と光の名において行動するのです。先程も言った通り、私たちも決して完全ではありません。私たちもまだまだ勉強しなければなりません。遊星の中には私たちよりも、数百万年も、数兆年も進んでいるものもあれば、数千年、数万年も遅れているものもあります。ですから私たちを神としてあがめてはいけません。

私たちは地球に来て、皆さんの間に混じって生活しています。一定の人数だけは常に留まっています。しかし地球人と一緒に住んでいるわけではありません。私たちは絶えず地球を観察して、必要な時には適当な指導を行います。今や、地球の新たな大周期を迎えることは、予言者の言葉にもたびたび述べられて来ましたが、地球人はなにも気がついていないようです。昔、それらの予言者に連絡したのも私達でした。しかし彼らの多くは、私たちの素性も知らぬままに終ってしまいました。彼ら予言者が私たちの語

る内容を正しく解釈できなかったのは、そのためです。また、彼らは極めて慎重な態度をとり、自分の言葉が後世の記録に確実に残るよう、比喩や象徴を用いて話をしたので

す。

私たちは、地球の宗教家からはよく神と間違えられたものです。しかし前にもお話ししたように、私たちも皆さんと同じ人間なのです。ある目的を達成するために、古代エジプトでは身分を明らかにしたこともありませんが、私たちの地球への来訪は、エジプトのあの神秘的な古文書にも記されています。私たちがよく使用する記号の一つは、現在の地球の宗教美術にもよく使われています。

私たちが地球に来たことや、人類に対する私たちの意図についての知識を保存するために設立されたミステリースクール（秘密団体）が古くからあり、それがこの記号を今まで伝えて来たのです。（編著者注・ミステリースクールの一つである、ペルー、チカカ湖の、セブン・レイズ友好協会と宇宙人との関係については、『カルマによってのつながりがあるのです。』と宇宙人が私達に語ったことがある。）

地球はとうとう自己破壊の手段まで発見してしまいました。地球は自己破壊寸前の危機にあります。私たちはそれをよく知っています。そのような手段を完成し、使用するのには、地球文明が最初ではないからです。

地球では、「小遊星群」と呼んでいる、「失われた世界」のことは、地球の記録にも、「輝けるものルシファー」という名で出ています。私たちはこの遊星を「マルデク」と呼んでいます。この遊星の人類は、大破壊（原水爆）をもたらず実験をやったのです。が、その時私たちは全然干渉しませんでした。

それは、人はみな進歩向上するためには、教訓を学ばねばならないからです。それは、総ての遊星も人類も同じです。宇宙の法則によればそうなるのです。だから私達も、彼らの学びのためにも干渉できませんでした。

その結果——この遊星（輝けるものルシファー）は原水爆により粉々に砕け、小遊星群となり、地球のみならずほかの色々な遊星にもひどい影響を及ぼしました。地球はそのとき受けた被害からまだ回復しきっていないのです。

今、私たちは必要以上の干渉を行っています。それは、この太陽系で又もや破壊が起ろうとしているのを黙って見逃がすことは出来ないからです。

無益な破壊などを繰返している時ではありません。「大周期」が終りに近づき、私たちは、みな新たな段階に入ろうとしているのです。あらゆるものが清められねばなりません。全然望みのないものは、自から滅び去ることでしょう。「自から滅び去る」と言ったのは、私たちは決して進んで他を破壊させるようなことはしないからです。

大切なのは、私たちが地球に来ていたという事実です。それは地球人にも間もなくわかることですが、機は正に熟そうとしています。しかし、木の実が熟する場合でもそうですが、人手を加えてまで促進しようとする、かえって果実を痛めてしまうことになりましょう。行動を起すには、適当な時期というものがあります。地球の人に私たちの素性を一切明らかにすべき時期は、ほとんど近づきつつあります。

私たちの「水晶のベル」（円盤のこと）も天体と同じように、固有の共振電磁場に包まれて動くのです。地球にしてもやはり、一個の巨大な宇宙船にほかなりません。

私たちに、人から見られたくない時は姿を消すことも容易なことです。数百年も前からずうっとそうしていたのです。私達が進んで姿を見せようとする時以外には、みなさんは私たちを見ることはできません。』

九月三日

『私はポ>NNナルです。地球の青年たちにも、私たちの言葉を理解できる人は沢山います。彼らは、新時代の人間ですから、すぐ私たちを受け入れるでしょう。』

私たちの仲間地球に住んでいる者も沢山いますし、何年も前から、地球人も、ほかの遊星へ、多数つれて行かれました。

多くの人は信じないでしょうが、みなさん達のように、ほかにも私たちの連絡を受けている人も沢山あります。みなさんの今の働きの事を聞けば、彼らも喜ぶでしょう。

日曜日に目撃された「流星」のように見えた円盤は、私たちでした。これからも、私たちは、たびたび目撃されることでしょう。しかし、私たちを見ようとして緊張してはいけません。見ても、良い時が来たら、私たちの方から姿を現わします。ごきげんよう、皆さん。』

九月十一日

『こちらはゾーです。私たちは間もなく、地球の第二の月にある基地に行きます。』

現在地球に接近中と先日お知らせした、「宇宙塵の雲」のことをみなさんもあれこれと考えていますが、これは事実なのです。必ず接近します。太陽も、月も、暗くなり、地球に色々な変事（編著者注・今だかつて経験した事のない、さまざまな異変）が起るでしょう。空には大流星が現われます。

ソ連は磁気の研究を進めています。バルチック海沿岸で最近大爆発が起こって、多数の科学者が死亡しました。このような爆発の後で必ず気温が下がることは、気が付いているでしょう。

土星のオアラもいます。サラスとは、地球という意味の私達火星で使う宇宙語です。他の遊星では、地球のことを、サラス、あるいはチャンともいいます。

悪の力が存在すること、を忘れてはいけません。彼らは、みなさんの間に不和を引き起こそうと企んでいます。団結と愛の心を失わないで下さい。

時は迫りました。道を誤らぬよう。破局は近く、時間は余りないのです。』  
 『もう一度、ゾーです。悪の力がだいに地球に接近しますから、段々、連絡が困難になります。』

私たちが伝えたことは、必ず実現します。いつかは判りませんが、実現することだけは確かです。

私たちが信じるなら、そのように行動して下さい。今まで学んだ知識をいかに利用するかは、皆さんの心掛け次第です。

私たちは他の人達にも連絡したのですが、その人達は、物欲の誘惑に敗れました。物欲の誘惑は、選ばれた者にも、悪の力は常に強く、誘いかけるのです。悪の力は、たくみに人間の弱味につけ込みます。悪の力は常に強いものです。心を正しく持ちましよう。

万物は変化します。感受性の鋭い人は少ないものですが、皆さんはその小数に属する人達なのです。（編著者注・本書をまことの心で理解しようとされる方も、この小数に属する人達であると信ずる。）

皆さんが自分の任務を果せば、私たちも援助します。みなさんがお互に不調和になれば、援助が出来なくなり、私たちも計画が立てられないので、任務が果たせませんので当惑します。

地球の目の見えぬ人（編著者注・地球のカルマの判らない人）は益々見えなくなります。地球の大変化が刻々と迫りつゝあり、地球の破局の危機を告げる言葉が、文字が、ありありと宇宙の壁に大書されているのに、地球の大多数の人々には見えません。』  
 『ボンナールです。この宇宙の危機に、力を授け給うよう、神に祈りなさい。神なくして万物は存在しません。創造神は照覧し給うのです。』

『兄弟よ、ゾーです。皆さんと知り合いなれたのは嬉しいのですが、私たちは今悲しんでいます。みなさんは、私たちがお願いした通りに行動をしないようです。私たちは、お互に協力しなくてはいけないのです。』

一人でも調和を乱す者がいれば、全ては破滅です。反対する人と争う必要はありません。地球では、団結し、愛し合うことが出来ないで困るのです。私達は謙虚です。皆さんも謙虚な気持ちになって下さい。

私たちは、昔から、感受性の鋭い人たちと団結を誓い合っています。皆さんの気持ち一つで、団結を破壊することも出来るのです。選択はご自由です。』

『レッグです。そろそろ決意して下さい。宇宙の会議は待っています。』

私たちが、遥るばる地球にやって来て、大変な努力を払っているのも、全人類への愛情からです。私たちは援助を望む者を援助します。

みなさんが計画を実行しようとするれば、ある悪の力がそれを挫折させようと企てることでしょう。前に、注意をおこたらず団結して下さいと、お願いしたのを忘れてはいけません。

宇宙は待っています。判りますか？

皆さんには、善い行いしか出来ないのです。皆さんが、善い行いをしたいと考えていることは、よく判っています。』

『貴方がたは、では、一体、何をしたら良いのかと考えています。何をなすべきかは、私達は貴方がた一人一人に、テレパシーでお伝えします。(編著者注・奉仕する者)には、その人の任務、役目を、テレパシーで、宇宙人の方が、傍で語っていられるのである。そのテレパシーを聞いて、自分の霊感まことで考えて行動するのである。)

このような方法で、私たちと連絡している地球人はほかにも沢山います。でも皆さん

は、自分の念波と、私たちの念波を識別する方法を知らないのです。

・実行は言葉よりも雄弁である、これは地球の古い諺ですね。私たちも実行する。皆さんも実行します。相いみたがいです。

行いは、自分で判断するので、自分で判断して、正しい、これは必要だと心で素直に思うことを実行して下さい。(編著者注・常に心に神を念じて問い、正しいと思うことを実行することである。それは、靈感で判り、テレパシーを聞いて、自分の霊感まことで実行することである。)

私たちも、創造主の御手を借りて、皆さんを指導しましょう。』

『ゾーです。宇宙の法則によって、私達は何をせよと皆さんには命令は出来ません。地球のことは、地球の皆さんで自分で判断して行うのです。実行すれば、必ず私達は援助します。宇宙の会議は皆さんの実行を待っています。』

これからどうするか？計画を立てて下さい。私たちも知っておく必要があります。それから実行方法を決定することです。皆さん、もっと積極的になって下さい。

私達は泣いています。悲しいのです。いくら話しても、地球の方々は私たちの言葉に耳を傾けてくれません。』

『ボンナールです。皆さんを援助します。地球では、全てが滅び去ってしまいます。あ

らゆる人の夢も、希望も、一瞬のうちに消え去るのです。  
 私たちは、何とかして援助したいのです。それが目的で来たのですから。……もう行かねばなりません。今夜連絡して下さい。第一の月の基地に行きます。さようななら、友よ、おやすみなさい。』

九月十九日

『ゾーです。』

四大基礎エネルギーとは、

静磁場、静電場、電磁場、共振電磁場です。地球の科学者には、最後の共震電磁場は理解出来ません。太陽語にも、これを表わす記号があります。地球の<sup>ニ</sup>に似たもので、四大エネルギーが創造主から流れ出る形です。別に不思議ではありません。現在は皆さんは知りませんが、古代地球人は自然をよく理解していたのです。』

九月二十日

『こちらはゾーです。』

私たちは、時々、色々なところに、<sup>テレビ</sup>念波を送ったのです。今後を送るでしょう。これ

からお話することは、ばかばかしいように聞えるかも知れませんが、こんな手段を私達は取ることもよくあるのです。

皆さんは、ある映画を見たいと思ったことがあるでしょう。その映画というのは、<sup>テレビ</sup>バックス・バニーの漫画「あわてウサギ」だったのですが、<sup>テレビ</sup>私達の送った念波でその映画を見たいと思ったのですが、皆さんにはそれが気付きませんでした。

バックス・バニーのことは、以前にも、何度もお伝えしたのに、皆さんは馬鹿にして記録にも書きませんでしたね。これには訳があります。あの漫画映画の中で、<sup>空飛ぶ</sup>円盤が地球にやって来ましたが、円盤の操縦士の持っていた手紙に九一二七と書いてあったでしょう。この日付は、一九五二年でも重要な日なのです。

九月二十七日

『こちらはゾーです。明日は計画通り着陸します。世界は救われるでしょう。』

『ストックです。いま月の基地に集合しています。着陸が実現出来れば、皆さんにも危険が及ぶでしょう。皆さんの選定した着陸地は完全というわけにはゆきませんが、まず良好です。最初数分間、上空を旋回します。いつもそうするのです。友よ、私達はとも喜んでいきます。』

『兄弟たちよ、私は着陸部隊の指揮官、ノロです。指令をお伝えします。明日午後二時、火星の円盤が地球に着陸するはずです。今夜は多数の円盤が地球上空を飛行します。』

十一月一日

『こちらは冥王星のアルトックです。恐れてはいけません。万事順調です。私たちの円盤は、銀の光、美の光、義務の光です。』

『アンカール二二号です。精神を集中して下さい。私達は今、精神感応テレパシーの面でも、貴方がたを一步進めようとしています。皆さんの中で一步進んだ方の一人は、私達の兄弟ポナールから美しいメッセージを受けることでしょう。

地球がサラスと呼ばれるのは、大変動が何度も繰り返されるからです。

地球で進歩するのは科学技術だけですが、これは大変あやまった進歩です。ですから、地球人は今までに類のない暗黒に取り巻かれています。』

『こちらはレッガです。地球人は肉体の満足しか求めません。あるていどの靈性を備えているにもかかわらず、創造主の力と尊厳を否定します。

俗にいう教育のある人も、神を知らず、おろか者にすぎない。国家とは、無数の青年婦女子の血にまみれた存在にすぎません。

新しく発見した破壊力(原水爆)を、地球はどう使用するつもりなのでしょう？地球人は極めて危険なオモチャをもて遊ぶ子供のようなものです。

私たちは、遙か彼方から地球の貪欲の母胎たる産業や、戦争の母胎たる首都政府、発明の母胎たる研究所などいろいろな事を観察しているのです。ゆりかごも見えますし、まだ死ぬには早い人が死の床に横たわっているのも見えます。

私たちは、もう長い間、地球を観察して来ました。人間はみな兄弟なのです。それに背くような行いをするのは地球人です。

地球人にも、人類を解放してくれる知識と愛を追求している人がいることは判っています。その知識と愛は、私たちも味っています。それは素晴らしく良いものです。

地球の人々よ、目を上げなさい。皆さんは一体となって、一つの目的(編著者注・地球と人類を救う。)に進んで下さい。

私たちは、決して及び難い存在ではありません。現にこうしてみなさんと共にいるのではありませんか。

私たちは、待っています。

皆さんの行動を見つめています。

貴方たちの語り合いに耳を傾けています。

勇気を持って立ち上って下さい。』

編著者注・私達仲間を送られたメッセージには、更に次の言葉がつけ加え

られている。

『地球と人類のために、神様の戦いに立ち上って下さい。

神様の手足となって、神の国を建設して下さい。』

私達仲間が宇宙人より教示された地球への警告と、前記のウイリアムスン・グループによるものとをここで組合せて見ると、

「一体、宇宙人は地球の将来をなんと見ているのであろうか。ズバリ直言するなら、地球と人類は、一大進化過程の大周期に突入しているのである。この大周期においては地震、噴火、洪水、津波、龍巻、ハリケーン、異常天候、異常気温、異常気象など前代未聞の現象が地球上の各地に続発し、更には大規模な「地軸の急激な変動」をきたすであろう。遅かれ早かれ、地球はこのような突発的な変動のサイクルを必ず通過せねばならない。これらは現象的に起ることである。しかし、これらが「神様の儀式」（注・わ

くたまの儀式、祝事の儀式）を終えたあとに起ることは、地球にとっても、人類にとっても、喜ぶべき一大進化の、新しい輝く世への道なのである。

しかし、もう一つの道がある。今までも繰り返して来た、地球人類の貪欲、邪悪、戦争。そして新しく発見した破壊力（原水爆）。これらはもう極限にきているのだ。更に悪の力（オリオン・ルシファー）は地球の破壊を企だてている。

地球人の中の悪の力（貪欲、邪悪、戦争、大破壊力）と宇宙征服を企だてる悪の力とが結ばれれば、「儀式」を終えずして世の終りを迎える。地球は爆発崩壊し、地軸は大変動して、人類は生命発生の第一段階にまで落ちるであろう。それは魂の苦しみと暗黒への永遠の道である。

この二つの岐路に立つ地球と人類がどの道を選ぶかは、地球人自身にかかっている、と宇宙人は語っている。

彼ら宇宙人は、地球人に忠告と援助の手を差し延べんとしている。彼らは語った。

『私達の地球に対する対策は、既に万事万端用意は整っています。』と。

これに対し、地球人がこれを素直に受け入れて愛と真理に輝く新しい世とするか、それとも悪の力と組して地球を破壊に導くかは、善なる宇宙人は強制も、命令も出来ない。地球人の自由意志にまかされている。」

円盤、宇宙人の地球来訪には、今まで述べたことのほかにもまだ重大な意味と目的が秘められているのだ。しかし、彼ら宇宙人がその重大な事柄を地球人に教え、語るには、順序と時間と心の準備が必要なのだ。理解不足という消化不良を起さぬためにも。

だから、彼ら宇宙人は、一九四〇〜五〇年代より世界各国にいる、特定の地球人と連絡を開始し、『円盤・宇宙人・宇宙知識』を、ある年月をかけて少しずつ伝えて来たのである。勿論、宇宙計画の一環としての宇宙人とのコンタクトが、それよりもずっと以前から極めて正確な順序で実施されていたことは事実である。

さて、遊星の進化の大周期を迎える時機がいよいよ熟することにより、その遊星進化に重要な役割を果すべき運命を持つ場所が、その遊星には必ず一ヶ所存在していることが次第に判ってくるのである。この地球では日本の某所にある。だから彼ら宇宙人は、機が熟すに従って日本にいる、ある使命を背負った人達、あるいは個人に、一九五八〜九年頃から特に、積極的な連絡を開始したのである。

私達仲間も宇宙人から教えられた最初の事柄は、ウィリアムスン・グループが受けた前記のメッセージと極めて共通するものであった。これは私達を更にある重大な事柄へ導くための、心の準備教育期間であったと思う。何れにしても、彼ら善なる宇宙人の語る真実は、地球上のどこの場所で語られようと、また誰に語られようと、常に愛と真理に輝き、

地球と人類への深い愛情に満ちた警告であることを私達は知ることが出来たのである。

一九六〇年の後半からは、私達をある重要な事柄へといざなう教育の場であった。地球のカルマに目覚め、自分の魂に目覚めて、使命を果すために、宇宙の偉大な方々からの教示がなされたのである。これを述べ伝えることが本書の目的であり、核心なのである。

それらは、次の第二部において、ある程度は明らかにされるであろうが、日頃ペンを持たない編著者には荷が余りにも大きすぎて、到底私の筆に乗るものでないことも充分承認している。しかし、ことの重大さを考え、あえてそれを試みたのである。

『まことで判るのです。この世の言葉は限りがありますから……。』と、かつて宇宙人よりいわれたことがある。言葉、文章での表現は、受取る人自身の心でどのようにも解釈できる。宇宙人の語る言葉は、言葉であって言葉でない。テレパシーであり、また、これを靈感で判るのである。したがって、言葉、文字の表現だけで受け取ってはいけない。テレパシーで聞き、靈感で判って頂きたい。昔の聖者は、言宣不及、以心伝心などといったが、到底私の力量不足、筆不足で、書き満すことのできないところと、言葉、文字で表現し難い、目に見えないあるもの、とを、行間から真の心で、靈感で汲みとって頂きたいと、切に希うのみである。

第二部  
オイカイワタチ

## 第一章 宇宙のドラマ

『あらゆる遊星から特定の地球人（編著者注・奉仕の使命を持った地球人）を援助に来ています。』

『地球には、ある種子がまかれています。塩漬けしておいたリングもいます。私たちは彼らのもとへ行きます。』

『私たちは、心の開いた、魂が目覚めた地球人に、ある重要な活動を援助するために来て居るのです。』

彼ら宇宙人は、自分の任務、仕事について、『私達の世界（遊星）では、いろいろの役目を神様から授かっているのです。』と語っている通り、神様から授けられた任務の分野で奉仕をするのである。霊的進化の段階に応じた任務が与えられるのである。その機構、あり方はこの地球とそんなに変わるものではない。だが、地球の如く貪欲、虚偽、戦争という心と発想はない。すべて神から授かった役目は、感謝と奉仕で果されてゆくのである。

宇宙には、遊星から遊星へ、太陽系から太陽系へと移り歩き、そこで果たすべき役目を神から授かっている宇宙人の集団がある。彼らは、宇宙の「煙突掃除夫」である。いいかえれば宇宙の「清掃人夫」である。宇宙の中の一大進化の大周期を迎える遊星、裏をかえせば、塵捨てのような墮落した遊星におもむき、その遊星と同胞に援助の手を差し延べることが、彼ら「清掃人夫」の使命である。

宇宙の「煙突掃除夫」は宇宙機に乗って地球にやって来たのではない。彼らは地球に生まれ変わったのである。神様から授かった自己の任務を地球上で果たすに最も適切で、必要な魂の訓練や便宜を十分に与えてくれると思われる地球人の両親を選んで、その間に生まれるのである。要するに、魂が地球人でないことを別にすれば、ほかは全部地球人なのだ。宇宙の「煙突掃除夫」は、自分の正体には少しも気付かないで幼年、少年、青年時代を送る。もし彼らが腐ってしまう種子の一人にならなかつたら、やがて、早いものは青年時代より徐々に、あるいは突如として、自己の身分、故郷、使命などをなんらかの方法で思い出すのだ。しかし中には、自分が何者であるか気付かないで一生を終るものもある。即ち、地球の低いバイブレーションで道に迷ってしまったのである。

今、地球に生まれ変わって来ている宇宙の「煙突掃除夫」全部が我々の太陽系内の遊星から来たのではなく、他の太陽系、いや遙か彼方の星雲から来た者もいる。

これらの宇宙の「煙突掃除夫」たちは、地球が浄化され、神の国として、地球人もほかの遊星の兄弟たちと同じように宇宙内で正当な座を占めるようになるまで、何度でも地球に生まれて、神様から頂いた使命を果たそうと誓いを立てているのである。

「煙突掃除夫」の中には、かつての昔地球に住み、何度も繰り返し繰り返し地球で生まれ変わった霊魂で、最後には地球という学校（遊星）で学び取るべき教程を終え、より崇高な学校（遊星）へ進んで行った者もいる。（地球という学校を卒業するのには、その人の努力によって早い遅いはあるが、平均一〇〇回位生まれ変わって、ほかの遊星に行ったという報告も受けている。）

その内のある者は、円盤で再び地球にやって来ている。また、もう一度地球に生まれ変わって重要な使命を果たそうとしている者もいる。

地球は一大進化過程の大周期に突入した。更に加えて、地球は全面的な破壊と破滅の寸前にある。このいずれもが極限にある現在は、特に多くの宇宙の「煙突掃除夫」が地球に降ろされている。そして、あらゆる分野でそれぞれの役割をわかちあって働いている。

このような神の僕たち（ワンダラー）の中には、自己の真の魂に目覚めた者も多い。まだ目覚めない人々も、月日がたつにつれ記憶を取り戻し、円盤に乗って上空に現われる兄弟たちと力を合わせてその使命を達成することであろう。

一九六〇年の当時、「ワンダラーは地球に一九五〇名降ろされており、その内、一七二名は日本に来ています。」と宇宙人の長老サナンダは語った。日本に降ろされたワンダラーの比率の多い理由を質問したが、「その理由はまだいえないのです。」と——当時は時期尚早ということか。一九七五年の今日では総人員は相当増加されているかも知れない。しかし、日本におけるワンダラーの員数の多い比率には変わりがないであろう。それにはそれなりの理由があるからだ。これは時と共に判るようになるであろう。

他の遊星人の中で、地球に生まれ変わっているもう一つの存在がある。彼らは地球行きを志願して、地球に生まれ変わったのである。即ちこれを「リ、ン、ゴ」とも呼んでいる。

金星の長老サナンダは「リ、ン、ゴ」の意味を、

『挺身して世のために尽くすことを願って、外の遊星から地球に生まれ変わって来ている人達です。』

と語り、更に、『その数はおよそ一千万人にものぼるでしょう。その内、二〇、五三一名（一九六〇年現在）は日本にいます。』と述べられた。

彼らリングゴも同様、神より授けられた役目を果たそうと努力している。そしてその役目を果たすであろう。しかしそれは、地球での道に迷い、腐ってしまう「種子」の一人にならないで、真の魂に目覚めた限りにおいてである。

地球の運命の時期は到来した。そのために、宇宙人たちは、神様の御計画の手足となって活動を開始したのである。円盤も公然と姿を現わすようになり、地球人の肉体を持ち、なにも事情を知らぬまま日々の仕事を続けている同志（地球に降ろされたワンダラーやリング）を「目覚めさせる」という大事業に着手したのだ。だから一九四〇／五〇年代以降には、世界各国で多数の人々が、「同志よ目覚めよ」と呼びかける宇宙人からの信号を受け取ったのである。

前にも述べた如く、宇宙の煙突掃除夫<sup>ワンダラー</sup>はあらゆる分野にいる。だから宇宙人からメッセージを受けた地球人が一介の労働者であったり、また地位も権力も学歴もない一般人である場合が多いのである。

その人達は、なぜ宇宙人は自分達のような無名の者に、このような重大な事柄を語りかけるのであろうか、自分達のような無力の者に語りかけてもなんの役にも立たぬではないか、と思ったりした。それに対して宇宙人は、

『目を覚まさない！ 真の魂<sup>まこと</sup>に目覚めなさい！ 自己を過少評価してはいけません。自分以外には誰も信じてくれないから真実ではないかも知れない、などと言わぬことです。光の子よ、私達があなたのような方々とコンタクトするにはやはり理由があります。それは、あなたたちは人間のように見えても、実は私達より大きな重い使命を持

った天使なのです。』  
と語っている。

というのは、円盤の乗員たちもかつての昔、その遊星の進化の過程において、ワンダラー達の援助をうけたことがあったからなのである。換言するなら、ワンダラー達が、彼らの遊星を、現在のような戦争も、貪欲も、虚偽も一切存在しない崇高な、愛と真理<sup>まこと</sup>に輝く世界にまで向上させてくれたからなのである。

地球が愛と真理の輝く神の国となり、平和な世界となって、宇宙の家族の一員としての地位を回復すれば、これら宇宙の煙突掃除夫はここでの使命は終り、ほかの墮落した「大周期の来た遊星」を目指して、また再び新しい旅に出るのである。

宇宙人の多くが地球に来はじめたのは、近世では百年以上も前からである。一九世紀後半には、宇宙人は特に大勢来て地球に住みつき、地球人の妻をめとり、その子孫は今地球に相当する。その子孫の魂の多くは、『挺身して世のために尽くすことを願ってほかの遊星から地球に来た』者であろう。また中には、煙突掃除夫<sup>ワンダラー</sup>としてほかの遊星から地球に生まれ変わった者もある。彼らは「地球のカルマ」を見て、地球での使命を果たすのに最も

重要で適切な時期を、一九〇〇年代の後半期であるともしたのである。だから、この時期に最も多くの「ワンダラー」と「リング」が降ろされているようである。

一九四〇〜五〇年代より円盤・宇宙人の活動が次第に激しくなって来たのは、この人たちの目覚めを促し、前途の使命に備えての準備を開始するように気付かせるためであった。ワンダラーやリングが円盤・宇宙人の呼びかけで、自分の素性や、地球での使命に気が付き始めたのは、その頃からである。

しかし、全部の「ワンダラー」や「リング」が実を結ぶとは限らない。地球という悪の力の大きい、極めて誘惑の多い悪条件下にある世界、そして低い粗雑なバイブレーションのため、一生を眠ったまま、使命に、素性に目覚めないで終る者もある。

さらには、魂に目覚めず、進む道を間違えてサタン（悪の力）に手を貸した者も前の遊星ではあったのである。

『前の遊星の世の終りの戦いで、遊星をサタンの手に渡して失敗したように、もしこの地球も失敗すれば、私たちの取るべき手段も自然に決まって来ます。一切は宇宙の法廷の手にゆだねられます。それは宇宙の大きなかなしみです。』  
と宇宙人は語っている。

## 第二章 奉仕する者

※この項は「聖書」「黄金の書」「現代の新聖書」よりの抜粋である。( )内は編著者の注である。

ヨハネによる福音書 8章23節

イエス言い給う「あなたがたは下から（地球）出た者だが、私は上（ほかの遊星、金星）から来た者である。あなたがたはこの世（地球）の者であるが、私はこの世の者でない。」

ヨハネによる福音書 17章14節

「私（イエス）は彼ら（弟子達はワンダラーであった）に御言みことばを与えましたが、世（地球）は彼らを憎みました。私がこの世の者でないように、彼らもこの世の者ではないからです。私がお願いするのは、彼らがこの世から取り去ることではなく、彼らを悪しき者から守って下さることあります。（サタンはワンダラーを地球から除き去ることを意図している。）私がこの世の者でないように、彼らもこの世の者ではありません。真理まことによって彼らを潔め別けて下さい。あなたの御言みことばは真理まことであります。」

あなた（天の神様）が私（イエス）を世につかわされたように、私も彼ら（ワンダラー）を世につかわしました。また彼らが真理まことによって潔め別たれるように、彼らのために私自身を潔め別ちます。私は彼らのためばかりではなく、彼らの言葉を聞いて私を信じている人々のためにもお願い致します。

父よ、それは、あなたが私のうちにおられ、私があなたの内にいるように、みんなの者が一つとなるためであります。すなわち、彼らをも、私たちのうちにおらせるためであり、それによって、あなたが私をおつかわしになったことを、世（地球）が信じるようになるためであります。私はあなたから頂いた栄光を彼らにも与えました。それは私たちが一つであるように、彼らも一つになるためであり、また、あなたが私をつかわし、私を愛されたように、彼らをお愛しになったことを、世が知るためであります。

父よ、望むらくは、あなたが私に賜わった人々（ワンダラー）が私のいる所に一緒にいるようにして下さい。天地が造られる前から私を愛して下さい、私に賜わった栄光を彼らに見せて下さい。

正しい父よ、この世（地球）はあなたを知っていません。しかし、私はあなたを知り、また彼らも、あなたが私をおつかわしになったことを知っています。……」

宇宙の煙突掃除夫ワンダラーのことは、色々な古記録にも記しるされている。たとえば「黄金の書」もその一つである。その中からワンダラーに関するところを二、三、拾ってみよう。

「見よ、遥かに高い世界（ほかの遊星）には、人類の助けになりたいという奉仕の心の大小によって、靈魂を種々の組に分類（靈的進化にに応じて任務を分類）する組織があるというのは事実である。

その中でも最高の組はイエス・キリストの組、またはイエス・キリストの靈の組である。これに属する者はほかの世界（一大進化の大周期に來た遊星）におもむき、そこで肉体生活に入って筆舌につくし難い程の苦難に耐え、自我を脱却することが出來た人々の靈魂である。」

「彼ら（イエスの組、ワンダラー）はほかの遊星から地球に來たのである。地球人の子孫ではなく、また地球の輪廻りんねのカルマとは別にある。」

「彼らが肉体を持つことは、地上で民衆を指導すべき地位に就いてある大きな目的を果たそうとする場合のみであるが、更にまた、人類の危機を警告する大事件の起こるとき、彼らは肉体生活に入る。

彼らには特別の使命があるのであって、前もって定められた計画に従って行動する。通常に、最も賢く尊い指導者の命に應じて來るのである。

愛する者よ、地球人の中にも彼らは住んでいる。人類を向上させるにはいかなる時に力を尽くすべきか、彼らは知っているのだ。」

「愛する者よ、わが言葉に耳を傾けよ。犠牲となる者どもをひきいるのが私（イエス）である。私は彼ら（ワンダラー）をひきいる権威を与えられたのである。私は先頭に立って犠牲となり、幾度でも生まれ変わって最大の苦難を受ける。『父』と呼ばれている聖なる霊は、奉仕のためにこれら同志の人々を作りたもうた。それ故、最もよく奉仕する者が最も偉大なのであり、中でも奉仕の指導者が最も偉大なのである。」

「何百年、何千年も前から私（イエス、金星の長老サナンダ）の前に現われるべく待っている者も地球にいる。肉体を持った男女としてでなく、『輝ける者』としてである。（待っている者とはイエスをたよりとして、イエスに仕えて、地球人類に奉仕せんと誓いを立てて、地球のある高い霊圏へマルワクあるいはアヨオルVでイエス即ちサナンダが再び地球を訪れる日を待っている人達のことである。『この方々がマルワクの人、アヨオルの人である。』と宇宙人から説明されたことがある。）

彼らは地球人類が神の子であるという本来の本質を地球人に見い出すようにつたえ、奉仕するため私（イエス）の使者として、この世の肉体生活に入るのである。」

「愛する者よ、忠告しておく。お前たちに恵みを与えるため私の使いとして神が送られた

もうた靈魂（ワンダラー、リング）も、地球人の肉体をつけて生活しているのである。

彼らの願いは唯一つ、私の意図（神の国の実現）を実現したいということだけなのだ。」

「天使（ワンダラー、リング）はお前たちの周囲まわりにもいる。それは、お前たちも毎日のように彼らを見、彼らと話し合っているのだ。（彼らは、地球で特別の存在としているのではない。むしろ彼らは、ごくあたり前の、どこにでもある平凡な市民として存在し、生活している。それは、あなたかも知れない。またあなたのお隣にいるのかも知れない。）

彼らは私（イエス）の命によってお前たち（地球人）に仕え、帰れば（魂の故郷に帰れば）私にお前たちの熱意（正しい世を創る熱意）の程度を報告する。愛する者よ、仕えることは同時に仕えられることでもあるのだ。」

ほかの遊星から地球に生まれ変わって、使命を果たすために苦勞している者がある、という文献はほかにもある。「現代の新聖書」、第四の祝福、『遊星の人々』にも書かれている。次にそれを紹介して本項を終ることにしよう。

「聖師イエス語りたもう。」

「いとしき子等……………」

この時において、自分の平和と友情と、また、救いさえも、地上のあなた方のために犠牲にしている遊星人は祝福されん。

彼らは、偉大なる存在の求めに応じて、一瞬のためらいもなく、その遊星上の幸福を捨てて、恐ろしい地球上の制約を甘受し、地球の人々の進化のために苦慮しております。

彼らは、その霊的な故郷を去り、霊的な父母兄弟を離れ、恐ろしい暗黒の地球に生まれ、孤独と白眼の中で地球の進化の革命をもたらそうと努力しているのです。

おゝ、うるわしき子等よ、心の扉を開きなさい。神の御心から河のように流れ出る、やさしい力を迎え入れなさい。神の御力はあなたの霊に入って、あなたの魂を照らし、更に心と感情を照らします。

子供等よ、肉体を静寂にすることを覚えなさい。心を静寂にすることを覚えなさい。

あなた方が動物のようにそわそわしている限り、平和は訪れません。」（傍点編著者）

### 第三章 宇宙の秘密

天地の万物、宇宙の一切のものは、すべて、神の顕現である。宇宙は神の国であり、神御自身であり、天国浄土である。人は神の子である。神の靈感によって、素のままによって、一切のことが、語られ、行われ、自ずからなる秩序で正しく統<sup>すべ</sup>られている。

そこは、

『愛

万物一体

調和

自然』

（宇宙の四大法則）

の宇宙である。それは昔も、今も、過去、現在、未来永劫<sup>えいごう</sup>に変わらない。すべてが神の顕現である。

神は中心に統<sup>すべ</sup>られ、「陽」と「陰」の両極を統括されている。

オリオンの神から授かった本来の役目は、

『物質（陰）をもって、神の愛と、う、る、お、い、を人類に与える使命を持った天使であった。』  
そのオリオンがなぜ悪に落ちたのか？………

ルシファアの神から授かった本来の役目は、

『無（陽、物質に対する無、形なきもの、心、精神）をもって、神の愛と、う、る、お、い、を人類に与える使命を持った天使であった。』  
そのルシファアがなぜ地に落ちたのか？………

本来、人間はのんきに、一切を神にゆだね、神を信じて、神の靈感のままであれば、心も物質もみな神の愛と、う、る、お、い、の顕現であり、そこはそのまま天国浄土である。

神の国、天国浄土は、既に完成された世界である。完成されたと言えば静止の世界のように思えるかも知れぬが、不断の創造と進化の世界なのである。不断の創造と進化を続けながら、しかも完成された世界なのである。そして、それは始めもなく終りもない完成への道をたどるのである。

神は、不断の創造と進化を続けるために「陽の働き」と「陰の働き」の両極面において、それぞれ創造と進化の場、即ち形から見れば試練（魂を練る）と見える場を与えられる。

神は、その試練の場（陰）を与えられる時には、同時に、これを解決する場（陽）も必ず用意されているのである。

従って、解決する場を信じて待てば良いのである。それを忘れ、待てないところから——即ち、神を本当に信じ切れないところから——一切の不幸が生じたのである。

オリオンは、

この神の創造と進化の試練の場において、のんきに神を信じ、神の靈感を受けることを忘れた。そして、神の「解決の場」を信じて、のんきに神の靈感を待っているようなことで、本当に良いのだろうかと考えた。そして、ただ靈感を待っているようなことでは駄目なのではないだろうか、なに、か、を、せ、ね、ば、幸福になれないのでは、という焦りと心のイラ立ちから神の靈感を失い、そこに自我の愛が生じたのである。自我の愛は神の靈感を受けたものではなく、我から出たものである。オリオンは神の靈感のままに物質を語らず、自我欲のままに物質を語って、ついに悪へと落ちていったのである。

オリオンは、神から授かった物質を語る運（役目）を自我愛、自我欲に使う物質を發展させ、物質によって人類を幸福にしてやろうと、次々と物質を人類に与えて来た。ところが地球の人類は一向に幸福にならないので、オリオンは更に一層多くの物質を造る欲望の靈感を人類に送った。この靈感を受けた地球人も、我欲の物質文化繁栄に大拍車をかけ

て来たのである。これはオリオンの思うツボでもあるのだ。オリオンは人類を物欲の囚とりことなし、神から離れるように仕向け、地球という遊星とそこに住む人類を掌中に収めんと企たくらんでいる。それは宇宙征服の野望なのである。

宇宙のどの遊星にも人間は住んでいるという真実を知らない幼稚な地球人は、神を知らず、愛と真理まことの輝く世界（遊星）のあることも知らず、自我の物欲から生ずる物質繁栄にうつつをぬかして、果ては地球は虚偽、戦争、混乱の世となり、ついには地球と人類は物質の重みで押しつぶされ、とうとう自己破壊の寸前の最終段階にまで至ったのである。魂も心も悪にむしばまれてしまったのだ。

宇宙の歴史の中というか、あるいは時間という流れの中というか、永い間地球は本当の宇宙を知らず、オリオンとその系統の者に組み立て、物欲、虚偽、戦争、混乱を繰り返して来たのだ。このような暗黒の歴史が繰り返されている遊星は、我々の太陽系では地球のみである。

地球がオリオンの誘惑に負けたのは、もとを正せば自らの自我と物欲により、愛と真理まことを失った、至らなかつた地球人のカルマによってにはかならないのである。このカルマがカルマを呼び、長い年月に渉わたってカルマは累積し、もう地球人自身では全く身動きもできない程に大きなものとなっていることも、殆どどの地球人は知らない。

ルシファーは、

心を語って、神の愛とうるおい、を与える使命を授かつた天使であった。しかし、ルシファーもオリオン同様にのんきを忘れ、己の強力な自我は、自己の力と心を過信し、宇宙を我力で支配できるとうぬばれた。（今までの地球もこれと同じことを考えていたようだ）

そして、ついに神の本源に反逆を企てて、神の靈感を失った。そこに自我愛（欲）が生じた。自我の愛は宇宙支配の欲望となり、その欲望を達成するための手段として、神の御名<sup>〃</sup>を利用するようになった。即ち、<sup>〃</sup>神を語って自我の満足から人類を救おう<sup>〃</sup>とした。それは、神を語って人類を己の支配下に置くことでもあった。

しかし、その欲望と自我は自己破壊に通じていた。そして、ついに高い天の地位から、最も重厚な物質的進化の一つの中の肉体表現である地に落ちたのである。

ルシファーのことについては、一九六〇年に私が編集、印刷、発刊した<sup>〃</sup>宇宙人は呼ぶ<sup>〃</sup>に書かれているので、その一部分を借りて次に紹介しよう。その内容は、私達仲間が宇宙人に教えられたものと、本意に変わりが無いものである。

……それから彼（宇宙人）が口を開いた。

「時間というものは、あなた方の科学者達が今や正しく推測するように、一つの相対的な基準なのです。しかしそれは種々の物質密度に適用された場合の枠でしかありません。

意識の、絶対的、つまり非物質的狀態においては、時というものは存在しないのです。それで、ある場所の枠、つまり、そういった時間の流れの中において、と言いましよう。

我々の太陽系の中に、かつてルシファーと呼ばれる遊星があったのです。それは太陽系の遊星の中で、最も物質的に稀薄な遊星でした。その軌道は火星と木星の軌道の間にありました。エーテル人間、つまり天使達の間では、それは、『暁の明星』と呼ばれていました。」

「この輝く遊星の王子の名前もまたルシファー、神の愛する息子でした。」

彼（宇宙人）はしばしば語るのを止めた。そして悲しみが彼の眼の中で深まった。それから彼は続けた。

「ルシファーとその軍勢に関する地球の伝説は真実です。虚栄と傲慢が、ルシファーと多くの住人達の心の中で大きくなって来ました。彼らは物質の秘密のすべてを発見し、また創造神の偉大なる秘密をも発見しました。この全能なる力を自分達の利己心に使い、その力を彼らの兄弟達に向けようとなりました。更には父なる神、つまり生命の本源にも反逆

を企てたのです。というのは、宇宙を支配することが彼らの望みとなったのです。

ルシファーとその家来達が、どんな具合にその高い地位から転げ落ちたか、もっと簡単に言えば、その時、物質の最も稀薄な状態で肉体表現をとっていたルシファー人達は、最も重厚な物質的進化の一つの中の肉体表現に、『落ちた』のです。それが地球の獣的進化だったというわけです。」

「こうしたルシファー達は、その戦い（原水爆）の大破壊の中で、我々の輝かしい遊星ルシファーを粉碎したのです。

ルシファーに組みしなかつた私達は、光のより高度な段階におけるエーテル状の非物質世界に、解脱した神の子として入りました。

一方ルシファー達は、悲しみの暗黒世界の上に、重厚な物質の中の意識への夢遊状態に落ちたのです。」

「多くの地球人は、もとのルシファー人です。いいえ、全部ではありません。他の人達のこととは後ほど説明しましょう。これが解明された時、あなたの遊星（地球）の多くの謎は説明されるでしょう。」

「ルシファーは現在、地球に肉体を持って生まれ変わっています。しかし彼の現在の正体は明らかになります。彼はなんべんも地球に生まれ変わりました。その名前は、どれもこれも、

小学生でさえよく知っている名前です。彼のその名前のいくつかは、あなたを驚かせるでしょう。というのは、それはあなたの思いもかけなかったものでしょうから。……」

読者の皆さんは驚かれるであろうが、二千年前、イエス・キリストが十字架上に磔はりつけになつた当時、

『ルシファーは役人がみな恐れたローマの王であり、私（イエス）を槍で突いた兵士はルシファーの弟で、名前はクノマルシャーという男に生まれていました。彼らは現在も地球に兄弟として来ているのです。』

と金星の長老サナンダ（二千年前イエスとして地球に來られた方）は語られた。

ルシファーは今までも度々地球に生まれ変わっており、その時の名前は歴史上に残る、誰もが知る名前である。彼（ルシファー）の強大なる力と靈感は、指導者を掌中にした。彼ら（オリオンとルシファー）の力は『私（イエス）を地球から除き得る（磔はりつけのこと）程に強いのです。』と語られたことからして、地球の指導者達がルシファーの靈感に動かされて來たのも当然かも知れない。

ルシファーは心と精神を語る運（役）を、自我という欲望の中で用いて、神を語り、その強大な靈力は、様々な不思議を地球人に見せた。その力は、地球人には神の姿と間違えられたのである。

ルシファーを神と間違えた地球の宗教家は沢山いる。ルシファーの靈感を受けた指導者や宗教家たちもやはり、神を語り、心と精神を語り、人類を救おうとした。これらの靈感が神から來たものでなく、ルシファーの我欲と自我から出たものと気付く者は殆どいないのだ。『悪く賢いサタン』は巧妙で、ボロを出すようなことは決してしない。ルシファーからすれば地球人をだまし誘惑することは、赤子の手をひねるよりたやすいことである。今の地球における多くの宗教家、指導者は、神を語り、神の名において自己の我と組織の我を差しはさんで語り、あるいは神の御名に自己や団体の都合を混ぜて使っている。彼らの教えは本当の神を伝えず、神を歪めて伝えている。そのため神の靈感は止ざされ、そこに迷いと悪のカルマが生じ、カルマはカルマを呼び、たかるカルマは永年月に涉って累積され、現在はどうしようもない程の大きなカルマとなって地球を埋め尽くしている。

神が悪いのではない。仲に立つ人、即ち、世の指導者、宗教家たちが神を歪め、間違つて説くため、今の世界においては正しい神が伝えられていないのである。一般大衆が悪いというより、むしろ仲に立つ世の指導者達の私の愛によって悪が生じたのである。しかも

今ではその悪は一般大衆にまで根付いてしまっている。人類の不幸と苦しみもまた根付いてしまったのである。

それは、「日本の天皇」の場合を例にとればよく判る。日本の天皇は実に神聖な御方である。（これは、判る時が必ず来る。それは人の魂の輝きが見えるようになった時である。その時は決して遠くではない。）

戦前、戦後共に、天皇と国民の仲に立つ人達が天皇の御心と違って、天皇を歪めて伝えたのである。仲に立つ人、主として指導者たちが、天皇の御名において、御名を利用して、国民を愛するという美名の下に、己の我の愛をほしのままに使った事實は、誰もが知るところである。

その結果は、国にも、国民にも、また仲に立つ人にも不幸と悪が生じ、すべての人々が苦しんだのである。

これと同じ意味において、地球人類は神を歪め、神を間違えて理解したため、本当の幸福は切斷され、現在のごとき争いと、混乱と、破局に満ちあふれた地球となったのである。金星の長老サナンダは、かつて、

「地球の $\frac{2}{3}$ 以上の人達がオリオン、ルシファアの誘惑を受けています。悪い者（悪の力）の頭はオリオンですが、今はオリオンの者は地球に来られませんので、オリオ

ンの指令を受けているルシファアがします。」

と語られたことがある。これは、今の地球はベン（善）なる宇宙人によって守られているため、外からオリオンの者たちが大挙して地球を占領しに来ることができないので、ルシファアに指令を送って地球を内部からも破壊せんとしているという意味であろう。

大周期を迎える遊星とは、

「オリオンの掌中に、このまま進行したら完全に入り込むという、その段階の極点に来た遊星のことである。」

地球は正にこの極点にあるのだ。いや、むしろ手遅れの状態にある。円盤・宇宙人は地球と人類にこのことを告げ、援助の手を差し延べ、人類の目覚めを促しに来訪しているのである。

更に、この地球のカルマのさまを見て、地球と人類を救う使命を持って、地球に生まれ変わっている同志を目覚めさせるため、同志よ、神様の聖戦が始まったのだ、さあ、魂に目覚め、使命に目覚めて聖なる戦いに立ち上れ、と呼びかけたのである。

また、この日の来るのを待って、地球の高き霊圏より地上に生まれて人類に奉仕せんと誓いを立てて来た人達や、イエス・キリストに仕えんとして地上に生まれて来た、マルワクの人達、アヨオルの人達にも、目覚めよ、聖戦に立ち上れ、と呼びかけたのである。

「ワンダラーを縦の糸とし、地球の真に目覚めた人を横の糸として、よく神様の御業を織りましょう。」  
と金星の長老サナンダは語られたのである。

## 第四章 オイカイワタチの使命

オイカイワタチとは

「AZを頭とし、神様の命を受け、神様の手足となることを一人一人が心に誓って、進化の周期の来た遊星をより良く変化させるため、即ち、その遊星を神の国とするために、その遊星人に生まれ変わり、その遊星において、その遊星の一周期の終りの時期に、神様が行われるわくたまの祝事の儀式に参加し、各々の身に受けたその遊星と遊星の人々の持つカルマを明らかにし、（オイカイワタチは神様からカルマを頂いて、その遊星に生まれ変わって来たのである。）そのカルマにオイカイワタチは目覚めて、このカルマを解くことにより、その遊星とその遊星の人々の根本のカルマをなくし、次の時代を今までより高く、より良くする、即ち、その遊星を神様の世界とする目的のために、身を挺する高き魂を持った人達の集りである。」

A Zとは

『オйкаイワタチの頭の役目であり、AのワンダラーからZのワンダラーまでを統帥する方で、現在の“AZ”は、二千年前地球上にイエスとしてイスラエルに生まれ、地球上の人々に真の神の道を伝えんとし、最期に地球上のルシファアの力がいかに大きいかをワンダラーに示すために十字架の上に磔はりつけになられ、三日後に、それでも神様の御力の方がそれ以上で、遥かに偉大であることを知らせるために復活された、イエス・キリストである。金星の長老で、金星における御名をサナンダという。』

神が宇宙を創造され、各遊星をお創りになる。その遊星には、神様がお降りになり、わくたまの祝事の儀式が行われる聖なる場所が必ず一ヶ所ある。その地は、宇宙に存在するどの遊星にもある。永遠に変わらない、神様の降りたもう地、神聖たるべき聖地があるのである。この地球においては日本にあり、日本の某所がそれにあたる。日本の使命について、金星の長老サナンダは次のように語られた。

『永遠に神様の降りたもう地、今までも降りられたのです。』

『日本は神様を崇めることが役目です。ワンダラーが多いのは、神様を守るためです。ワンダラーは、生きている天の使いです。』

この意味において、日本の地は地球創造の時から既に約束され、定められた神聖な地である。これは、相対的な意味からではなく、絶対的な意味からのものである。

これを早合点して、日本人独尊の意味に取ってはいけない。また、過去にあったごとき日本神国論とも全く違うのである。我々は昔、日本人は天孫民族と教えられ、そこから生じた歪められた神国論が正当化されたこともあるので、この問題（日本人の天孫）について、長老サナンダに問うたことがあるが、その答は次の通りであった。

『日本の地にはいろいろの遊星からやって来ましたが、たびたび来ては、たびたび駄目になるのです。（オリオン・ルシファアの誘惑に負けて）』

だから、この意味において、戦前日本で喧伝けんでんされた神国論とは全く位相の違うものなのである。

地球という遊星を神が創りたもうた悠久の昔から、日本の地は神の降りたもう地で、ある重要な役目を果たす運命の地であるということである。この意味において日本は神聖な地であり、わくたまの祝事の儀式が行われる時期（世の終り）に、オйкаイワタチとして生まれて来た日本人のワンダラーという者は、外国におけるワンダラーとは役目も異なり、ある重要な意味を持つのである。

なぜならば、……

オイカイワタチとして生まれた日本のワンダラーが、地球のカルマに目覚めて地球のカルマを解くことによって、その遊星が良く高く変わるか、

それとも、……

地球のカルマが全部解けずに残ったため、災害や戦争によって、地球の破滅による世の終りが来るか、

このいずれかに決まるからなのである。そして、それは日本に生まれしてきたオリカイワタチの肩にかかっているのである。

「わくたまの祝事の儀式」が完全に行われれば、カルマが全部解けるため、その遊星の人々は一人残らず救われる。これは現象界に限らず、地球の霊界においてもいえることであり、その遊星自体が一進化を遂げることにより、地球の周波数が上がり、愛と調和に満ちた、喜びにあふれる神の世へと変化するのである。

しかし、今までのオリカイワタチのたどって来た道は、必ずしも輝かしいものではなかった。

現在の地球へ来るまでの数多くの遊星においては、「祝事の儀式」に到達するまでに、サタン（オリオン・ルシファー）の強力な妨害と誘惑により、真に目覚めず、眠ったままのワンダラーとなったり、あるいはサタンを神と間違えたワンダラーもあった。また、つ

いには、ワンダラー同志の争いのまま「世の終り」を迎えたこともあった。つまりワンダラーは、自分の魂に、遊星のカルマに目覚めなかったのだ。目覚めなければ、その遊星のカルマは解けない。カルマが解けない前に「世の終り」を迎えたために、その遊星は良く高く変わることができず、大災害や戦争で終ることとなった。最悪の場合にはその遊星自身を爆発粉砕させ、粉々に砕いてしまうようなことになり、多くの人類は苦しんだまま「世の終り」を迎えることとなったのだ。

「悪く賢いサタンは、彼（ワンダラー）を我が身（ルシファーのこと）と同じような苦しみで神から断とうと、悪いテレパシーを彼に送っているのです。サタンは、彼（ワンダラー）の前を神のような顔で迷わすので、彼は判らず、迷うのです。サタンを神と間違えて、彼はカルマを作ってゆくのです。」

この地球では、大昔から多くの予言者達が、前々の遊星における「失敗の世の終り」のさまを霊視し、それを「世の終り」であると語り、また語りつつある。多くの予言者達も、

本当の「神の讚美したもう世の終り」を知らないのである。

このような形（大災害、戦争、粉砕、人類の苦しみ、「世の終り」）で遊星の変化がなされることは決して神様の御心ではなく、万物に対する大きな愛を持っておられる神様の大きな悲しみであり、「AZ」である金星の長老、サナンダ（イエス・キリスト）の悲しみでもあった。

前々からの遊星での「失敗の世の終り」によって、これまでの遊星で解けなかったカルマは次の遊星へと持ち越されてゆく。カルマは段々と増えてオリカイワタチの手に負えなくなり、この地球においても失敗に終ることは明らかであった。

そこで、オリカイワタチの頭であるAZ（サナンダ）は、神様に、オリカイワタチが今までのように方向を誤らないようにするための『特別の手段』をとって戴くように願われたのである。そして自分自身は地球上に救世主（イエス・キリスト）として出現され、オリカイワタチに、悪の力（オリオン・ルシファー）がいかに強大なものであるかを、自らの十字架の死によって教え示されたのであった。そして、この特別の手段が『カミラ』という御魂によって現われたのである。

AZはワンダラー全部を吾が子としておられ、自らの御子はお持ちでない。そこで、その偉大な御魂の降臨を、金星のワンダラーであるタノアス家に願われた。その御魂は神様から直接に分かたれた太陽の御魂の方で、『カミラ』とは神様のおつけになった御名である。

AZが『天の神様』に特別の手段を願われたのには、もう一つの意味がある。ワンダラーの中には、今まで辿って来た長い宇宙年月での多くの遊星の失敗において、自責の念から必然的に神様のもとに帰れず、また自分の遊星の我が家にも帰れず、さ迷う運をつけたものがある。さらに、自責の念からワンダラーの役目を神様に返上して宇宙をさ迷いつづけ、この時期に再び地球に生まれ変わって来た元ワンダラーもいるのである。『萬たる元ワンダラー』といわれたその数から推しても、悪の力と遊星のカルマがいかに大きいかを知ることができるだろう。

AZが特別の手段を願われたのには、これら多くのさ迷う運を持つワンダラー、萬たる元ワンダラーが真に目覚め、身に受けたカルマ・遊星のカルマに目覚めて正しく役を果たし我が遊星に帰ることができるよう助けるための意味もあるのである。

一九四〇～五〇年代より特に、「空飛ぶ円盤」なる謎の物体が世界中の話題となり、その目撃談に続いて、それに搭乗して宇宙人に会見したり、地上で宇宙人に会った人達が現われた。

その結果、これに興味を持つ人々が世界各国でいろいろの団体をつくったり、あるいは

少数グループで、また個人で、真剣な研究を始めた。

これは、地球が新時代を迎えるにあたり、この大事業を遂行すべき使命を持ったワンダラーとこれに関係する人達を集めて、その使命の目覚めを促すための警鐘となるものである。だから円盤も宇宙人も、公然と彼らの前に姿を現わしたのである。

① 宇宙船

② 宇宙人

③ 地球の大周期の大変化と新しい世

この三項になんの矛盾も感ぜず、異常な関心と興味と確信を持つ人々の大部分は、ワンダラーか、将来ワンダラーたるべき人、もしくは、リンゴや元ワンダラー、それに真に目覚め、使命を知った横の糸の方々であると考えられる。

## 第五章 魂の目覚め

『わく、いまの祝事の儀式が行われる時期（世の終り）に、オイカイワタチとして生まれて来た日本のワンダラーは、ある重要な意味を持つのである。なぜならば、日本のワンダラーが地球のカルマに目覚めて、地球のカルマを解くか否かによって、その遊星の運命が決まるからである。』

だから、宇宙人たちは、日本にいるワンダラー達に、真に目覚めよ、魂に目覚めよと積極的に呼びかけを始めたのだ。従って、一九五〇年の後半から一九六〇年代にかけて、特に多くの日本人が個々に、あるいはグループで、宇宙人からの通信を受けている筈であり、私達の仲間のケースもその中の一つであると確信している。私達の知らないほかの多くの方々も、時が来れば、その真相を世に発表することであろう。

宇宙人からの連絡は、地球人（ワンダラーも含まれる）に対して、なにをなすべきかを教えたり、なにを実行せよ」とは命令しない。まず、真に、魂に目覚めよ、目覚めれ

ば、なにをなし、なにを実行すべきかは自ずから判るのである」と教えている。また、これが判ることが使命を果たす上に重要であり、新しい世を迎えるための大切な心構えである、とも教えている。だから彼らは、ワンダラーの「目覚め」のために宇宙の法則の限度において、あらゆる援助をしてくれるのである。

一九六〇年の当時、私達仲間に、「目覚め」と「励まし」のために、『気高き宇宙の方々』より教示されたメッセージを次に紹介しよう。これを紹介するにあたっては、当時の地球をめぐるの円盤・宇宙人と、その重大な時期的背景、さまざまな経過を付記してメッセージの意味を判りやすくしようと考えもしたが、私の余分な意味付けはかえってメッセージの本質を損う恐れがあると判断したので、簡単な注記のみに止めることにした。

#### 気高き方々のメッセージ

※このメッセージは、一九六〇年を前後として約二ケ年間に示されたものの中から「魂の目覚め」に関するものを選び、その一部を紹介するものである。「」内はメッセージ、「（）」内は編著者の注である。

「貴方は金星でどんなことをしていただけますか」の問いに。

AZ「それは、金星の人に地球を知らせているのです。それで、正しい世界の正しい道

を知らせます。』

(一九五八、六、一九)

(注)このころは、AZとはワンダラーの頭の役名で、現在のAZは金星の

長老サナンダであり、かつてのイエス・キリストであるという秘密は

全く知らなかった。

つぎは地球人の私達にメッセージをお願いしたときに、最初に頂いた言葉である。更に「私達のなすべきこと」、「心構え」の問いに対して、

AZ「地球の皆様へ。人間を愛し、神を信じ、来たる新しい世界を建設して下さい。』

『精神の目覚めです。精神を高め、そして、ごころの命ずる通り行動して下さい。』

『みんなの愛し合う心の目覚めです。みんなを、一人でも多くの人を救えということです。それは最後の時に多くの人が判るよう<sup>わか</sup>にしてあげることです。』

『いつもいうように、一人一人の心構えを高く合わせて行くことです。』

(一九六〇、七、八)

AZ「地球の中にいる、神の国を迎える準備をする人は、テレパシーで見出しなさい。

みんなの中の光る魂を見出すことです。』

(一九六〇、七、一三)

AZ 『テレパシーは地球人の失われた能力です。取り戻さなくてはなりません。毎日精神を統一して馴れることです。馴れればできます。もっと精神統一をして、よく神様を拝みなさい。それは大事なことです。』  
(一九五八、六、一九)

「テレパシー能力を高めるには…」の問いに。

AZ 『潜在意識を取りなさい。潜在している我を取ることです。自分がやるという我が取ることです。我は一いち(自分一人限りである)と思うということ。

身体と心と一つにすることです。

万物一体の宇宙の法則を思い、身体と廻りの空気とを交流させる気にならなさい。馴れることです。』  
(一九六〇、七、一四)

AZ 『テレパシーとは、愛の手を差し延べることと、真我の目覚めです。』(八、二八)

AZ 『目覚めるには、バイブレーションを変えることです。今はその時です。精神を高めましょう。』  
(九、七)

AZ 『バイブレーションが完全に変われば、身体を消すことが出来ます。』(九、二二)

AZ 『神にまことあり。困難に負けず、頑張り抜いて下さい。助けます。』(八、一六)

コンタクトストーリーを発表して世界的話題となったコンタクトマンでも、また選ばれた者達も、オリオンの誘惑にかか

AZ 『彼にはオリオンの誘惑があります。選ばれた者も誘惑されます。木の実をよく見て、正しいものと悪いものを見分けて下さい。

縁えんというものは、今日、明日のものではないのです。良くありたいと願ってもそれができないのは、前生の縁えんです。カルマの法則を考えてみれば判わかるでしょう。一人でも正しくあろうという人が悪くなるのは悲しいことです。そうならぬよう祈りましょう。』  
(八、二〇)

アトネ『私は地球のアジアの関係を担当しております。ヨーロッパ関係の指導者は、アシユターという方です。』

(注)・アトネとは金星の婦人である。金星の太陽の方、タノアスという方

の妻である。年令は一九六〇年の当時、一、四〇二才であった。

アトネ『今、最もなすべきことは、精神の目覚め、魂の目覚めです。そして心の命ずる通り行動して下さい。一人一人の心構えを高く合わせて行くことです。』

みんなの愛です。

みんなの愛し合う心の目覚めです。

魂の目覚めです。

天の声を聞きなさい。』

『いつも神様を信じなさい。向かって来る何事も恐れることはありません。神のみむねにそっているなら、必ず助けます。』

(八、二九)

世から白眼視され、誰からも信じてもらえない社会で、ワンダラーが孤独と淋しさを思った時に……。

アトネ『ワンダラーは淋しいものではありません。神と一体になればみな同じですから、気を明るく持って進みましょう。』

(九、四)

アトネ『悪い者は悪いことが正しいと思っているのです。だから気が付けば、みな神の子です。悪い者は悪い者を蹴り倒したりして、悪い者同志仲たがいます。必ず後で

分かります。悪いものとはオリオンの者だけではないのです。』

『神様の手足となって働く人は、みな霊界の悪い者からかまわれます。』

オリオンと霊界の悪い者とは一緒ではありませんが、手をつなぎます。』

(八、二九)

太陽の方  
タノアス『私はタノアスといます。太陽から金星に來ています。私とアトネは夫婦なので  
す。

神様を拜んで頑張りましょう。

地球のカルマのためにです。

神は愛です。

神はコトバです。

神は絵具を持って生命いのちを創ります。

麗わわしい愛をそれに湧わきたたせます。

愛をカミラに送ります。

貴方々にも送ります。

金星の神は、天の神に伝えて言われます。

「天の神の祝福を分かちます。」と……。」

(九、一三)

アトネ『世の中は今、一番カルマの多い時です。貴方々の力で行けるところまで行きなさい。愛と勇気を持って勇んで行きましょう。カルマは愛でとけますから心配はいりません。愛は愛を生みますから手を伸ばして頂きましょう。』

(九、一四)

アトネ『ただ働くのはいけません。愛で誰にでも接し、いらぬことはせぬようにしましょう。(なにをなすべきかは)神を念じて問いなさい。』

(九、一九)

アトネ『必ず神様を拝みましょう。』

天の神様はなんでも出来る方です。

心を正しく、天の神様を拝みましょう。

東の空を見ることです。東の空は偉大な方(ソクトル)のおられるところです。祈りはこの方を祈るのです。どこにでも神様はおられるのですが、それでも、あたりのイラツイタ気のない所がよろしいので、社<sup>やしろ</sup>を建てたりするのです。』

(九、二三)

これは仲間の一人に、身体の具合が悪い理由について答えられたものである。

AZ『それは、身体が、今は、色々の地球の悪いバイブレーションを受けているからです。オリオンの系統の間の悪は、バイブレーションの違いのために(あなたの)心にうまく入ることができないためです。(だから)身体を弱くすることにのみ悪の力を使っているのです。のがれるには、神を拝み、太陽の方に頼みなさい。』

(九、二三)

(注)

オリオンとその系統の者の悪の力は、神の手足となって働いている地球人の心に入って誘惑し、心に入れない者には身体に入って働きを妨げる。

これは仲間の一人に、勇気と力を与えられたものである。

AZ『あなたの身体は直りました。悩むことはありません。その代わりに弱い身体を哀れみ、大切に、ワンダラーとしてカルマをよく果たしなさい。快活に、愛に満ちて、岩のような固い信念を持って行くのです。』

これもある個人に、魂の生い立ちを語り、地球にきた使命に目覚めるようにやさしく教えられたものである。サニラとは金星におけるその人の名前である。

AZ『サニラさんは、いつでも、誰でも、大きい和の愛を持って礼儀正しく包みますから、金星の神様に祝福されています。髪の毛は、最初はやさしい気を表しまして、とても綺麗なコゲ茶色で輝いていましたので、母はアミチイ（コゲ茶色）と呼んでいられたのです。

重い荷（使命）をもってスイタス（円盤の名）の円盤に乗り、ムノイツ（クラス  
の女の友）に会うため地球に来ました。円盤の乗組員になって、みなハメイオ  
（都会の名）のために、よい金星の、よい守りとなったのです。

帰って金星の神様に命じられて、今のサニラというワンダラーになったのです。』

これも、ある一人の仲間に語られたものである。

AZ『あなたは土星の若者で、地球のカルマのさまを見て、それを救うために死を賭して（地球）を助けに来たのです。』

（八、二六）

ある一人に、目覚めと自信を深めるための援助の言葉。

AZ『金星から〇〇さんに挨拶を致します。よく来てくれました。みんなの心を大変はげましたのです。貴方の金星における力を知らないので不思議に思われるでしょうが、判る時が来ます。「ルノトン」とは貴方の金星での名です。試練に耐えて挺身して下さい。』

アトネ『地球の最後と言っても陰気にならないように。その時は、貴方は今までのことは影のことと気付かれます。金星の記憶が甦えるのです。（その時は）金星の貴方の力を得ているのです。自信を持って下さい。』

これらのメッセージは、その一部を紹介したにすぎないが、いずれもワンダラーが使命を果たす上においての、目覚めと、勇気と自信を深める励ましのために語られたものである。

前にも述べたごとく、一九六〇年とその前後の年は、地球にとって極めて重大な意味のある年であった。それは地球と人類との根のカルマをまことで解く聖戦が始まった年であった。そしてそれはテレパシーとテレパシーの戦いであった。（詳細後述）

この戦いは、ワンダラー達が真に目覚め、魂に目覚めてこそ初めてできる戦いである。だから、私達仲間も宇宙人から、目覚めよ、目覚めよと積極的に呼びかけられた

のである。この呼びかけは私達にだけでは決してない。世界各国で行われ、特に日本では、使命を持った方々が、それぞれの立場で宇宙人と各種のコンタクトを経験されたと私は信じている。

そして、テレパシーとテレパシーによる無の世界での戦いが行われた一九六〇年のある時期に、私達の地球は、正に高く、**「明る地球」**に変化する寸前まで来たのだ!!しかしオリオンとルシファー、その系統の者は、最後の手段として、かつての第五軌道遊星（ルシファーと呼ばれた遊星）のごとく、原水爆で地球を完全粉碎し破壊に至らしめんと企んだのである。その寸前に善なる宇宙人達の援助によって、地球粉碎の企みは不成功に終わったのだ!これは事実である。時が来れば、この驚くべき恐しい過去の事実を皆さんが知るであろうことを申し添えておく。

このテレパシーとテレパシーで戦う無の世界での地球のカルマを解く戦いは、これで終わったのではない。この聖戦は、地球が**「明る地球」**即ち新しい世に生まれ変わるまで続くのである。

この地球での戦いは、地球人（ワンダラーを含む）が真に目覚めて神様の手足となって神様が行われる聖戦（わくたまの祝事の儀式）に参加して行うのである。地球のことは地球人自らが行うのである。宇宙人は最大の援助はしてくれるが、地球人のなすべきことま

ではできない。それは宇宙の法則である。従ってワンダラー達は地球人として生まれて来たのである。地球人の肉体を持ち、地球人としての当たり前前の生活をしているのである。そして、その環境の中で、真に目覚めるのだ。その目覚めのために、彼ら宇宙人はできる限りの援助を与えてくれるのである。

次に掲げる御言葉もやはり、目覚めと励ましのためのものである。

### 偉大な方よりの御言葉

※（ ）内は編著者

アトネ『粘土のように朽ちるのは、オリオンの可哀そうな運命です。オリオンのことを何の恐れることがありません。戦いは今はもう失せるカルマなのです。』

神を信じないならオリオンの誘惑に負けます。神を信じましょう。

金星は天の神様の住まわれるところです。若い貴方達のいるところは罪なきところですよ。

語ることはつきませんが、今日は止めます。休みましょう。また明日ね。さようなら、アトネです。会える時を楽しみにしています。

みんなで最期を戦いましょう。』

（一九六〇、九、二七）

アトネ『勝って下さい。世のためになることを、よく役目を果たして下さい。神様を毎日拝みなさい。神様はいつもあなたがたを見ていられます。正しい道を歩みなさい。必ず助けます。肩の荷が降りるまではあと僅かです。ラッパが鳴っています。立ち上って、神様のために戦いなさい。』(九、三〇)

A Z『神こそは、真まことの源です。

神こそは、愛の源です。

神こそは、理解の源です。

今は後々までカルマが残る時です。

神を信じ、まことをもって進みましょう。』

(九、三〇)

A Z『我はこのたびのこと培つちかう身といわれしを思い、他のことは一切のものを頼ることは無かりしが、ただ、神のみを尊敬して頼りとして来ました。

神は唯一人、カルマを制することのできる方です。

神を、いつの世にありても、心のよりどころとして進んで行きましょう。

永遠から永遠まで、変わらぬ愛と叡智を持たれる神と共に、私達は歩んで行きま

しょう。』

(一〇、一一)

(注)

『我はこのたびのことを培つちかう身と…』とは、『サナンダ(AZ)は、地球のことを神様からあずけられてからは』という意味である。

A Z『愛は言葉を永遠の命をもったものにします。和をもっていきましよう。』

(一〇、一二)

A Z『神は苦しみを与えません。真まことの道には色々の苦しみがありますが、不幸に気を萎なげさせてはいけません。

神は神を信じる人を必ず救われます。

神を知る人はいつも心が幸いと、平和と、愛に満ちています。

どんな不幸の時でも、心は幸せです。

これが真まことの神の心なのです。

神のことを心に念じていたならば、いつもいつも心は平かで晴ればれとしています。

神を信じなさい。

私は苦しい時も、地球のことを神様に預けられた時も、いつも神様を崇め、頼りにして来ました。

いかなることが起こるとも、神を信じて心はゆるぎませんでした。色々のことに耐えて、金星に行かれるように心から祈ります。』 (一〇、四)

A Z 『我を信じて、理解し難きことをも、神を念じて、カルマを果たすを最後の目的としない。』

オリオンのことは、害を与えるまでには、こちらの心をゆるしません。

「我と共に神を見よ」

岩でも通ず信念を持つことです。

神様は目を貴方々にそそいでいられます。

神を真に見なさい。

では愛を貴方に送ります。』

(一〇、五)

A Z 『神は太陽のように地球を照らされます。

早く、神をみんなで、今までの縁を明らかにされますように見て下さい。

まことをもって行きましょう。

まことは神様に通じます。

A Z を心で念じなさい。

よくまことを、共にあることを、天の神様とともに思いなさい。

善いカルマを果たすのです。

よい心は、そのように縁を呼びます。

助けは多く神様が下さいます。

私のやることを手を差し延べて神様は助けられます。

ワンダラーの汚れのない、よい体は神様がみ手を延べて、悪いカルマから守って下さいます。

誰の心をも愛して、私を信じて下さい。』 (一〇、一八)

A Z 『世の中に一番約束されているのは愛です。神様は、銘々の約束をそこに命じられました。』

神様は天から真の言葉を下さいます。永しえに目出度き言葉です。

私の、いろいろと命じられたことは、神様の言葉を伝える心を持つ良き者を探す

ことでした。

縁は天の神様にあります。

良き者を新しい世の中へ入れる案内をすることにします。

神様は行かれる人に縁を与えます。

地球のカルマは天の神様が良く定められます。

神様は頑張るように言われました。

証は円盤でします。』

(一〇、二二)

アトネ『オリオンは後を待って地球をまた覆くつがえそうとしているのです。

廻りの柵をまことで破っても、この柵はまだまだ造られますから、すぐに前と同じになります。』

『囲まれても、悪い目的をもった者は、まことには負けず。』 (一〇、二九)

AZ『ワンダラーというものは、やる事が沢山あります。ワンダラーのように心のすべてを神様に捧げた者は、悪い者との戦いをする智慧を、若い心にも、神様に授けられて持っています。』

私を心に画いてはいけません。私は神様ではありません。

ワンダラーは悪い者と戦うことは、今度が初めてではありません。今が一番大切な時です。

神様を拜んで、よい働きをして下さい。』 (一〇、二七)

AZ『オリオンはまことには負けず。私を助けるのは、若いあなた方のまことです。判りますね。』

『悪い者の頭はオリオンですが、今はオリオンの者は地球には来られませんので、オリオンの指令を受けているルシファーがします。』

(注) オリオンは後を待って地球を覆くつがえそうとし、柵をまことで破っても、すぐに造られて前と同じになる理由についての問いに……。

AZ『(地球の)カルマですが、神様はカルマを制することの出来るお方です。』

(一〇、二七)

(注) オリオンの強大な妨害に逢い、ワンダラー達の「真まことの目覚め」の遅れと苦しみの

さまを見て、太陽の方から次のような勇気づけがあった。

太陽の方  
エンマ 『ワンダラーを信じなさい。ワンダラーは神様と共に地球の守りにしているので  
す。

ワンダラーは天の神様と共にあります。

私の言葉を信じて、まことを尽くしなさい。』 (二〇、二八)

AZ 『ワンダラー達は、幻影の前に私を見失っています。このようなことでは役目はま  
だまだ果たせません。

オリオンは私をよく倒す程に強いのです。

神様の助けを得るためには、まことを尽くすことです。よくまことを尽くしまし  
よう。』 (二一、二〇)

アトネ 『オリオンの者でも愛するのです。金星のオリオンにおける気持ちは、ただ愛と憐  
れみ  
です。

あなたがたの力ではオリオンの手を避けることはできませんが、愛の心だけで避  
けられます。

取るか、また負けるかの時です。愛の心を持ちなさい。必ず勝ちます。』

(九、一九)

(注) 悪者は永久に滅ぼされるという説を一部の宗教では語っているが、それは正し  
い説であるかとの問いに対する答えは…。

AZ 『天の神様は苦しみを与えられません。悪い者でも神様の子です。私は彼らのため  
に神に祈る真を持っています。』

アトネ 『うかうかしている時ではありません。』

神様の声を聞きなさい。今はその時です。あなたの間の<sup>あいだ</sup>声を聞きなさい。

天の声を聞きなさい。聞きなさい。聞きなさい。

目覚めなさい。

神を信じいつも愛の心で暮らしましょう。』

太陽の方  
エンマ 『まわり(ワンダラー達)は変わる時期を気にしていますが、ワンダラー達は、よ  
くまことを神様へ捧げ得てから、これがよく判<sup>わか</sup>るので、今の心は語る真をよく判<sup>まこと</sup>

るまで魂がまだ高くないのです。

神様に、よく真で愛を手に賜わるよう、まわりの方はよく務めなさい。手は沢山あります。天はよく縁をまわりへ下さったのです。

けれども、これを及ぶだけ使わぬのは残念です。

エレクヤ（明智）をまことの役をやる時は神様が必ず下さいます。

神様を真まことで良く見て、更に変わるまで、よく戦まことって下さい。』

A Z 『魂を語る（私たちの）この言葉の判わかる方は、よく判わかって下さることでしよう。

真似のできない、テレパシーで語る願いを判わかる方は、よくまことまことで判わかるのです。』

アトネ『神様を見なさい。良い心を天に捧げなさい。』

アトネ『あなたの傍で、見えない姿で、神のお使いの方がテレパシーまことで真まことを語まことっていられます。まことまことで良く聞いて下さい。』

A Z 『祈りは、まことまことの心に湧く神様への語まことらいを頼まことむことと言まこといましょうか、必ず真まこと

で判わかるのですが、この世（地球）の言葉には限りがありますから、判わかるまで真まことを尽まことくして頼まことむことです。』

A Z 『テレパシーまことで真まことの判わかるのは、魂の語る真まことが真まことの魂へ聞まことこえ、その真まことの魂の語る声まことが聞まことこえることです。

テレパシーが耳で聞まことこえる時が稀まれなのは、たかるカルマが廻まことりを取り巻まこといて、たかるカルマへ語まことることがあるためです。このような声まことを真まことのテレパシーまことと思うのは大変な間違いです。』

### たかるカルマ

手掛ける神のたたかいは、たかるカルマをまことまことで解まことくたたかいが、たかるカルマのある限り続まことくのです。

### テレパシー

テレパシーは、真で聞こえて来るのは、構えて、真のよく判る魂の方です。真のテレパシーが受けられるのは、たかるカルマが廻りから語る迷わしをよ

く断つよう、魂を高めることが大切です。テレパシーが利いて魂が低く目覚めていることは、まことに恐ろしいことです。

稀な魂の、真が目覚めるよう、頼る廻りで（神様に）たのみなさい。

### 真

真とは、語るのは簡単ですが、まわりの方をカルマから守る宝をまわりへ掛ける神の道であり、またカルマが解ける宝を掛ける道でもあります。

## 第六章 ワンダラーの聖戦

大宇宙のどこかにたか、かる、カルマのある限り、ワンダラーの、オイカイワタチの、カルマを真で解き、新しい世とする聖戦は続くのである。

### ワンダラーの誕生

大周期（世の終り）を迎える地球上には、この太陽系、また別の太陽系からも、ワンダラーが降ろされている。

このワンダラー達は自分の魂の遊星で、どのようにしてワンダラーとなったか。

彼らは、ワンダラーを両親に持つ家庭から多く生まれやすいが、ワンダラーを両親に持たない家庭からも生まれることがある。しかし、特別の手段でない限り、どちらも生まれた時からワンダラーではない。いい換えれば、初めからワンダラーの資格を持って生まれてくるのではないということである。また、自分の意志で勝手になれるのでもない。この

ことについては、

『ワンダラーは神様の手足になることを心に誓うのです。天の神様の前で見事に命を受けて、ワンダラーの位（役目）を定められます。前の行いと、心によります。』  
と「AZ」が語られたことがある。さらにその役目を頂く時のその人の年令は、人によってそれぞれ異なるのであると教えられた。七才の時の人であれば、七三才の時、あるいは百才の人もあり、それは年令とは関係なく『前の行いと、心により』定められるといわれている。

このようにしてワンダラーの役目を授けられた時には、その時までの肉体を脱ぎ去って新しい身体（の肉体）に生まれ変わり、ワンダラーとしての人生が一才からスタートするのである。

#### ワンダラーの遠征

大宇宙の中には、神様から次々と生まれる新しい生命、その魂が育って行くにふさわしい遊星がある。そこには、陰と陽、原因と結果のカルマの法則によって、進化の場が与えられる。進化の場すなわち試練の場において、のんきに解決の場を信じて待てず、神を本当に信じ切れない心が広がり、自我と我欲がその遊星を覆い、このまま進行したらオリオンの掌中に入り込むという、その段階の極点に來た遊星、これを大周期の來た遊星という。今の地球は正にこれに当てはまる。

ワンダラーは大宇宙の中にあるこのような遊星（今は地球）とそこに住む人類を助けるために、自分の遊星を離れて遠征に出るのである。それぞれの遊星を旅立つ（出陣）時にはその遊星での肉体を脱いで我が家におき、靈魂を宇宙機に乗せ、遠征する遊星（今回は地球）を目指して降りて行くのである。そして、地球における自己の任務を果たす上に必要な訓練や便宜を与えてくれると思われる地球人の両親を選んで、地球人として生まれるのである。

（イエスが誕生した時、その馬小屋の方向にあらわれた輝く大きな星のような光は、イエスのみたまをおつれた宇宙機だったのでなからうか。）

ワンダラーは出陣の時、天の神様の御前で、低次の重厚粗雑な物質を持つ低いバイブレーションの遊星に行っても、必ず真に目覚め、魂に目覚めて、使命を果たすことを誓って出発したのである。『地球のカルマのさまを見て、それを救うために、死を賭して助けに來たのです。』と「AZ」が語られた言葉は、ワンダラー全員が、命がけで來ていることを示したものである。

かくしてワンダラーは地球人として生まれ、以前のいきさつを全く知らずに育ち、次第

に世のさまを見て、目覚め始めてくるのである。しかし、中には眠ったまま目覚めないで終る者もある。

ワンダラーが自己の魂に目覚め始めた頃より、それを待ち構えていたかのごとく、かくれた系統の者より誘惑の魔手が延びはじめ。その力はワンダラーの目覚めを妨害し、周波数を落とし、<sup>まこと</sup>真を失わせるようにと向けられる。

かつて、<sup>まこと</sup>“AZ”は私達仲間の一人に、「貴方をよく、オリオンは来る前から（地球に遠征して来る以前から）、およそのやり方を知っています。……」ので貴方の役が中々うまく行かないという意味のことを言われたことがある。この一つを見てもオリオンの妨害と力の強さの程を知ることができよう。

このような妨害と誘惑の中で（<sup>まこと</sup>この妨害と誘惑は主にテレパシーで行われるので、真に目覚めていないと、知らぬ間に誘惑され、誘惑されても気付かないのである。）自己の魂に目覚め、地球のカルマに目覚めて、地球のカルマを真で解く聖戦が始まるのである。ワンダラーの聖戦は後述することにして、次に進むことにする。

#### ワンダラーの凱旋

ワンダラーの凱旋は、その使命を首尾よく果たし終った時である。

すなわち、その遊星で、わくたまの「祝事の儀式」に参加し、遊星のたかるカルマを解き、地球を新しい世に変化させ、その遊星を神の国となして、はじめて凱旋ができるのである。新生した地球の再建を援助する役を持つワンダラーは、肉体のまま宇宙船に引き上げられた（助けられた）地球人と共に、大変動で浄化された新生地球へ降りて再建の手助けをする。そして、その新生地球は、戦争も貪欲も虚偽も一切存在しない崇高な、愛と真理に輝く世界、すなわち神の国となり、宇宙の各遊星との友好的交流がはじまるのである。かくして、ワンダラーは、ここでの使命を終え、遠征から自己の魂の遊星へ帰還するのである。（<sup>まこと</sup>注ワンダラーが使命を果たして、神の国遊星となった星は皆故郷である。これから先に果たして行く）<sup>まこと</sup>遊星も、使命を果たした時に故郷となる。宇宙は一つである。）

このたびの地球への遠征にあたっては、各遊星のワンダラーは一度金星に集り、天の神様に『使命を果たす』ことを誓って、出発している。従って、首尾よく使命を果たせば、まず金星に凱旋して、天の神様にこれを報告することになる。それから、ある者は引き上げられた地球人と共に新生地球へ降りて再建の援助をする。またある者は使命を終えて各自の遊星に還り、その遊星の神様に祝福を受け、我が家に帰る。そして魂は、我が家に置いてある自分の身体につながる（戻る）のである。その時には遠征に出た時の年令と身体に戻るのである。（今地球にきているワンダラーは、地球の年月で説明すれば、大体二と三世紀から十世紀頃に、他の遊星から遠征に来た者が多いようである。）だから、ワン

ダラーの年令については、宇宙人から教えられた年令を単純に地球における年令と同じ意味にとってはならない。そこには、もっと深い意味があるように思われる。

脱いだ地球の肉体は、『地球の着物ですから、金星にはいりませんから溶けます。』そして、『地球での働きはカルマを良いものにします。愛が進んで、必ず魂が向上します。』と語られた。

しかしながら現在地球にきているオリカイワタチ（ワンダラーの中のオイカイワタチの役をする者）の今までに辿って来た道は、必ずしも輝かしいものではなかった。現在の地球へ来るまでの数多くの遊星においては、多くのワンダラーがオリオンとそのかくれた系統の者の妨害により、魂に目覚めず、遊星のカルマに目覚めず、その結果、「わくたまの祝事の儀式」を行うことができなかった。そのために遊星のカルマが解けず、従ってその遊星は高く変化できずに、大災害や戦争で世の終りを迎えたのだ。それは失敗の世の終りである。だから、ワンダラーの中には、自責の念から天の神様のみもとに、また自分の遊星にも帰らず、宇宙をさ迷い続け、こんどこそは必ず目覚めることを心に誓ってこの地球に來ている者もあるのである。

ワンダラーは再び遠征の途に出る。

地球の大周期はすでに來ている。地球は間もなく変わるであろう。そして、どちらに変わるかは、オリカイワタチの肩にかかっているのだ。

しかし、どのように地球が変わろうとも、宇宙には次の大周期を迎える遊星がすでに待っている。それは決定されている。その遊星はこの地球ほどには悪にそまっていけないが、もしこの地球が再び悪く変わるようなことがあれば、解けないカルマは次に引き継がれて、次の遊星での失敗もまた明らかである。だからこの地球での戦いは負けられない戦いであるのだ。このようなわけで、宇宙の方々から、ワンダラーの目覚めと聖戦の意義が語られたのである。

#### 聖戦の意義を諭す御言葉

※『』以外は編著者の説明である。

アトネ『ワンダラーの進める道は大変沢山の反対があります。受ける戦いは大変多いのです。よく遠征して、その聖戦を果たして下さい。』

必ず天の神様は守られますから、安心して下さい。よい戦いですから、神様の守りが受けられます。岩より堅い信念で行くことです。』

ワンダラーの聖戦は、オリオンとそのかくれた系統の悪に対する、力の戦いではない。また悪に対抗して争い、その悪をねじ伏せるのでもなければ、悪い者を硫黄の火に投げ込んで滅亡させるものでもないのだ。

AZ『オリオンはまことには負けず。』

『聖戦は真で地球のカルマを解く戦いです。』

と教えられている。この言葉は今までもたびたび述べたが、重要な言葉である。

これまでのいくつかの遊星における世の終りを失敗の世の終りとしたのは、ワンダラーが目覚めず、道を誤り、オリオンとそのかくれた系統の悪と対抗して、聖戦が、真を失った戦いとなったためである。AZは、再びそのようなならぬよう諭されたのである。

AZ『今は後々までカルマが残る時です。』

『神を信じて真をもって進みましょう。』

『……戦うことはいけません。まことを頼ることが唯一のカルマから守られる道です。……………』

前の（遊星の）わくたまの戦いが、悪い者の手に渡ったことで判ります。

……戦わぬよう、頼るところを神に置いて真を尽くさない。……………』

AZ『わくたまの祝事の儀式をよく戦うためには、神様に身体も心も預けることです。』

アトネ『天の神様を拜めるだけ拜み、よく心を愛で満たしていくのです。』

AZ『世界は変わります。若いあなたがたの手で、よい世界を建てなさい。』

AZ『神様は多くの廻りの輩をよく待たれて、約束の時を待っておられるのです。』

AZ『神様はカルマを制することのできる方です。』

AZ『地球のカルマを、天の神様が良く定められます。終りまで、神様は頑張るようにいわれました。証は円盤でします。』

A Z 『からだ身体を大事に、今後の役を果たしなさい。かくれている系統の者に注意しなさい。まだまだありますから、心に神様を念じて行きましょう。愛の心を持ちましょう。』

A Z 『あなたがたを終るまで大変苦しめていた悪い者は、変わるまでには、悪いカルマで彼らの顔を変えます。

変わった悪い者をよく愛で語ってやりなさい。』

神の席の方

テケル

『明かされる、変わるわくたまは、カルマがよく真でとけ、神様が判るわくたまとなります。良く変わる、真をわくたまへ捧げて、変わるわくたまを神様へ渡すことができるよう、よく神様へ頼みなさい。』

テケル 『わくたまは神様の顔がうつる地です。サタンを構えて、わくたまへは入れぬよう、変わる戦いで、よく戦いなさい。

ケガで戦えぬ方の身体は、神様がよく周囲から幕で守って下さいます。

真をよく神様へ捧げて戦えば、まわりの悪い者は、わくたまから分かたれ、彼らの悪いまわりの者を互いに傷つけ合って、サタンと共に、まわるカルマで朽ちる

のです。』

テケル 『わくたまの戦いを終らずに変わることは、今日までの戦いが神様の戦いではなく、悪い者のための戦いであったこととなります。ワンダラーとしてこれ程の苦しみはありません。

よく神様のわくたまを真で守り、変わる地球を神様の手に渡しましょう。』

A Z 『悪い者はオリオンをくくれば力を失います。まだ今はカルマが残っておりますが、私のオリオンをくくることにより溶けます。ワンダラー達のカルマを終り、円盤に乗ることを祈りなさい。』

『変わるわくたまを悪い者の手に渡すことは私の悲しみです。』

『変わるわくたまは、ルシファーをカルマが倒す戦いで、変わるわくたまを、悪く変えるようなことがあれば、変わる私の沢山の戦いは、良く戦うカル



解き、真の語りかけによって、オリオンに自らの誤りを気付かせ理解させることである。ワンドラーは、自らの体験によって、自我愛から地球に際限なく物質を与えることが、結果的には地球人をいかに不幸にしているかをオリオンに知らせ、気付かせ、物質を神様の御心の通りに地球人類に与えることが地球を幸福にすることであると理解させる。これが真をもつての戦いであり、目では見えない、<sup>、</sup>無の世界<sup>、</sup>での戦いなのである。

従って、ワンドラーが地球と人類を救うということ、今までの地球の既成観念で推し量ってはいけない。彼らは、宗教家や指導者のように高壇から有り難い説教をしたり、お経や、お祈りや、加持祈禱<sup>かじきとう</sup>をしたり、摩訶<sup>まか</sup>不思議なことをするのはないからである。また演説や文章で人を説得したり、あるいは唯一独善の教義だといって自己の考えを他の人々に強要するのでもない。また虫一匹殺さぬという顔をして、澄ました綺麗な身を売りものにする偽善の道徳者でも、予言者でもない。さらに強大な権力によって遊星を制覇するのではないことは勿論のことである。

ワンドラーは正に宇宙の煙突掃除夫である。地球という暗黒の煙突の中に入り、真黒な煤<sup>すす</sup>を全身にかぶり（地球のカルマを全身で体験して）、その中で、どす黒い煤（カルマ）を落とす（解く）のである。

決して綺麗ごとではすまされないのである。全身に泥（カルマ）をかぶり、同じ泥の中で喘ぐ人類と地球と共にあって、地球のカルマを身で体験し、そのカルマの根を理解し、それを真で解くのである。だから彼ら<sup>ワンドラー</sup>の多くは特殊の立場とか地位にはいないであろう。彼らは、極く一部の人を除いては、平凡な目立たない一市民として存在している。

しかし、ワンドラーの中にも、受けるカルマ（みにくいカルマを体験すること）から逃げてカルマを外から眺め、多くの宗教家、指導者と同じように、<sup>、</sup>我が身は綺麗です<sup>、</sup>と語り、地球のカルマを外から責めて、綺麗ごとで人類を救おうとする者が多くあった。

彼らは、仲間のワンドラー達が、全身で地球の泥を受けて、しかも淡々と、あるいは苦しんだり、悩んだり、その中で、<sup>、</sup>んきに生活して（戦って）いる外見の姿だけを見て、その心を見ずに、その醜い姿を攻撃したりした。こうして、愛想を尽かして仲間から去って行った者、あるいは失望と争いで仲間別れとなった者は、相当多くの数にのぼるのである。

現在の地球へ来るまでのいくつかの遊星の例をあげれば、最後の時期に至るまでは、つまり、円盤・宇宙人の問題までは、ワンドラー同志の意見は合っていた。しかし、遊星のカルマを身に受けて、それを解くという最も重要な役に目覚めず、進む道を間違えたワンドラーは、この重要な点で意見を異にした。その結果、遊星のカルマが解けずに失敗の世の終りとなったのである。

遊星のカルマを身に受けることは、正にカミソリの刃の上を歩むがごとく、極めて危険

な道である。一步足を踏みはずせば奈落の底に落ちこみ、カルマを解くどころか、さらにカルマを作って、身も心も魂までも傷つけるという、命にかかわる大変な道なのである。『地球のカルマのさまを見て、それを救うために、死を賭して助けに来たのです。』と、**“AZ”** がいわれた意味も理解できよう。

ワンダラーは、世のさま（地球のカルマ）を見てそれを評論したり、批判をしに来たのではない。地球が不幸になった原因を身で体験し、己の魂が知っている神の国、即ち本当の世界を思い出して（目覚めて）、正しい本当の世界と地球の間違いとを心の中で照らし合わせて地球の間違いの根本（カルマ）を生活の中で知り、それを解く戦いをしに来たのである。

生活の場を離れ、別の所から遊星の悪を批判し、ただ言葉の上すべりの、世の建替たてかえ、世の終りを叫んだり、綺麗ごとで世を救うことが使命であると勘違いしたため、本当の役目を果たさずに終わった元ワンダラーは萬たる数にのぼる、と**“AZ”** は語られたことがある。この元ワンダラーの方々も、再びこの地球に生まれて来ている。

彼らは、こんどこそは道を間違えないように、正しく目覚めて、使命を果たすことを心に誓っている。しかし、地球の肉体を着ることにより、その決意を忘却してしまう。彼ら

が、魂に、真まことに目覚めるまでは、なかなかその決意の記憶は呼び戻らないのだ。今迄に積み重ねて来た自分のカルマが、再び地球で再現されるからである。そして今がそれを再現させて刈り取っている時なのである。刈り取れば、彼らも必ず目覚めることであろう。

宇宙は辛抱強く待っている。宇宙の偉大な方々は、**“目覚め”** を大きな忍耐で待っておられるのである。

この地球での戦いは、決して負けられない戦いである。積み重なった地球のカルマからは、今までのように、ワンダラーは逃げることはできない。もうワンダラーにはどこにも逃げるところはないのだ。逃げられないカルマで、**いかに苦しくとも、目覚めねばならぬ**のだ。

次に掲げる文章は、母親が中学一年生のわが子に送った手紙の一部を抜粋したものである。これをここに紹介したのは、来たるべき新時代を招来するための大仕事を遂行すべき使命を背負っている方々に、ワンダラーの使命に対して、ある深い理解と目覚めを促す助けになるものと確信するからである。

吾子、K君へ

母より (一九〇〇年)

——前文略—— サニカル様（K君の地球に来る前の遊星における名前）としての魂は、よく物事を正しい目で見られる大変偉い魂です。でもサニカルではなく、Kとして、この地球に生まれて来たということを、よく考えて下さい。

K君も今まで決して正しいことだけをして、今日まで暮らして来たわけではないでしょう。それと同じように、世間の人は知らず知らずの内に、間違いをしたり、知っておりながら、自分の得とか、勇気がないために間違いをしたりします。そして、それが、大変間違った生き方で、本当の生き方が、どんなに大切かが判らないまゝ、毎日毎日、そのような暮らしをして、到頭、それが普通の当たり前のようになって来たのです。

それが、K君には中々ゆるしておけないように思われるのですが、どうしてそのようなことになったかを、よく考えてみると、皆の心の中に、何が正しいか、ということやお金や力に頼らず、何に頼って生きて行けば、皆が幸福になれるのであるか、ということが判らないからです。

身体というものがあるため、腹が空るし、寒いと着物がいるし、雨や風をしのぐには家がいります。それが出来ると、そのほかに、心に語りかける神様のお使いの方々（AZ様やアトネ様たちのこと）の聲が聞こえないような、まだ魂の育っていない方々であるために、もっとももっと、いい食物、いい服、いい家と、求めて際限なく続きます。

そして時間が余った時には、静かに神様を思ったり、神様の声を聞くことをしないために、色々の遊びを次々と考え出して来て、今日のような世界となったのです。

それを正しく助けるためにワンダラーとして私達が来たのです。一人一人に話して助けるには、余りにも世間の間違いが大きいために、全員のワンダラーが、それぞれ受け持ちを定めて、世間の間違いの内の一つ一つを自分で実際にやってみて（体験して）、それがどうしてできたかを知って、大周期の来た遊星の世の終りに、神様の御心のままに来る

わくたまの祝事の儀式<sup>いらいと</sup>でそれを語って、……いろいろな物質を与えてくれる役目をするオリオンに、物質を正しく、神様の御命令の通りに人間に与えて、人間が余り物質ばかりを大切にせず、神様の声も聞けるような程度に物を造ったり、使ったりすることができるように話し合います。（編著者注・テレパシーとテレパシーの戦いのこと。）

いろいろな物に興味を持って、それをどんどん追い求めて行けば、どんなに苦しい状態が心に来るか、とか、物を沢山使ったり、力をどんどん使ったりできる人は、ある程度に仕合わせだけれど、そののできない人が、どんなに苦しむかを、自分自分の体験で知って、それをオリオンに知らせるのです。

悪い人を殺したり、いろいろ話をして良くしたり、ということとは……殺しても、その人の魂はなくなるものではないし、それで悪い人が消えるわけではないし、また殺す人も、それだけ、大切な生命というものを、神様の御心も知らずに勝手にこの世から消して、その人の魂の育って行くのを邪魔することになるといふ、間違いをすることになります。

次に、いろいろ話をして判るといふのは、ある程度魂の出来上がった人だけで、そのほかの人は、話をして良くなるというのならば、今までも、キリスト様や、オシャカ様がいろいろと良い話をされた時に、良くなった人が沢山できて、その人々がまた、いろいろ話すお寺や教会などで、もう世の中は良くなっているはずですよ。

それができないから、神様をお願いして、わくたまの祝事の儀式”という行事をして頂くわけです。

K君も、これから正しいと思うことはハッキリと言って、あとは無理矢理にその人を良くしようと思わず、また殺そうなどと思わず、のんきに神様を信じて、わくたまの祝事の儀式”を行って、……今まで自分のして来たことや、自分の廻りで起こる出来事を静かに見て、……なにを神様がK君に教えようとされているかを心で感じて、のんきに暮らして下さい。

正しいことだけの世の中、正しい人だけの世の中に行きたいと思うのは、誰もみな同じ

ですが、神様の中から次々と生まれる新しい生命というものは、みな最初は、自分のもらった力を神様の望んでいられるように正しく表わすことができない、荒々しい生命です。その魂が育って行く道の姿が、この世の中（地球）の姿なのです。

K君も、その昔は、そのような魂だったかも知れないのです。だから、よく育った者が、みなで力を合わせて、神様が、お喜びになるように、育たない魂の面倒を見て行こうと、自分で神様の手足となることを誓って、神様よりご命令を頂いてワンダラーとなるわけです。

——後文略——

ワンダラーは現在の地球に生まれる以前にも、地球を知るために生まれて来ている。ウイリアムスンがアメリカに生まれる以前（前の世）には日本に生まれていたごとくに、支那の三国時代に皇帝として生まれていた人、その時の宰相であった人、また大將軍としてその皇帝に仕えていた人もいる。ある人は、紀元一八三年にワサラウブコワという名でロシアに生まれていた。またある者は、奈良時代に沖の石磨という家の青年戸主で地位は朝臣、朝廷に仕え、五〇才で死亡している。ある婦人については、『前の世は飛鳥時代に生まれ、大和のアミノ姫という方で、お父様はまことに偉い方でした。土星ではヤリヨネと

いう名のワンダラーで、年は一〇三才。』と、"A Z"は語られたことがある。またある人は京都の山科、太田九郎衛門という医者で、明治一九年六〇才で死亡している。

これらはほんの一例であるが、いずれも『あらかじめ地球の物事を色々知るために来たのです。』と宇宙人は語っている。ワンダラーは現在の本番の前に、下見というか、予行演習というか、以前にも地球に生まれて来たことがあるということである。

しかし、今のワンダラー全員が、この地球の大周期を本番として来ているとは限らない。中には、次の遊星の本番に備えて、この地球でいろいろのこと（大周期の来た遊星の）を学ぶために来ている者も、小人数だがいるのである。

いずれにしても、今、現在、地球では本番が行われているのである。使命を果たす時期を一九〇〇年代の後半として、この時期に標準を合わせて、多くのワンダラー達は地球目指して再び降りて来たのである。

## 第七章 友よりの翰<sup>てがみ</sup>

S氏より（一九六九、一、一八）

○今は非常に大事な時である。かつてなかった程の大切な時を迎えたのである。

かつてみなさんと、味わい、戦った、あのドス黒く渦巻くカルマ、今はそのみではない。

いや、全く変わって来たようである。

心を新たに、肉体を越えた、すべての感覚で、新たな動きを知らねばならない。

今までと違った、白兵線に我が身が立つ今を知らねばならない。

日本の国に立つ、オリカイワタチの戦いを知らねばならない。

時はすでに止まっている。

非常に注意深く、身のまわりを見なさい、また自分も……。

決戦の時が来たことを、呼びかける声が続いている。

○空は燃え、地は揺り動こうとも、心、微動だにせず。

○幾多の困難の戦いと、難解の忍耐の教えを判り、日常の教えの場の教えを判り。

天の神様に身も心もゆだねて、ゆるぎなき真の自信に満たされて、真の真剣さを心に秘めて、真の道を、忍耐の心、大いなる礼儀の心を持って真の道を邁進せん。

○淡々と靈感を受けて、日毎の教えを判り、過ごして行く毎日。

○天の神様は礼儀をもって、靈感をかけられる。それが、どんな形を取ろうとも、礼儀をもって受ける。そして判ることである。

○頭が高い、真の自信を持つこと。真の自信を持って、真の言葉で語ること。

○天の神様は、礼儀のない神の子に限度の大試練を、進行のライマカタを与え、かのつくり給うた、荒魂を和魂に変え、神の御国は誕生しつつある。

和魂とは節度、忍耐のわかる心の敬虔なる魂。

○木のごとく、大地に根を深く。天にあまねく、愛の心を差し延べて。

○自然の成り行きに任せて、ただ天の神様に身も心もゆだねて、この偉大なる教えの場にいる、廻りの方々を愛で包み、心の安らぎを得る靈感が、真の靈感である。

○まわりから馬鹿にされたり、気違い扱いされたり、真の道は峻しく、苦しく、それを忍耐する心により、内なる真の自信、即ち、天の神様がすべてを知り給うという心の絶対的信念と自信が成長し育ち、……天の神様の大御業に仕えることができる。

○真心で日々を尽くし、真心は人間本来の魂からの光であり、神の光である。その光はすべてを突き抜け、矢のごとく、人の心を射る。それは心を打ち震わせ、愛の根元なり。身にふりかかる、寄せる波のごとき靈感を、よくこなして、忍耐強く、廻りの語られる言葉も、自ずから与えられる靈感として、その深い意味をよく判り、今の期を、これからも、よく世の中の様々な感情を味わって、そのうずもれた真を判り、全身に嵐の靈感

を受け、嵐の中を忍耐強く、茨の真まことの道突き進んで行こう。  
貴方の廻りに垂れ下る、重いカーテンを真心で溶かして行こう。  
愛はすべての、すべてを溶かし、愛は愛を呼びよせる。

○カルマがカルマを生み、カルマがカルマを倒す時。世の終りを忘れてはいけない。世の終りの来ることを。

神の国、人々の心に光が満つる神の国の来たることを。

孤独に勝て。孤独は神の愛する姿である。世のカルマに押し流されがちな孤独な心に、世の廻りの見せかけの愛に、心をもたせかけてはいけない。

人々の心に光を投げかけるワンダラーの役は、オイカイワタチの役である。

孤独を超えることである。孤独はすべてのものに対して、心を閉じがちであるが、それを超えることが大切である。

今の靈感は大切である。身にしみて受けよ。各々が靈感を受ける時である。

○我々の生活の中から、世の著しく進歩している科学の表われの中から、そして、人々の精神の高揚の中から、我々の様々な心の動きから、来たるべき時代の流れが肌に感じられる。  
もう目の前に来たるべき世界が、大きく門を開けている。すでにある面では、門に一步踏み出している。  
我々は大きな目を開き、手を広げ、より以上の広い心で人々に接し、来たるべき人々に対して、懐しき心をもって迎えようではないか。  
そして、我々の中から一人一人帰ることもある。その時は喜びの心で送ろう。

世の今の現実の悲しみは、決して悲しむべきものでもなく、また喜ぶべきものでもない。川が下流に流れるごとく、雲が空を流れるごとく、川の流れは激流あり、滝あり、また、その流れの奥には清らかな小川となっている。

我々の毎日の生活で接する人々から、二度と得ることのできない大きな真まことが、心に自然に湧き起こり、それは自然の法則により、自然の中に還元され、自然との一体感は、しいては、太陽系、宇宙全体の進化を肌で感じ、今の世のあり方が理解されるであろう。

○氷山の一角のような想い、思いは、大切にすべきである。探求すべきである。消化すべきである。

○神様の涙でぬらす地球  
 神様の御心がいかにあるかを察し得るワンダラーが少ないのが悲しい。  
 不満の多い地球は、進化の過程で、いかに克服して行くのだろう。ワンダラーの不満は地球の不満である。

○目まぐるしく動く、この世で忙しい世事がことさらに気を取られ、世の動きが判らないまま、次の仕事に出かけないよう。  
 忙しい中に、ゆとりとのんきを見つけて、判るようになることが大切である。

○人々の心を知り、理解することである。ワンダラーということを自覚し、オイカイワタチの役をこなすこと。

オイカイワタチはあなた方のイメージのものではなく、もっと地味で、縁の下の力持ちの役である。物ごとを形造るのに、基礎と土台なくしてなにができませんか。  
 その時、その時、感じることに、思うこと、考えることを、身にしみてかみしめることである。

○心の礼儀があつてのライマカタはクカタカタとなり、人々の間違つた道から、真の道まことを示して救う。  
 心の礼儀の無いことは、いろいろの形のライマカタを生み、カルマを造ることになる。

編著者注・ライマカタ（宇宙語・詳細は後述する）とは、強くものごとを押し

つける心の状態をいう。心の礼儀のあるライマカタとは、心の節度、忍耐、敬虔をもって素の儘まま、靈感の儘に、ある時は強く、ある時は鋭く、愛の心をもって語るライマカタである。このライマカタはクカタカタ（宇宙語）となる。クカタカタとは、身を挺してカルマを断つ働き。これによって正邪の判断が行われ、義となつて、人々に真の道を示して、間違つた道から人々を救うことをいう。心の礼儀のないライマカタはカルマを造るのである。

○すべては、心の礼儀がないために、形の礼儀に囚われて、はかなく、火のごとく、あじけなさを味わうのは、オリオンのタイタスカンの心の礼儀がないためである。

編著者注・タイタスカン（宇宙語）とは、

ひとの苦しみは自分の苦しみとし、ひとの喜びは自分の喜びとする心。王として王の持たねばならぬ心、王の王たる心。

## 第八章 折々の記

これは、当時の心のおゆみと、ふと想い、思ったことなどを折々に書きとめたものである。

○地球製円盤を造ろうと試みる人達もあるようだが、今の地球の周波数ではこの試みは失敗することは明らかである。

なぜならば、宇宙船は、鉄板や鉄骨を溶接したり、鋸打ちしたりして組み立てられるものではないからである。宇宙船は創造されるものである。宇宙船の各部分は、ある「自然の生体」の中に見い出されるような結合力によって、支えられている。

人体の構造と円盤の構造は、根本的には同じ原理である。だから目撃者の中には、まるで生物のようだ」と報告している者もある。宇宙船、人体、遊星、太陽系は、いずれも根本的には同じ原理にもとづいて活動している。

宇宙船は、パイロットたる宇宙人の「第二の身体<sup>セカンドボディ</sup>」として活動する。つまりパイロットは、その身体をコントロールできるのと同じ程度に宇宙船を操縦できるのだ。操縦は、想念の力でおこなわれる。だから大宇宙船には、第四密度の宇宙人が必ず同乗しているといわれている。

○宇宙船は、地球人にその姿を見せる必要のある時に、我々の目に見える形で姿を現わすのである。かつて、『必要<sup>いりごと</sup>事でありませんから今は円盤は（東京上空にいても）見えません。』といわれた。

○宇宙船も、宇宙人と同様に、高い周波数を持った存在であると考えられる。必要に応じて周波数を落として、我々の目の前に現われて見せる。必要<sup>いりごと</sup>事でなければ姿を消して飛行（滑空）する。しかし、時には「内部の眼」あるいは「第三の眼」で見える程度に周波数を落としてくれることもある。

○地球人が、あらゆる面において高度のバイブレーションを発する、「新時代」に入るためには、食品の面でも、自然の食品、すなわち、高周波数振動の食物を食することが大

切であることに気付くであろう。

○自然の食物は、身体諸器官が健全に働くためには欠くことのできないものである。自然の食品が持っている固有の生命波動は、人工加工した食品より遥かに高いのである。

○霊的、精神的、身体的のいずれにおいても、地球人は全部が大掃除されねばならない。

○万物は「因果の理法」によって創造される。

○直感とは人間の魂の声であり、強力な力である。

○『まず、生命を賭して使命を遂行する覚悟と準備が自分にできたことを示さない。そうすれば、みなさんの任務はますます開始されるでしょう。』と宇宙人は語る。

○いろいろな目的から円盤に乗って地球に着陸し、都市に入って生活している宇宙人も、常に相当の人数はいる。その人たちは決して長居はしない。必要な調査が終れば直ちに

帰って行くか、または交代する。

○愛の法則を成就した、その状態になってこそ、神の霊は自由に動きまわることができる。神が、そのすべてを与え給うことができるのは、愛の支配するところだけである。

○『私達（宇宙人）が全力を挙げてお、手、伝、い、に、行、く、時、に、は、恐、れ、な、い、で、世、界、中、の、人、達、に、そ、の、こ、と、を、知、ら、せ、て、下、さ、い。』 そのこととはその時のことである。

○創造主の示し給うしるしは正確である。しかし、そのしるしに気付かない人には理解できない。

○本来、万物はみな霊的な存在で、宇宙を住家としている。

○人間に与えられた最大の贈りものは、インスピレーションである。（ダイアン）

○直感の体系を通じて、宇宙の核心にふれることができる。（ダイアン）

○直感のひらめきに注意せよ。日常の問題解決に直感を大切にしないで。恐れてはいけない。霊から出るものには決して間違いはない。（ダイアン）

○直覚は、変化の寸前の休止の時にやって来る。心が休息の状態にある時、心が宇宙の核心に触れ得る時に、それはやって来る。（ダイアン）

○アメリカ、カリフォルニアのダナ・ハワードとコンタクトしたダイアンは、『金星の婦人です。いまは金星におられます。』と宇宙人はかつて私達に語ったことがある。

○『私の乗っている母船の長さは四キロメートルで、二万人の収容人員があります。』これは母船の大きさの一例を教えてくださいましたものである。

○『それぞれの遊星には中心者があります。金星では、人の形の、霊的に進んだ方です。』

○日本の現天皇は、実に神聖な偉大な御魂のお方である。

天皇陛下は、『金星の御魂の方で、年令は二、〇五六才です。』（一九六〇、一〇、二）

皇后陛下は、『金星の御魂の方で、年令は二、〇四五才です。』（一九六〇、一〇、二）金星においても両陛下は御夫婦であると、A Z様は語られたことがある。

○日本の皇太子殿下は、『神様の席の方です。』と語られた。

そして新時代にそなえての使命を持って地球に降りられた御方であり、その使命は『カアハミテス』であると言語で語られ、その意味は『今は語れないのです。』と。時期尚早ということであろう。しかし、これらのことは時が来れば判るわかことであろう。

○美智子妃殿下は『金星の御魂の方で、年令一、八五〇才。』（一九六〇、一〇、二）

天の神様のお使いをなさるアトネ様の姉にあたる方で、金星における名前を『サリナ』といわれる。

○弘法大師は、『冥王星の方です。』

○孔子は、『カールの方です。今（一九六〇年）はイタリアにおられます。イタリアのバチカンにいる聖なる方、あとはいえませんが。』

○チャップリンは、『カールの方です。』

○この世に、悪い者、悪い姿、悪い動物などが造られるわけは、『真我に目覚めないものは、みなすでに、あそこまでも行くのです。』

○『私は金星から来た、金星の地球人です。名前はオオタキイワオといっています。一九五八年、日本の栃木県から宇宙機で金星に連れて行かれたのです。』

地球から八三〇人金星に連れて行かれました。日本人は私一人です。私の金星での役目は、その時に、金星に地球から来る人を迎える仕度をしたのです。

その時の時期は判りません。神様の御胸にあります。A Z様は金星の長老です。』

（一九六〇、七、八）

○『私は水星のストラといっています。二五才の女性です。私は日本の担当です。』

水星は快適なところです。住みごころは大変良いところです。蛇はおりませんが、いろいろの動物はおり、みなとてもなついています。

水星にも学校があります。勿論本もあります。生まれて四年で学校に行きます。テレパシーは子供の時からできるので。私の夫はリスクと申します。子供はありません。

水星の女性で日本に来たお方は、ほかにまだあります。私は日本語を、金星に来られた地球人から習いました。その方はオオタキイワオという日本人です。彼は一九五八年に金星に来ました。彼は水星にも来られました。』（一九六〇、七、二〇）

○ポルトガルのファーターイマ事件（一九一七年）、即ちマリア様から封印の書を頂いたという、このマリア様とは誰か？　そして封印の書は予言をしるしたものであるのか？　の問いに対して、

『それは土星のランキイという婦人です。予言と違います。その内容は聞かないで下さい。』と、AZ様は語られた。

○一九六〇年八月頃、私達仲間の一部の者は、テレビの画面の½くらいが突然消えて、そこに円盤が写ったり、スイッチの入っていないブラウン管に円盤が写ったりするという現象を体験した。この現象は、各地で続いて起こった。このような異なる現象に興味を持ち、まだ見たことのない一部の者が、宇宙人にこの現象を見せてもらえるように頼んだことがある。それに対する回答は次のようなものであった。

『あなたがたは、そのようなことは必要ありません。沢山の人を助けることだけに勤めることです。不思議なことのみを求めてはいけません。他人を救えるよう自分の力を強めなさい。最後の時に一人でも多くの人が救われるように、心の正しい持ち方を教えるのです。』（一九六〇、八、二〇）

○その時の救いには、霊的救いと、肉体的救いの二面がある。肉体的に救われるのは、地球再建のために働く方である。

○その時は一体いつなのか？　その時はいつ来るのか？　の問いに対し、宇宙人は、

『その時は判らないのです。かつ、それは神様のお考えによります。神様のみむねにあるのです。』

と答えられた。しかしその時期は大変近づいており、時間は余りない、とたびたび知らされている。

○エジプトのピラミッドが造られた理由を問うた。

『大変なものを聞きましたね。地球のいよいよ最後が近づいた証拠です。聞く生命が危ないので、もう暫くは止めましょう。』と、アトネ様は答えられた。

○リー克蘭ダルは彼のコンタクトストーリーで、金星に訪問した時、金星の婦人達が空中に浮かんで出迎えてくれたと語っている。これは真実であるかと宇宙人に質問した。その返事は、

『金星では、ほとんどの人は、あのようなことができます。』

○地球の霊界の悪い者は、地球の最後が近づいていることを知っている。今はもはや、少しの生命と知っているので、イライラしている。そして地球人にすぎ、あらばたかろうと知っている、これからは、たかられた人達による様々な悪い現象が出て来るであろう。「われは宇宙人なり。」と語ってイタズラをする霊媒現象も現われるであろう。

○私達仲間の一人のW夫人、小型トランジスタラジオの五三〇キロサイクルで、妙なる音楽を約一五分間聞く（一九六〇、七、一三）。以来、ラジオを使わないで、直接自分の耳のそばで妙なる音楽を数回にわたって聞く。そのことについて宇宙人は、  
『母船からWさんに送った、土星の音楽です。』と答えられた。

そのW夫人は、それ以来一九七四年までに、曲の違いはあるが、土星の音楽”と思われる妙なる音楽をたびたび聞いている。時と場所には関係なく、突然、土星の音楽”が耳の近くで聞こえるのである。その時は仕事を忘れて聞きはれるとっておられる。

○金星の長老サナンダ様は、救世主イエス・キリストとして地球に降りられた以前にも地球の日本に來られたことがある、と次のようにいわれた。

『二、〇二八年前（一九六〇年にこれを聞く）に日本に來ました。カストンという名で、土星から日本に來ました。』

○イエス・キリストの三日後の甦えりの意味について質問した時のお答えは、  
『オリオンの者が、よく私（イエス）を地球から除き得るということを私を頼る人々に見せ、オリオンの力を彼らに知らせたのです。でも彼らを力付けて、正しい神様の力はそれ以上に、遥かに強いことを示すために、私は彼らの前に現われました。』

○この宇宙は、神の創りたもうた宇宙劇である。全員（大宇宙、恒星、遊星、衛星、人類動物、そして自然の一切のもの）がそれぞれの場において、その場の主役である。それぞれ神様から頂いた尊い役目を持っているのである。神様の前には、偉い偉くない、上下などの差別は本来ない。神様から与えられた役を、感謝と奉仕で果たすのである。

○すべては無の場に立って、その無の心に湧く素の儘ままの語らいと行動が大切である。

○今の場は神の試練の場である、そしてその試練には、必ずそれを解くカギを神様は用意されている。

○このような思い、想いがなぜ浮かんだかを追求して、その原因を知ることである。

○カルマ

のんきを忘れ、心の礼儀（心の節度、忍耐、敬虔）を忘れ、我の心から、我の愛の心から、そのことを掻き立てる一切の言行動から、カルマが生ずる。

自分の考えに他を強引に入れよう、自分の正しさを他に押し付けようとする、そこからカルマが生ずる。

そのカルマを見て対立する言行動が、さらにカルマを呼ぶ。

神様に全託できず、のんきを失い、焦躁感、イライラ感、対立感とその行動がカルマを生む。

○我から出たライマカタはカルマを作る。

註

ライマカタとは宇宙語である。強引に押しつける心のこと。政治、経済、宗教、教育、軍事と地球の一切は、我のライマカタに覆い尽くされている。

○神様に身も心もあずけた靈感のままのライマカタは、地球を救う大切なことである。

○ある進歩のためには、神からのライマカタがある。これは神様からの靈感を受けた素の儘ままのライマカタである。

○ライマカタは物質に心の重きを置き、神様に全託していないところから起こる。

○素の儘ままのライマカタを語ることは大切である。

○ワンダラーは生を受けてから目的成就まで、ライマカタとの戦いである。

○須佐男命は、ライマカタの表現である。即ち、ライマカタはある程度必要であるが、結局はライマカタでは地球は統治することはできないという象徴である。

○ライマカタで強制しようとしなくて、待つ忍耐が必要である。

○天照大神は、ラタカルタ（宇宙語で愛、の意）の表現である。ライマカタ（須佐男命）が余り強く現われると、天照大神（ラタカルタ）は岩戸かくれされ、世界は暗黒となる。

○ライマカタの二つのかたち。

外へのライマカタ、

これは他へ強引に押しつける心として表われるので判りやすい。

内へのライマカタ、

これは他を拒絶して、自己を固い殻にとじこめる心として表われる。外へのライマカタほど判りやすすくないのでみすごされがちであるが、まわりのまことを受け入れない頑固さで、人と人との間の真の理解と愛とを妨げるといふライマカタの悪い面においては、共通である。外へのライマカタほど目立たないだけに、気付かれない場合が多いようだ。

○地球人類の $\frac{3}{4}$ 以上は、オリオン、ルシファーの靈感を受けている。

オリオン、ルシファーの靈感は、人類の指導者層を通じて送られている。その指導者のライマカタによりカルマが生じ、そのカルマがカルマを呼んで、地球、及び人類は、身動きできない程に、たかるカルマにうずもれている。

○我、以外は、すべて、これ師なりと感ぜられない時があるのは、さげすみのライマカタが働くからである。

○世にもし、さげすまるべきものがあるとすれば、それは、ただ、さげすむという行為のみである。

○現代の宗教の多くが示す、念力、信念、祈りによる自己の希望表現、及び、霊眼、霊舌、霊聴、霊鼻、霊力による宗教的奇蹟、

これらにはルシファーの靈感によるもの、即ち我の愛の救いによる場合が極めて多いことを知るべきであり、これを神の愛と救いの現われであると見誤ってはならない。

## ○祈り

一定のことを考えて神様に頼むことではない。自分の都合の良いことを考え、希望、願いを絶えず、強く心に思っ神に頼むことでもない。これらは、<sup>なた</sup>「鈍の祈り」といわれる。多くの宗教は、<sup>なた</sup>「鈍の祈り」を教えているが、これは本当の祈りとはいえない。

祈りとは、<sup>まこと</sup>真の心に湧く神様への語らいを頼むことである。

○神様は極めて平凡に、普通に、あたり前に現われ、決して、<sup>にきにき</sup>賑々しく、<sup>いふいぶ</sup>威武威武しく現われることはない。

神様の音楽は、みなが想像しているような、魂のトロケルようなものでは決してなく、極めて簡素なものである。

神様の光は、黄金色や白光色で目がくらむように眩<sup>まばゆ</sup>く輝く光ではない。極めて単純にして、清楚なものである。

とかく姿、形、音色は威武威武しく、賑々しく、光明燦然と黄金白光に輝くのを、神と見誤りがちである。

○神様は霊験あらたかという奇蹟の中にあるのではない。

○今の地球には、神様の一面を説く宗教はあっても、本当の神を説く宗教はない。

○形の威厳のない、極めて平凡な姿の中に神があり、神の助けがある。

○ルンファアの威厳の姿を、奇蹟を、多くの人は、多くの宗教家は神と見間違える。また間違えてきた。

○本当の幸福は形の威厳の中にはない。素の儘<sup>まま</sup>、平凡、素朴、質素、簡素の中にある。

○今の地球は、形の威厳に覆われ、それらによって多くの人々の信念が支えられている。

指導者の威厳、 権威、権力の威厳、 学問、知識の威厳、

宗教の威厳、 教育、学歴の威厳、 態度、行動の威厳、

金力の威厳、 科学、文化の威厳、 言葉の威厳、

活字の威厳、 姿、形の威厳、 衣服の威厳、

住いの威厳、 食物の威厳、

等と数え上げれば際限がない。この世は形の威厳の集積である。

○形の威厳に迷わされず、本当のものを知るのには靈感である。

○今までは、多くの人々は、形の威厳によってその信念を支えられていた。これからは、形の威厳に囚われないで、形のないところに、その信念を深めることである。それには靈感をもってする以外にはない。

○神の靈感を受けるには、

無我にて、神様に身も心も全託し、のんきな心、難解の無為ののんきを身につけ、心の礼儀を充分にわかまえることである。

○心の礼儀とは、

節度

忍耐

敬虔

節度（限度）のないところから、忍耐、敬虔を忘れたところから、今の世の混乱した地球となったのである。地球には形の礼儀はあるが、心の礼儀が失われている。

神の靈感の儘<sup>まま</sup>、素の儘<sup>まま</sup>に行動し、語り、生活することである。靈感を良く受けるためには、心の礼儀を失わぬことである。

苛立った心、のんきを忘れた心には、心の礼儀が失われている。これは、靈感を受ける道を自ら止ざす心である。

我執の心から生ずる一切の行動、言葉、生活は、心の礼儀がないことを意味する。

我心が多くて靈感が受けられないのは、心の礼儀がないからである。

靈感を受けながらそれを見送ってしまうのは、心の礼儀がないことである。

迷わしの、思い、感情、テレパシーを受けるのは、心の礼儀がないからである。

○素の儘の生活

形にも、心にも、執着がない、力みがない、企み、計らいもない。身も心も神様にゆだね、のんきに、無我で、ただ素の儘、靈感の儘に、語り、行動する。

それがどんな形（綺麗なこと、汚いこと）を取ろうとも、素の儘であることである。素の儘は綺麗ごとだけではない。

○いかなる苦しみ、悲しみ、妨害にあっても、のんきに神を信じ、身も心もゆだねて、心

は幸いと平和と愛に満たされ、晴ればれとしていられることが大切である。

○地球人はのんきを忘れ、のんきを失ったので、のんきを取り返す、その見本を示すためにワンダラーが来たのである。

○浮いたのんき、浮いた愛には素の儘のライマカタで語ることに。そうすれば判り、心の礼儀のあるのんきとなる。

○素の儘のライマカタはクカカタとなり、誤ちを正して、真の道を示し、人々を救う。

○ワンダラーには師はない。神以外のものに頼ってはいけない。自己内在の魂に目覚めることである。必ず目覚めることができるのである。

○地球上に起こる台風、風水害、地震、異常気象などは、すべて目覚めを促す助けである。

○ワンダラーは、神様の靈感を受けて素の儘の生活をするのである。それがどんなに汚

れ、醜いことでも、神様の靈感の儘であれ。神の靈感を、宗教家のいうように綺麗ごとだけと考えるはいけない。すべては神の御心を現わさんがためである。

○目覚めのために素の儘であれ、といっても、ただのんべんだらりと浮いたのんきで日々を送れというのではない。身も心も静かに、真剣に世の動きを見て、想い、思い、考え、のんきに心の礼儀を持って日々を送るのである。

○神の助けは、必ずしも肌ざわりが良く、自分に都合の良いことばかりではない。むしろ、苦しく、真剣に考えさせられ、試練の姿を通して魂を練る助けが本当の助けである。

○この魂を練る苦しみの中で、苦しみの余り、神の存在を否定し、神を恨み、その感情を身に受けて体験して、ルシファーが地に落ちた心の苦しみを知る試練を受けたこともある。

○今、自分の置かれている位置、状態、経済、家庭、職業、身体など、すべてが魂の目覚めの助けに一番良い条件下にあると知るべきである。

○今、時々、色々な迷わしの心、迷わしの想い、思いが出てくる。その時がテレパシーとテレパシーの戦いである。

その時の心境の変化により自らの心がライマカタとなった時が、テレパシーの戦いに負けた時である。

○いかなる迷わしのテレパシー、迷わしの靈感を受けても、のんきでいられることが、テレパシーの戦いに勝っていることである。心の礼儀とのんきは真につながっていく。

○毎日毎日がテレパシーとテレパシーの戦いである。

○苦しみは苦しみとして正面から受けよ。悩みは悩みとして正面から受けることである。それから逃げてはいけない。その時こそ、その苦しみ、悩みの理由、真因を知ることである。

○離託りたく

一切の執着から離れることである。そして一切を神様に託することである。執着がな

いからといって、一切のものを大切にしないことではない。極めて大切にしながらも執着がない。執着しないで大切にする。

ある時、宇宙人の長老（AZ）は私達に次のように教えられたことがある。

『神様がものを大事になさるさまは、あなた方の想像を絶する程に大切に扱われます。』

○猛暑、酷寒、地震、台風、異常気象等は自然のライマカタである。自然のライマカタを見てワンダラーは目覚めよ！

○『地球は、寒冷の戦いが始まります。』と宇宙人は一九六一年に語られた。

○夢を大切に、足る誠で、まわりを愛せよ。

○地球という偉い人という言葉を他の遊星の人にあてはめるならば、忍耐の大きい人ほど偉い方といえようか……と語られたことがある。

○あなたに言う。現在は汝の運命である。汝の冠をとり、我はもはやルシファアの旅人

となるつもりはない。我は父の家に帰る」と宣言せよ。これは汝の兄弟達からの愛の教えである。

○A Z 『世の中は、あくまでも自然をもってことを運ぶよう、構えて企まぬよう頼みま  
す。』

○今までの例からすると、大周期のきた遊星が世の終りを迎えるに至るには、大体共通したパターンがある。

「その遊星の中には、神の降り給う聖地の国」があり、そこには天孫民族といわれる人々が住んでいる。そして、その国は、万世一系の天皇の愛と徳によって統治されているが、その天皇の愛と徳は仲に立つ人たちによって覆い隠されてゆく。長い歴史のあいだに、仲に立つ人たちの自我愛と自我欲の悪いカルマは段々と大きくなり、その悪の力が、天皇の本心を覆い隠して、勝手に違った方向へと歪めてゆく。そして、その果てにはその国はついに世界大戦争を引き起こし、完膚なきまでに敗戦して、天皇も国も国民も指導者も、すべてがいまだかつてなかったほどの苦しみを味わう。」

このようなパターンをどの遊星も世の終りの時期には通過してきたのである。

日本はいろいろの意味において雛形の役を果たす。

## 終章 地球は新生する。

一九四〇年代後半から特に多くの円盤・宇宙人問題が話題となり、米国を皮切りに世界を一巡した。円盤・宇宙人は世界各地にいる同志に覚醒を促して廻ったのである。一九五八〜九年頃より一九六〇年にかけては、それが日本において特に激しかったことは前に述べた通りである。

宇宙人からの呼びかけに応じて、オリカイワタチ、ワンダラー、リング、元ワンダラーと地球の真に目覚めた人達によって、今回の聖戦が開始されたのが一九六〇年であった。この戦いは十数年間に渉って続けられ今日（一九七五年）に至っているのである。

一九六三年一月、無の世界のわくたまの戦いが終る。

永い永い年月にわたって、地球を暗黒の力で苦しめ、人類を悪の力で誘惑し続けて来た外宇宙からの強大な悪の力は断たれたのである。すなわちオリオンは断たれたのである。

地球が、サタンの誘惑と、その悪影響を外部から受けることはなくなったのである。そして、これをきっかけとして、ルシファーもその力を次第に弱めていった。やがては彼も神様の愛に目覚めるであろう。これらによって、地球は、次第に大きな変化を現わし始めて来る。それはまず無の世界で現われ、そして有の世界へと移って行く。物質文化の成長と繁栄に対する人々の考え方も変わっていく。さまざまな変化のキザシが、心ある者には見え始めるようになって来たのである。

このわくたまの大偉業を成しとげたある方は、一九六四年二月に地球を去り、金星に戻られた。これによって地球には新生の礎ができたのである。

『世の終りの判る方は、世の中には沢山ありますが、カミラが語るわくたまの真夜中の変わるカルマを判る方は、かくまわりにはありません。』

外宇宙からの悪の力は断たれても、永年に渉って積み重ねられたカルマと残る悪の力は、なおも地球上でその栄華を誇っている。この地球と、人類のカルマと、弱る悪の力とを真で解く戦い（ワンダラーの聖戦）が、引き続いて始まっていたのである。これが祝事の儀式である。

祝事の儀式に参加した人達は、それぞれの生活の場で、真に目覚め、て真でカルマを解く厳しい戦いを続けて来たのである。それは生命を賭しての十数年間に渉る戦いであった。

『真の神は誠の通うところにおられることを忘れず、くたぶれぬことが大切です。』  
 『……世の終りより、まわりの方々のカルマがたかる、カルマで沢山の耐え難いことのため、くたぶれる方々がよく耐えられず、苦しみながら戦うため、まわりは沢山のたかる、カルマが連々としてたかって来ます。』

この無の世界における祝事の戦いを行った者の中にはさまざまな者があった。意識の面において自覚して戦った者。無意識の中で戦った者。当時（一九六〇年）は少年で参加し、そして若者に成長しながら目覚めつつ、この聖戦に加わった者。受けるカルマをさけて逃げた者。長い戦いに疲れ果てた者。途中から再び戻って聖戦に加わった者。このような方々によって、この戦いは十数年間に渉って続けられたのである。

このようにこれは長い苦しい戦いであったが、長びいたのは誰の責任でもない。使命を頂いて来た者たちの目覚めが遅れたからであって、責任は、使命を持つ者たち全員にあると思われる。

しかし、喜ぶべき日が来たのである。一九七四年二月二十六日、祝事の儀式が終る。

この日、二月二十六日未明、同時、同刻、私達仲間の二人が、それぞれ無の世界における、祝事の儀式が終ったというテレパシーを受ける。

「祝事は終わりました。」

「今までは大変苦しかったけれども、悪いものが消えて、新しい世となりました。これからは良くなり、綺麗になります。」

ここにワンダーとして勘違いしてはならないことがある。新しい世を開くためには、テレパシーができればならないと考える人も多い。しかし、本当のテレパシーは、真から真に通じるものであることを忘れてはならない。それをただの通信手段であると考え、真に目覚めないテレパシーを乱用するところから却っていろいろの誤りが生ずるのである。

悪い者との戦いにおいても、カルマを解く戦いにおいても、さまざまにテレパシーが飛びかき、苦しい戦いをせざるをえなかった。テレパシーは必ずしも本物のみを、いや、真のみを伝える通信手段ではないのだ。迷わしを伝える通信手段にも使われ得るのだ。

多くの人達が、オリオン、ルシファー、その他もろもろの、本物らしく見せかける迷わしのテレパシーの攻撃にあい、苦戦した。志を持って生まれた者の中にすら、この苦し

のために、世の終りの戦列から離れたものは多かったのである。

新しい世においては、いや新しい世だけとは限らずいつの世でも、ワンダラーはテレパシーを聞いてから動く体勢になるというのは正しくない。たえず（真から真に通じるテレパシーを聞きながら）真からの靈感で考え、判り、動いて行かなければ、働きはできないのだ。即ちワンダラーは受ける柔らかい靈感により自から進む方向を決定するのである。ワンダラーの本当の役目は、無の世界の中で働き、動き、無の世界の形を造っていくことにある。だから、歩む道は地図にさえない。神様から靈感を頂いて、無の世界で形を、地図をつくって行くのである。

受けたテレパシーは、その人の心と考え方の位置によっていかようにも受けとれる。これを正しく理解することは正しい靈感によらねばならない。だからワンダラーはたえず神に祈り、心の礼儀をもって、正しい靈感、テレパシーを受けることが大切である。

ワンダラーは、かけられる柔らかい靈感をよく味わって、それが、僅かな理解に止どまっても、更に、理解しがたい時も、神に全託して、靈感のまま実行することが極めて大切である。それを実行するにあたって、過去に学んだ知識を織り混ぜて、勝手な想像や、絵を画いてはいけない。だから実行という足を一步踏み出すには大変な勇氣が必要である。しかし勇氣を出して実行しなければ何事も前進しない。心と身を神様に預けて実行に移し

た時、道は必ず開けるのである。実行した時、それまで明らかでなかった、これらの意味も、全貌も、明確に意識の世界で判り、理解できるようにするのである。だからワンダラーは、その役を意識の面でも自覚して果たすことができ、またそれを果たしたことも判るのである。これは、ワンダラーの働きにとって、重要な意味を持つものである。

しかし、多くのワンダラーは、受ける靈感が余りにも柔らかく、氷山の一角のような思いのため、その靈感をやり過ぎてしまいか、一応は考えるところという段階にまで至ることがあっても、勇氣を出して実行という、足を踏み出すことに躊躇した。そして、頭で完全に理解できるまで待ったのである。それは、ワンダラーは無の世界で、形を、道を、地図を作ることであることを忘れてしまったからである。また、実行することにより理解の段階に達することを忘れてしまったからである。ほかの者から地図を聞いて理解した時は、すでに無の世界で形が出来上がった過去の姿となっているのである。

このような難解の戦いのため、役を充分に果たす者が少なくなり、長い年月をかけて戦わねばならなかったのである。

だから、ワンダラーはなにを大切にしておいて戦わねばならないかが、これで判ることである。

テレパシーが問いの形をとられる時は、無の世界への働きかけを意味するのである。だ

からその内容を靈感で理解し、たとえ理解しがたきことも、神を心に念じて行動するのである。テレパシーが問いの形をとられるのは、新しく無の世界に展開する働きの場が、与えられているからである。

二月二六日以降、私達の仲間の方々は、無の世界において新しい世の創られて行くさまを見る。(見るとは、靈感を受け、テレパシーを聞き、靈感で判ること。)

「九月十日、十七時五十分、本体は透明で鮮かな薄黄色をなし、そのまわりは薄黄金色の、輝くオーロラのようなものに包まれた、十字型宇宙機飛来。」

「ある理解を得た多くの人達は、手には一物も持たず、一定の方向に向かって淡々と歩き始める。天空から流れ出る音楽に全員が歩を合わせるように……これが新時代の始まりであり、正しい本当の世の終りの姿である」と理解した。「この光景を仲間の一人が、十一月一日未明、夢のごとくに見る。

「我、心から地球の新生と再出発を祈る。」

「寒冷の戦い、終る。」

「祝事の終わったあとにも残っていた、地球を覆う、黄色と白色で象徴されるカルマを破る。」

「地球をとぎしていた天のフタがとれる。」

「本物の判らぬ、うそぶく人達の意識に最後の絞りかける。」

「とり残れる、浮かぶカルマの意識が、暗黒の凄まじい津波となって地を襲う(終りの姿)だがもはや、被害を与えることは不可能である。」

「地球にはもはやなんらの障害も見当たらず。」

「春風駘蕩、輝き渡る大海原を航海するに似る日々。」

「世界は美しく変化し、すべてが終わった感じを受ける。」

「甦りの日の来たことを知る。」「今は甦りの時である。」

今までに述べてきたこれらのことは、無の世界で形造られ、もはや消えない絵となった姿である。無の世界での聖戦が終われば、この聖戦は有の世界へと移行して行くのである。しかるのちに、現象界、霊界ともに浄化が始まるであろう。この浄化が「これからは良くなり、綺麗になります。」の意味である。すなわち、過去のカルマが消えれば、良くなり、綺麗になるのである。しかし、そのためには、人類は、様々な苦しみを通過せねばならない。地球上には各種の大混乱が発生し、その姿形は凄まじいものとなるであろう。

このような激動の中にあっても、「充実した生活を行なって下さい。」と宇宙人は私達に語られた。

「カルマとカルマが互いにおつかり合つて凄まじい姿で、共に朽ちて行くのを見るであろう。」

「日の輝かざるを見ることもあるであろう。」

『地球の過去のカルマは、終る時はみな目の前に現われます。』と語られている。

「最後の瞬間まで、心の礼儀をもって、のんきの心を失わぬことである。」

地軸の傾斜により、水と火で地球上の一切のものが浄化される時が来る。しかし、この時が本当の世の終りの時ではないのだ。この浄化は地球の過去の迷盲カルマが消えて行く姿であり、現象の世の終りの姿である。もはや本当の地球は新しい世に入っていることを知らねばならない。新しい世の新しい意識をきり開いて行くのが今なのである。オイカイワタチは新しい世を創るために働いている。ニセモノでない本当の世のためである。もはやニセモノに追従してはならない。

ワンダラー達の働きにより新しい意識が地球に発見され、人々は古い束縛から離れていく。これが、りたく「離託」の戦いであり、新しい世へ移る心の戦いである。

このようにして古きものは新しきものに、とって変わられていくのだ。これには大きな苦しみが伴うであろうが、かくして人間は再び失われた神性を呼びもどし、地球を新しい世に引き継いでいく。

これが意識の世界で達成された時、現象の世界、地球は、姿、形ともに大きく変わるのである。愛とまことの惑星に。光に満つる神の国に……。

地球を新生させ、新しい世となしたのは、地球のワンダラー及びこの使命を持った方々のみでは、もちろんない。AZ様を始め、全宇宙の善なる宇宙人の方々、太陽の方々、神の席の方々、各遊星の神々のお働きと助けがあり、それにもまして、天の神様のたくさんいたわりと、助けがあったからである。(註これらは、あひま「無の世界」でのことである。)

今までの予言者、あるいは多くの方々が語る「世の終り」は、その殆どが、あひま阿鼻叫喚の世の終りである。この方々は、地球のカルマが残り、明るる世とならない、苦しみが残る世の終りを言っているのだ。そして、この十数年の戦いの中には、地球がそのような失敗の世の終りの寸前に至ったことも事実である。しかし、今回の地球の「世の終り」はそうではない。地球のカルマが解け、明るる世となり、神様の讃美を頂ける新生地球となり、人々は神様より死の靈感を頂いて、感謝の念こころの中で肉体の死を迎えるのである。そしてこれからはみなで、新生地球に神様をお迎えする準備をするのである。

私達の仲間の一人が、無の世界今回の地球が美しく変化したことは、ひとえに宇宙のたくさんの方々の助けを頂いたまものであると、金星にいくたのお礼とご挨拶を送った時、金星より次のテレパシーを受ける。

「さあ、私達は天の神様のいらっしゃる日のために準備しましょう。」  
この準備は各自が、天からの靈感をよく判り、自らの靈感で理解し、理解しがたきこと  
も、神を心に念じて行なうことによって、整えることができるのである。

「ワンダラーや、新しい世を創ろうと志した方々が、いや、すべての方々も、離託<sup>ワシ</sup>を  
する時がついに来た。そして古き地球との縁とゆかりを断つ時が来た。」

「これからの役をよく果たして、最期をみなで良く戦い、神様をみなで良くお迎えしよ  
うではないか。」

「地球にはすでにまことの愛が芽ばえて来ている。」

「世の終りの厳しく変化した、惑星の今回は、今までに見られなかった、地球がレタマ  
ヤ（宇宙語・神の大愛）の世の終りを迎えるに至って、みな節度をよく考えて、魂の礼儀  
をもって迎える。」

<sup>天の神様</sup>主の従える神々が降り給い、地球を讃美し、人々の魂を救い、人々は礼儀をもって、神  
の国の近づいたことを知り、（神様より古い地球の肉体を脱ぐ靈感を頂いて）死を迎える。」

## 第二部 終り

## 附の部 宇宙を垣間見て

## 附・第一章 宇宙人は語る

以下は、宇宙人は呼ぶ<sup>レ</sup>より、宇宙人の語る教訓を、編著者が抜粋要約したものである。これらの言葉は、今までに述べて来たことがらを理解するための参考になると考えられる。

○あなた方は、これからの思想、言葉、語らい及び行為に、真<sup>まこと</sup>からなる人間の最善の努力を尽くしなさい。

○混乱は、古い思想の範型から、新しいものにとって代わられる際、常に存在します。

○愛を与えるのは、友のあやまりを消す唯一の道なのです。間違った人々は実在するかのように見えるかも知れません。あるいは想像されているのかも知れません。しかし、も

しあなた方が心に迷いを与えるならば、この間違いは成長するでしょう。愛を与えることにより、この力を抹殺します。行為と行為者を許しなさい。

○あなたとほかの人達との語り合いの想念は、宇宙に反響します。ですから、ほんの少しの語らい、言葉、文章、意見を発する前に大いに注意をし、考えなさい。あなたの力は、愚かな不必要な語らいにより、それが容易に消え去ってしまうでしょう。

人の言葉は、人間本来の本質のままに語られ、話された時は、なんと美しいことでしょう。すべての創造物の中で、人間は幸福なる神の子です。この贈り物を正しく用いることを学んだ時には、驚くべき通信の形式がすべての人に潜在していることが、発見されるでしょう。

しかし、今の地球人には、万物一体が理解されるまでは、その贈り物を要求することも、また、それを発見することもできないでしょう。

○我々（宇宙人）は目に見えない姿であなたの傍にいます。あなたは内奥の耳で聞いて下さい。我々の語る言葉（テレパシー）に耳を傾けて下さい。あなたは私達の語らいを聞くでしょう。また、言葉そのものも聞くことができるようになるかも知れません。誠実

と瞑想により改善しなさい。

迷いと混乱は有害です。もしあなたが澄みきった心をもつならば、私達はもっと援助することができます。静かな場所で神の静寂の中に入り、気分を爽快にして来なさい。あなたを通じてほかの人が成長し、発達するのです。あなたはほかの人を通じて成長発達するのです。成長には常にある苦痛が伴います。カルマ（業）は必要なのです。

○輪廻りんねの道は、地球では、その役割はまだ示されていないのです。進歩、即ち目覚めがなされるにつれて、我々はあなた方に啓示するでしょう。あなたがたには、私達が傍に近づくと見れる目があいて来るでしょう。

○世界全体がその密度を高揚するならば、新しい遊星地球の中では、この密度で運営が行なわれるでしょう。

○いかなる地球人といえども、予備教育を受けるまでは、他のいかなる遊星にもつれて行かれないのです。他の遊星に行くには、ある一定の心境、心的バイブレーションになることが必要です。

○愛は危険にさらされた人のまわりに力の場を作ったり、狂った病をも治すのです。

○自分の生命を放棄するだけでは充分ではないのです。自己を殺し、己れの罪を、愛と寛容とをもって堪えることは試練なのです。

しかし、これではまだ充分ではないのです。すべてのものに耐える愛こそ大切です。

○サナンダはイエス・キリストとして地上に救助者として来たのです。

他人の罪の身代わりの贖い人としてではありません。教師として私（サナンダ）は来たのです。誰が他人の罪をつぐなえるでしょうか？

私（イエス）は世の人にいかにして愛せるかを示すために来たのです。人は自分自身によってのみ、鉄の足かせ（罪）を解放できるのです。

○死という状態の中に去って行く、幾百、幾千万の人がいます。これはあなた方自身の責任なのです。

さあ、真実に目覚めなさい。行って自分自身を救いなさい。

○原子の平衡はかき乱されてはなりません。それは自然の破壊です。原子の破壊は悪魔の力なのです。

○たくさんの人達は、種々の理由により、彼らの肉体を去って行くでしょう。そして、地球上において次に存在するべき高次の周波数の肉体へと生まれ変わるでしょう。この肉体は第四次の密度の肉体でなく、高度の周波数の第三次の密度の肉体なのです。

○地球上のいかなる人間も逆らうことのできない大小さまざまな大変動、大気圏の変調が起るでしょう。

○新しい周期は、地球が新しい地球（編著者注・わく、たまの祝事の儀式が行なわれ、地球が新しい世となり、現象界、霊界が大浄化された地球。）となった時にやって来るのです。

エジプトの地は新しくなるでしょう。砂漠には花が咲き、葡萄は谷に実るでしょう。ピラミッドはもはや、死の鑄型ではなくなるでしょう。

蓮の花が再び咲くでしょう。蓮の花の土地は、三度も海中に沈んだ大陸を意味しているが、その時から太平洋の底に残っているのです。ひとたび深淵の憤激の中に投げ入れられると、それは新しい体系の肥沃な陸地として、新しい黎明に、その栄光をもって隆起するのです。

○新しい秩序の世界では、日々は今と異なって計算され、貨幣組織はなくなるでしょう。遊星間旅行の時間は、地方に旅行するごとく容易になるでしょう。旅行ばかりではなく、すべてのものが新しく生まれ変わります。

私心のない奉仕の世界となります。

○大西洋の海底の隆起は大西洋の海岸線の沈下を来たすことでしょう。たった三つの山の頂きが大西洋の島として残るでしょう。

隆起した陸地の特徴は、東洋の新しい山脈のようになるでしょう。ゴツゴツしていますが、その地形はヒマラヤ山脈のようでしょう。その最高峰は、五、四〇〇メートルとなるでしょう。その陸地には古代の都市が現われ、山脈の端は赤道にまで至るでしょう。

英国の地はもはやみあたらず、フランスは大西洋の底になるでしょう。大ロシアの地形は、現在黒海と呼ばれているものが拡大して、地中海と一つになった海となってしま

うでしょう。これらは起こるべきものなのです。

○地球は、それ自身、小、中学校へと通っているようなものです。そして、これを卒業して高等学校（高い遊星）へ行く所にさしかかっているのです。この期にのぞんで準備をしていない者は落第するでしょう。そして、その人達は将来の高等学校の入学試験準備のために、他の小、中学校に行くのです。なぜならば、もはやこの新しい地球では、小、中学校のことは教えないからです。

新しい天と新しい地球となるのです。

○今のままでは、地軸の変化は必ず起こるものなのです。卒業期の変化が時と共に起こります。そして、地球はちょうど、卒業の組に滑り込むか、落第に落ち込むかのキワドイ縁かぢにあって、躊躇ちゅうちゅうしています。

キワドイ垣根かぢの縁かぢに立っているあなた方を、もし誰かが、その垣根の縁かぢをゆすぶるか、原水爆を打ち上げたならば、疑いもなくあなた方はバッタリと落ちることでしょう。

○これは、地獄の火と硫黄の問題を考えさせます。これは人間が造ったものです。人間が創造者の力を悪用したものです。即ち、原水爆発と放射能灰の地獄の火と硫黄の火のことを指すのです。

これは、人間を垣根かぢの縁かぢから暴力で押し落とすつつあることを意味するのです。これは地軸を突然に傾斜させやすく、そして自然の経過によって来るものよりはさらに激しい大洪水をもたらすでしょう。あなた方は、この光景を考えたことがありますか。

○現代地球の専門家達は、原子時代に入りつつあると考えています。これは、いかに専門家達が愚かであるかを証明するものです。それは、人間によって知られた最も短い時代となるでしょう。というのは原子分裂は破壊的な力であって、絶対に建設的には用いられないからです。

原子を分裂させることは、太陽系を分裂させるようなものです。なんとすれば、原子は太陽系の構成成分以外の何物でもないからです。これは太陽系を混乱に落とし入れます。これは、みなさん方を生命発生の第一段階まで逆もどりさせるのです。

○私達（宇宙人）の賢明なとりなし、即ち私達が原子戦争への出発を突然停止させるよう努力しなかったら……あなた方は、今よりずっと以前に、宇宙の塵ちりの斑点として、忘

却の彼方へ吹き飛ばされてしまっていたでしょう。私達はそれを絶滅の寸前で止めようとしたのです。

## 附・第二章 宇宙を垣間見て

これは、当時、宇宙人の語られた中から、宇宙を垣間見たところの一部の抜粋である。

△太陽系（我々の）について、

『この太陽系には惑星は十二個あるのです。私達はこれを次のように呼んでいます。』

6	5	4	3	2	1	☼	恒星	太陽	クレラオス
”	”	”	”	”	惑星	惑星	未発見	未発見	カール
火星	地球	金星	水星	未発見	未発見	未発見	未発見	未発見	ワルス
火星	地球	金星	水星	未発見	未発見	未発見	未発見	未発見	ハルス
火星	地球	金星	水星	未発見	未発見	未発見	未発見	未発見	ヘルス
火星	地球	金星	水星	未発見	未発見	未発見	未発見	未発見	サラス
火星	地球	金星	水星	未発見	未発見	未発見	未発見	未発見	マルス

7	惑星	木星	ニルス
8	”	土星	トレス
9	”	天王星	ホリス
10	”	海王星	イトス
11	”	冥王星	ミロス
12	”	未発見	バトン

△宇宙の中の原子の種類

「一五九種あります。全部天然の原子です。」

△一番大きな原子量を持つ原子の名前は、

「『ロルム』と言い、『陽性』で固体として存在します。」

「水素より小さい原子はありません。名前を『クイル』と言います。」

△月について、

「地球の衛星（月）は二個あるのですが、一個の月は地球のエーテルがないので見えな

いのです。大きさは、見える月より見えない月の方が、一・三倍くらい大きいのです。」

「月の凹面は、月が地球の引力圏に入った時、衝撃によりできたのです。」

「ソ連の学者が発見したアルフォンスの怪光は、噴火ではありません。火花です。それには宇宙人のある目的があったのです。」

月には宇宙人の基地があります。月のネキトカイ（宇宙人の基地名）には、一二五名（一九六〇年）います。」

「月のチコプラエ山から出ている白条は、地球の大気によってできた大溝です。」

△太陽について、

「太陽は、地球人が考えているような灼熱のガス体ではありません。固体です。気候、気温も他の遊星と余り変わりません。」

「太陽の黒点は、エネルギーの出た跡です。」

「粒状斑は、エネルギーのぶつかる波紋です。」

「コロナは磁場です。」

「太陽に人は住んでいられます。もちろん肉体を持った人が存在しているのです。」

しかし、遊星の人たちは自由に太陽に行くことはできません。神の方からその資格が

あると認められた方だけです。』

編著者注・他の遊星人の肉体のバイブレーションについては、心と魂にバイブ

レーションの段階があるように、肉体にもそれぞれのバイブレイシ

ョンの段階があるようである。だから、神の方から太陽に行く資格

が認められる方は、それ相応の周波数の方であると思われる。

△惑星について、

『木星と火星の間にある小遊星群は、ルシファーという遊星が爆発してできたのです。』

『地球のシベリヤの森林地帯に落ちたのは隕石ではありません。金星の記録用円盤のもので。直径四〇メートルです。』

『金星も地球と同じように人種があります。』

愛

調和

万物一体

自然

の、宇宙の四大法則のもとに結ばれております。』

『金星における食物は穀類と菜食ですが、食事を必要とする人、必要としない人、それぞれあります。睡眠を必要とする人、必要としない人、とあります。』

『どの遊星にも霊界はあるのです。金星にも霊界があります。金星の人達は霊界と自由に往来もでき、自由に話をします。』

『金星にもライオンや虎のような動物もおりますが、どれもみな、とてもよくなつています。』

『金星から地球まで、私達は地球の時間で10分間で来られます。』

△レムリア、アトランティス両大陸について、

『レムリアとミュー（ムー）大陸は同じです。』

レムリア大陸は、太平洋の南から北にかけてありました。

アトランティス大陸は、ヨーロッパからコーカサスまでを指すのです。

アトランティス大陸よりレムリア大陸の方が古い大陸です。』

『レムリア大陸は、………一〇、五〇八年前（一九六〇年より）に沈没しました。

アトランティス大陸は、…一〇、二〇〇年前（一九六〇年より）に沈没しました。

『地球で言われているエジプト文明は、アトランティス大陸から残った文明である、と

いう説は、ある面では正しいのです。」

「レムリア、アトランティスのある時代には、円盤を持っておりました。他の遊星人との交わりもありました。しかし、大陸の沈没と共に当時の文明はなくなりました。」

「私達が地球人達と最も密接な交流をもったのは、レムリアやアトランティス時代にまさかのぼります。」

「私はレムリア時代に地球におりましたレムリアの者です。他の者は諸々の星に行きましたので、私が代わって挨拶をあなたの方に送ります。私は地球では「エニト」という名前でした。」

「私は地球で一〇三回生まれ変わり、地球で学ぶ教程を終えて自分で生命をたって、私は霊界から金星に行きました。金星での名前は「タンテス」と申します。」

「地球の方でも、魂が進化すれば、他の遊星に行くことができます。」

「レムリア大陸の沈没の原因はカルマです。初めは愛の溢れた所でしたが、やがで諸々の愛を悪い者が破壊したのです。言わば、地球の至らない、私達（地球人、レムリア人）のカルマに他ならないのです。」

「弱いあなた方の、前より大きいカルマと試練に向かって、勇ましく戦って下さい。今

は、判っています通り、私（エニト、金星での名、タンテス）の一番気になることは地球の最期のことです。」

「レムリア大陸沈没の時は、宇宙人の援助の手はありませんでした。それは地球人自身の学びのためです。その時は生き残った人達はありませんでした。」

しかし、今度の地球の最期には、他の遊星に移される人以外は、みな肉体は死にます。他の遊星に移される人は、地球を再建する働きをする人達です。」

附の部 終り

再び言う／＼ その時には／＼

『金星のサナンダという、金星の者が来ました。』

今は喜ばしい時です。

愛に満ちた者の、すべてに打ち勝つ時が来ました。

ただ真の神を信じて、

愛の心を持って、恐れずに行きましょう。』

完

## あとがき

本書は、最初にも述べたとおり、円盤・宇宙人問題を、世間一般の円盤書籍とは異なる面から掘り起こしたものである。私達は、宇宙に存在する膨大なことから、特に一筋の系を手繰りよせたのである。そして、この系が円盤・宇宙人に始まり、リング、ワシントン、オイカイワタチ（オリカイワタチ）へと関連し、太陽系の一遊星の運命を左右するほどの重要な問題へと続いてゆく大切な太い糸であることを発見した。本書は私達仲間がこの一筋の系を探求し、追跡し、その戦列に加わった心と魂の記録である。従って、これは一個人の記録ではなく、私達仲間全員の記録である。それを私が取りまとめ、さらにこれらの記録を判りやすくするために他の文献へ「宇宙人は呼ぶ」「宇宙交信機は語る」ほか）からも、文章を借りて、それらを編集したものが本書なのである。

本書の題名『オイカイワタチ』は宇宙語である。題名の意味からくる話題に「的」が絞られたのは当然のこととして、しかもその内容においては、発表してさしつかえない限

度において、かなり深くまで書かれているのである。だが、これらの問題は、そのほとんどが、*「無の世界」*への働きかけであり、目に見えない戦いであるだけに、文章として記述するのはむずかしい。それに加えて、私が文筆家ではないところから、真に意図することを充分には表現できなかったようである。従って、本書を書き終えた今は、そのために、本書の真意が誤って伝わるのではないように祈るのみである。願わくば、真まことから真まことに通じるテレパシーで、靈感で判って頂きたいと切望するものである。

たくさん宇宙の方々が私達仲間を導いて下さった長い月日の間には、いろいろのことが起こった。私達仲間には、迷いも生じた。妨害のテレパシーも受けた。時には争いも生じた。苦しみのために離れて行くものもあった。それは苦難の茨の道であった。しかし、いつ、いかなる時にも、どんな大変な事態に立ち至った時でも、彼ら宇宙人からは、

*「我々にものごとを強制するような、あるいは、他の悪口、蔑み、誹謗、攻撃する*

*ような言葉の片鱗すらも一度も聞いたことがない。宇宙人は、いつも、節度、忍耐、敬度の心の礼儀をもって臨まれ、愛とまことの響きある言葉に満ちあふれておられたのである。」*

この真実が、私達を今日にまで育ててくれたのである。私は宇宙人の語る言葉を今までに何回思い返したかわからない。しかしその都度、私は、心の中に新しい目覚めを見出し

るのである。この点は、本書の読者のみなさんも、きっと同感されるであろうと信ずる。

今地球にいるワンダラーは、特に日本に生まれたオリカイワタチとワンダラーは、この地球での役目が終れば、後に待っている次の遊星目指して、再び遠征の旅に出発するであろう。

しかし、次の遊星では、この地球ではあった、*「特別の手段」*はもろろんない。更に、*「ワンダラーの聖戦」*、*「オリカイワタチの使命」*についても今回の地球にあつたごとく、意識の面にかくまでも自覚を深めてくれる援助はないのである。その理由は、この地球で、良く目覚め、重い使命を果たしたことが次の遊星への良きカルマとなつて残り、次の遊星での、*「目覚め」*と、*「果たす使命」*はできやすい良いカルマとなるからである。

奉仕の使命カルマを持つ者にとっては、自分の果たすべき役を意識の面においても深く自覚して働くことが、極めて重要な意味を持っているのである。それはこの地球においても、次の遊星においても同じことである。この地球で、意識の世界での自覚を深めておくことは、次の遊星においても同じ自覚に容易に目覚められることを意味する。反対に、もしこの地球での働きが自覚の意識にまで達せず、無意識に終る場合は、次の遊星においても無自覚に落ち入りやすく、進む道を誤りやすいことを意味するのである。

この意味からしても本書は、奉仕の使命カルマを持って生まれた方々の心に重要な働きをなす

# オйкаイワタチ 〔非売品〕 編著者 渡 邊 大 起

オйкаイワタチとは宇宙語である。その意味は………  
 『神様の命を受け、神様の手足となることを一人一人が心に誓って進化の周期の来た遊星（地球）に生まれ変わり、その遊星（地球）を神様の世界とする目的のために身を挺する魂を持った人達（ワンダラー）の集まりである。』（本書115頁）

<b>第 1 卷</b> (本 書) A 5 版 235頁	昭和33年から49年までの17年間にわたるワンダラーのこの地球での聖戦の足蹟を記す。 第1部（6章）円盤・宇宙人と来訪の真相／第2部（9章）オйкаイワタチの使命／附の部（2章）宇宙を垣間見て。 地球の「無の世界」における聖戦の記録など。
<b>第 2 卷</b> 〔別冊1・2 合 本〕 A 5 版 227頁	昭和50年から52年4月までのワンダラーの「世の終わり」と「新しい地球誕生」の戦いの足蹟を記す。 別冊1（3章）は地球の「無の世界」における聖戦。天の神様、神々を従えて地球に降り給う、など。／別冊2（4章）は地球の「霊の世界」における聖戦。新しい世の王を頂く、など。
<b>第 3 卷</b> (別冊3) A 5 版 294頁 口絵、カラー 8頁	昭和52年11月までのワンダラーのこの地球での戦いを具体的に記す。 第1部（3章）鏝球王国の霊の世界誕生、—地球の「霊の世界」における聖戦。／第2部（6章）鏝球王国の建設、—地球の「たましいの世界」における聖戦など。／附「新しいワンダラーの誕生」。
<b>第 4 卷</b> (完・上) A 5 版 297頁 口絵、カラー10頁	昭和53年12月までの聖戦、即ち、「形の世界」の目に見えない霊界、幽界における「世の終わり」と「新しい世の誕生」を記す。 第1部（7章）万たるワンダラー誕生、「鏝球王国の国造り成る」など。／第2部（2章）新しい地球、鏝球王国完成、「天孫降臨」など。／第3部（5章）レタマヤの世の終わり、「エクトルの儀式」、「古い地球葬送」など。／巻末に年表。
新刊、 <b>第 5 卷</b> (完・下) (附・講演記録) A 5 版 380頁	昭和56年1月をもって天の神様のなさる儀式、即ち『湧玉の祝事の儀式』は全て終了し、「形の世界」の現象界において、いよいよ「その時」が来た。世界中の全ワンダラーが働く本番の時が来た。 第1部（4章）「形の世界」（霊界・幽界）の聖戦終わる「みそぎ」など。／第2部（2章）「形の世界」（現象界）の終末の期を迎える「万たるワンダラー、儀式に参加」など。／第3部「湧玉の祝事の儀式」／第4部「ワンダラーの使命は開始された」。 「形の世界」の霊界・幽界、現象界での聖戦。 巻末に講演記録および年表。
<b>講演記録</b> あなたの使命は開始された！ A 5 版 88頁	昭和55年2～5月にかけて、大阪、東京、札幌で行われた「オйкаイワタチ大講演会」の講演記録である。（第5巻の末尾にも全体を収録）真の目覚めと使命の自覚のための助けとなるものである。 世の終わり新しい世の建設を担われる「真、の判る多くの方々—光る魂の方々—への呼びかけに役立つ書である。

発行所 **オйкаイワタチ出版会** 〒486 愛知県春日井市御幸町2の6の18 東海理化販売ビル内

ものであると確信する。  
 かつての地球は、どす黒いたかるカルマに覆われ、今まさに悪の手に落ちなんとしていた。破滅に至らんとするこの地球を、天の神様は、大きな愛の御手で抱えて、今日の『約束の時』を、よく奉仕する者たちの働きを、涙の愛で、忍耐強く、じっと待っておられたのである。天の神様の深い愛と、たくさんのいたわりと助けがあったからこそ、無の世界において、地球は新生し、新しい世となることのできたのである。感謝の落涙に咽びながら、このことを大書して、あとがきとしたい。

なお、本書は縦の糸（ワンダラー）を主として述べたが、横の糸である、地球の真に目覚めた方々の良い働きと相俟って、神様の御業を織り成したことを申し添えておきたい。

最後に、本書発刊にあたり、たくさんのご協力を頂いた多くの仲間の方々に、そしてこの印刷のためにいろいろ親切な援助を下さった加納ご夫妻に、感謝を申し上げる。なお文中には、新・旧の送りがなが混じっていることをご了承頂きたい。

拙本書に興味と理解と共感を頂いた方々とは、目に見えない糸で結ばれて、あるつながりを持っているものと信じます。私はその方々と今後お互いに助け合い、励まし合って、新しい世のために尽くして行きたいと念願しております。また、あなたの知人で同じ志の方に本書をご紹介下されば幸いです。

一九七五年四月八日  
 天の神様をお迎える準備が、この地球に整った佳き日  
 渡 邊 大 起

●「オйкаイワタチ」は第1巻～第5巻の5冊より成っておりますので、この順序でお読み下さるようお願い申し上げます。（途中からでは真意が御理解になれません。）  
 ●上記書籍及びしおりを御希望の方は、「オйкаイワタチ出版会」にお申込下さい。

## オйкаイワタチ 第一巻(本書) [非売品]

---

昭和50年 6月16日印刷発行

昭和52年 6月29日 再 版

昭和53年 8月28日 第3版

昭和56年 8月28日 第4版

編著者 渡 邊 大 起

発行所 オйкаイワタチ出版会  
〒486 愛知県春日井市御幸町2の6の18  
東海理化販売ビル内

印刷所 加 納 印 刷 工 業  
〒461 名古屋市東区水筒先町2-12-29  
TEL052-937-7121

---